
月は環て天に光

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月は環て天に光

【Nコード】

N0489D

【作者名】

遼

【あらすじ】

池に溺れてた女の子はテンシでした。告げられたのは、陽介が消えるということ。そんな事実、二人は必死に抵抗を試みるものの、特に何かをしているようには見えない。そんな話。

プロローグ（前書き）

よろしくお願いします。

ブローグ

俺が通う高校の通学路脇には大きな池がある。公園が併設されている、それと合わせて水辺公園というやつなのだが、ここには様々な曰くがあった。

曰く、転落死した子供の泣き声が聞こえる。

曰く、以前ここは墓地で、丑三つ時になると埋められた霊達の怨嗟が響く。

曰く、水底がない。

などなど、そりゃあ碌なもんじゃない。極め付けというには余りに陳腐、というよりはそれらの対極に位置するものだが、こんな噂もある。

曰く、神という名の真実がそこにある。

学校の授業からの影響か、誰の哲学を支持するかは別としても、それらを完全に否定しているわけじゃない。むしろイデア論なんかには多大な興味をそそられるくらいだけど、それが存在するかどうかは別問題だ。

霊に始まり天使、悪魔、閻魔、それから神様エトセトラ。百歩譲って魂があるとして、それらが実在するのなら、きつとこの世はより混沌としていたはずだ。「不思議」が跋扈し、世界は絶望と希望に溢れ、導かれた魂は「全てに平等な神」によって取捨選択され来世を過ごす。酷い矛盾もあったものだ。アストラル、幽界を信じていたら、きつと人間は駄目になる。リアルが全て、現実に取り得ること以外に、現実には何も起り得ないのだ。

きつとそんな風に達観ができるほど成熟した精神は持っていないだろうし、自分でも相当捻くれてると思うけど、少なくともこの考えを覆すものとは、十八年間生きてきて一度も出会ったことはない。もつとも、出会えるはずがないのだ。趣味は特になく、休日といえば近所を散歩して回るくらいしかやることはない。ゲームは単調で面白くないし、読書をするには物事を整理する能力に欠けていて、ネットは情報の氾濫で脳が付いていけない。頭の回転が遅い俺には、散歩くらいがちょうどいい。子供達と戯れていれば、それでよかった。そんな俺に、彼らのように特別な存在が介入する余地などないのだ。

ともあれ人生に退屈してるわけじゃない。満足というわけでもないけど、俺の傍にいてくれる人の前なら、しっかりと頑張っているだけの人生だ。さりとてゲームほど大きなイベントはなく、ゲームほどに単調な人生。

この日の天気は晴れ、突き抜ける蒼穹に輝く太陽が目についた。空気を挟むような陽光とそよ風、草木がざわめくと風鈴などよりよっぽど情緒的だ。日常に潜む影などそこに感じられるはずもなく、この日がまさか俺の考えの全てを覆すものと出会った日になるなんて思っているはずもなかった。

ここは都会というには余りに粗末だが、田舎というわけでもない。ビルが一番高いもので十階建てで、かといって寂れるというには喧騒が耳に痛い。住宅街に入れば空気は割と綺麗だし、その中の公園にはたくさんさんの草木が整然と植わっている。つつじ、藤棚、桜の木、名も知らぬ花も含めれば、把握できる量はとうに凌駕している。

そんな中でいつも通りに子供と戯れていると、時間を忘れてしまふ。陽光に焼かれても、風に流されても、草木のざわめきに惑わされても、特に何を思うでもなくそこにいられる。こういうのをきつと、「夢中」というのだろう。

故に、だろうか。子供からの人望は篤く、俺が公園に行けばたくさんの子供に囲まれる。あだ名はそう、「陽にい」だ。陽介から、

というのが八割。残りの二割は、俺が子供達の前で屈むことが少なく、見上げていると後ろには必ずといっていいほどに太陽が浮かんでいたから、だそうだ。

その代わり、同年代の友達が少ない。話題もなく、かといって話術が得意なわけでもなく、愛想笑いすらできない上に返事はいつも単調で無愛嬌というのだから、友達なんてできなくて当たり前だ。敢えて挙げるなら、それを心配する幼馴染くらいのもだろう。

幼馴染の八代月代^{やしろぐさ}。名前の通り、俺の対極に位置する人間だ。校内でも有数の美人で、人望もあり様々な才媛に恵まれ、努力を惜しまない不屈の人。ああ、正しく完璧だ。

何の因果で俺の幼馴染になり、そしてお節介などという余計な性格を授かってしまったのかは知れないが、とても可哀相だ。言っではならないことなんだろうけど、俺と出会っていなければもっと多くの友達と仲良く遊び、恋人と囁き合い、もっと充実した人生を送っていただろう。それをどうだ、俺に付き合っただけで枯れた遊びばかりで過ごす日々だ。

言っても聞かない。放っておけなんて言葉で、もう口が酸っぱくなった。

今日もそう、月代と一緒に公園で子供達と戯れていた。つばの白い帽子と白い日傘をした月代の笑顔は、子供達のそれをたくさん引き出す力を持っている。それをベンチから眺める俺の傍らにも、同じく白い日傘を差した女の子が一人おり、彼女の笑顔もまた快活で見目麗しかった。

「お前も暇だなあ。どうせなら月代に遊んでもらえばいいのに」

「やばったいいこといわないの！ めぐは、陽にいと一緒がいいの！」

「あ、そう」

こいつも大概変わり者だ。月代と一緒にいた方が絶対楽しいだろうに、毎日俺と一緒にそれを眺めている。

俺が囲まれているのは自身が満足するまでだから、或いは子供達よりずっと子供だ。この子達が俺の影響で独善的な大人にならない

ことを祈るばかりだが、基本的には月代の影響を受けやすいのがこいつらだから、問題はない。ただ一人、この子を除いて、というのが今のところの懸案事項だ。

「もつとさー、ああいういい女を見て育った方が将来の為だぞ？」

お前、絶対美人になるからさ」

「ほめられるのはうれしいけどお、他の女の話は聞きたくないなあ」

「マセガキが。歳相応の発言をしなさい、歳相応の」

「陽にいに言われたくないもんねーっだ」

「ご丁寧に舌を出してから、環は鼻息を荒げた。女の子らしくないその所作を叱ると、どうしてか笑って俺の腕に縋りついた。腰まで伸びる長い髪が、俺の胸元で揺れている。」

「環も月代も、そんな長い髪面倒じゃないの？」

「月ねえはどうか知らないけど、めぐは別に。たまにだけど、お母さんに洗ってもらえるし」

ため息一つ、内心鼻で笑ってやった。女を意識する割にこういう発言をする辺りは、やはりどこまで行っても子供は子供だ。分不相応な思想を抱いたところで、相応の限界が存在するってわけだ。

ふつと零れた笑いに愛想は存在しなかったけど、それを気にせず隣の環を抱き上げる。傘が少し邪魔だけど、まだ小学四年生、軽いものだ。

「わ、わわ。陽にい、どうしたの？」

「歳相応の遊びを教えてやるんだ」

「むー！ おろせ、おろせー！」

手足をばたつかせて喚く環の口元は、それなのになかなか満更でもなさそうだ。子供が見せる無邪気さ、或いは幼い部分というのはどうしても憎むことができない。それが征服欲に由来するものなのか、それとただ純粋なものに惹かれたのかはわからないが、ただはつきりしているのは、環が「女」でなく「女兒」である、ということ。

子供はいい。心が洗われる。

「月ねえのところ、行こうな」

「はーなーせー！ あ、そうだ、池見たい！ お池！」

歩き出そうとした俺を引き止めるように、環は一つの地名を挙げた。

あめのつか

彼女が言う雨塚は危ない噂がたくさんあるし、正直なところ環達のような子供は連れて行きたくない。しかしそれはあくまで子供の我が儘だし、何よりこの子らの親御さん達には「ちゃんと見ていれば」と言われてる。結局暴れる環の要求に逆らえることはなく、公園から数十メートルほど離れた池のほとりに向かって歩き出すのだ。もちろん、環は抱えたままだ。

その池はとても綺麗とは言えない、ヘドロに濁った濃緑色をしている。もちろん水面から先一メートルも見えないし、水底なんてもつてのほかだ。広くはなく、代わりに口を開いた深遠がどこまでも空恐ろしかった。ほとりには小さなフェンスと、その脇に季節毎の花が植えられている。今なら梅雨時だし、紫陽花なんか盛んにその花を誇示していた。

「相変わらずきつたねえ池だなあ、雨塚」

紫陽花の頭上から雨塚を覗き込んだ俺の汚い言辞を、環はどう捉えただろう。思うのは、それは結局親の教育次第ということだ。正しい言葉遣いにこそ健全な精神が宿ると言うけど、そもそも教育と遊戯は別物で、それを区別する能力こそを親は教えるべきだと思う。「じょうちよを知らないね、陽にいは」

「せめて漢字を書けるようになってから発言しような、環は」

「むー！」

環は間違いなくいい子だ。基本的に危険なことはせず、人を無闇に傷つけるようなこともない。我が儘の範疇を越えることのないというのが、多分子供の理想だろう。

ため息を零した環は、吹き抜けた風に機嫌を回復させ、日傘の下で微かに笑んだ。

「風がきもちーね。陽にいのうでもあったかいし、いい気分だな」

「うーん……環にもう少し凹凸があれば俺も気持ちよかったけど」
「……もつつ、えっちだなあっ！」

ませた環は、そんなセクハラ染みた俺の言葉に露骨な反応を見せ、その白い傘を回した。

いずれにしたって、今が俺の理想的な時間であることに変わりはない。子供が少しと、静かな時間。これがあれば他の何もいらないと思えるくらいそれは満たされていて、こういう時くらいは環相手でも紳士的になろうなんて考えられる。

「どうしたの？」

「ん……嫌か？」

「んーん……きもちー」

梳いてやる茶髪の下、その笑顔は、どうしてかそれなのに寂しそうだ。小学四年生なりに悩みくらは抱えていて、それが俺に関することだ、くらいのものだろうか。余り期待に応えるということが得意でない俺は、だから期待されるのも苦手だ。周りを裏切るのは辛く、それはつまり周りに裏切られることを恐れているのに相違はない。

だから、動かない生活を望んでいる。子供達は、総じていい子だった。

「陽にい、あれ」

動かないはずはない。ヘラクレイトスだって言ってた。世界の原初——アレテ——は「パンタ・レイ（万物流転）」によって成り立っているってさ。

「なんだろ……水しぶき？」

「なんだろじゃないだろ。あれ、人だ」

「……おぼれてる？」

「落ち着いてるなあ、お前」

人は窮地に立たされると逆に冷静になるというが、今が正にそれだろうか。頭の中を覗いてみれば、きつと色もなく、中身も何も入っていないだろう。

「助けなきゃー」

「お前泳げないだろ」

「めぐは泳がないよ?」

俺か。そんな酷な。

「がんばれー」

子供の期待に応えないわけにもいかない。いかに苦手といっても、今すぐに実現可能なことに關しては別問題。子供と付き合う上での、最低限の努力だ。

或いは被害者の為でなく、環の為。環を腕から下ろしシャツを脱ぐと、自分でも驚くくらい豪快に池に飛び込んだのだった。その深淵の恐怖を感じたのは、それからすぐのことだ。

「ありがとうございますた」

噛んだ舌が痛そうな女の子を眺めていると、どうにも妙な気分になる。他でもないこの子の容姿がそうさせるのだが、果たしてこの国の——この世の人間なのか。

白銀の絹糸、蒼色のビロード、そして白磁。それらが構成部品で、その身体はびしょ濡れの白いサマードレスに包まれているが、少し火照った艶かしく、白い肌が僅かに透けている。繊細でシャープな印象を受ける身体のラインは、正しく現代の女が理想とする体型に違いない。ないはずの神の存在すら認めてしまいそうなほどの、完璧な造形がそこにあった。

「うつ……ついてないなあ」

「そうだな。俺もそう思う」

「で、でも、貴方に会えたのは僥倖でっ」

その理知的な印象とは裏腹に舌足らずで、さっきから何度も舌を噛んでいる。しかしそれに敏感な反応を見せられるほど、今の俺に時間などなかった。

「なんだってあんな池のと真ん中で溺れられるんだ?」

「えっとお……長くなりますけど」

「じゃあいいや」

「ええー……？」

さもありません、今の俺は身体を痙攣させている状態だ。この子の無反応を見ると自信はなくなるけど、夏に差し掛かるうというこの時期に、どうしてこの池はこんなにも水が冷たいのだろう。それを解消する為、環にはタオルを取りに行かせた。さすがに見ず知らずの人間を家に招待するわけにもいかず、仕方なくだ。

「あの、お名前伺ってよろしいですか？」

「生野」

「……それは苗字ですよな？」

蒼い瞳が俺のそれを、少しだけ咎めるように覗き込んできた。手を取られ、彼女の長い睫毛が揺れるのに気付くと共に身体の震えは収まり、その代わりの寒気を催した。鳥肌が身体中を支配する感覚に襲われ、思わず身体を引く。

この子の瞳は、少し怖い。ただ覗き込まただけなのに、どこまでも深くを知られたような気分になる。嘘がつかない。

「陽介」

「生野陽介さん、ですね。うん、らっき」

彼女の身体を離す為に不意ながら名前を明かしてしまつて、少しだけ不安になった。その瞳に逆らえないのはともかくとして、状況を省みるに、この子以上に怪しい人間がいるかどうかもわからないくらいこの子には見えない部分が多かった。この容姿じゃあ、人種すらも特定できないじゃないか。

身体を離すと共に手も解き、その視線に問い掛ける。

「君は？」

「ええと……セレネと申します」

「何人？」

「何人——ああ、そうですね……余り馴染みはないと思いますが、アマツカの者です」

不思議な響きだ。アマツカ、という名の国に覚えはないけれど、

それがどんな場所かは容易に想像がついた。きっと、美しい場所なのだろう。

「きつたない場所ですよ？　なんというか、この世の混沌を一手に引き受けたような場所ですね」

というわけでやはり想像は想像に過ぎない、ということを知った俺だが、生憎納得ばかりはできそうになかった。アマツ力などという場所は、少なくともこの近辺には存在しない。この街を観光することの無意味さが、つまり国中探すことの不毛さを示している、というわけだ。要するに、そんな場所はない。

不審者認定の瞬間だ。

「俺、皆のところに戻らないと」

「あの子は待たなくていいんですか？」

舌足らずな印象とは裏腹のその機知はやはり健在らしく、痛いところをついてきた。確かに環はタオルを届けにこの場所に帰ってくるし、そこで俺がいなければ最悪泣き喚くだろう。

ああ、やっぱり妙な親切心なんか見せず、助けたらすぐに退散すればよかった。

「それにですね、陽介さんには用があるんですよ」

「あ？　……用？」

初対面の俺に何の用があるのか、という以前に、まずセレネさんとやらの心を許したつもりはない。何より、この瞳を長い間見ていたくなかった。

「大事なだいーじな、お話なんですよ」

「ふーん……聞いたら帰っていいの？」

「はい。あ、でもでも、あたしも連れてってけると嬉しいかな、と」

却下の旨を親切にオブラートに包んで伝えてやると、意外と簡単に納得してくれた。寂れた田舎町に泊まる芸能人でも相当に迷惑だというのに、全く見ず知らずの人が突然家に押しかけるなんて不興極まりない。それがセレネさんみたいな美人でも、だ。

しかし溺れていた人間を無下にはできない。せめて大事なだいーじな話だけは聞いてやろう。

近所に住む環が戻ってくるのを待ってからそれを聞くと、なんとなくに感じたのだった。ああ、これから世界は変わっていくんだな。そして泣き喚く環の頭を撫でながら、セレネさんを受け入れる準備を進めることを決意した。

要点など一言でまとめられる。

「貴方、一ヶ月後に消えまぶお」だそうだ。

大事なだいーじな話でも、やはりセレネさんは噛んでいた。

1話

月代は、俺が一人で登校しようとすると思わず憤慨し、「置いていかないで」と泣きそうな顔で窘めてくる。何を切っ掛けにして俺を直接的に求めるようになったかはもう覚えてはいないけど、ただ言えることは、彼女が孤独を極端に嫌悪する性質だということだけだ。染めた様子もない淡いブロンスの髪は、長く肩甲骨を越えているのに、まったく傷んだ様子もない。触っていると、絹やカシミアなんかよりよっぽど滑らかで、そして艶やかだった。サイドテールにしたそれはそのくせ羽根のように軽く、同じ色をした瞳と合わせる、とても同じ世界の住人だとは思えないほどだ。絶対的に見ればセレネより少し劣るかも知れないけど、相対的に見れば立派に比べられるだけのビジュアルを持っている。要はベクトルの違いだ。

俺がいなくても、一人にはなるまい。月代は仲良く笑い合えるクラスメイトが多い。それに見合うだけの努力をしてきたのだから当然だ。でも、俺にはそれが氣に入らなかった。辛く当たってしまうことも、たまにあっただろうと思う。

だからだろうが、セレネのことも話そうとは思わなかった。なんのことはない、子供が抱くような反抗心、或いは月代の人格に対する反骨心というものだ。報告しなくてはならないこともわかりながら、それを聞いた月代の反応や、セレネに対する彼女からの言葉を聞くのが怖かった、というのもある。

だから月代は、今日も穏和に笑っている。朝靄は晴れたばかりで、日光もまだまだ淡い午前六時のことだ。

「陽、おはよう」

「ん。今日もご苦労だな」

「もう、習慣になっちゃってるから」

微笑とも苦笑ともつかない笑みを浮かべ、月代は遠慮がちに土間を上がった。玄関先の土間からまっすぐのところのリビングがあり、彼女はいつも――毎日朝食を作りにくる。父さんも母さんも仕事に忙しく深夜まで起きている為、朝くらいはゆっくりして欲しい、という気遣いだが、実の息子でなくお隣さんの女の子がそれをするのは果たして正しいのか。

疑問はあるが、それを正そうとは思わない。彼女が望んでやっていることだし、何より面倒が減るのは大歓迎だった。

「今日はね、いいバターが入ったの」

「ふーん……そりゃ楽しみだ」

「絶対ぜったい美味しいよ。間違いないよ」

無欠ともいえそうな彼女だが、惜しむらくは少し言動が幼いことだろうか。俺が子供と遊ばせすぎたのが原因かと思うと少し申し訳のない気持ちにもなるが、少なくともそれを嫌う人間はいないし、俺としてはそれを可愛く思っている。大丈夫、月代は穏やかで可愛い顔をしている。

キッチンに入った月代の後姿を眺めながら、リビングのハンガーにかかった制服を着込む。ブレザーはタイを結ぶのが面倒という難点こそあれど、学ランに比べると大分ルーズで着心地がいい。中学から高校へ上がった時に、これが意外なカルチャーギャップで驚いたものだったが、もう慣れて久しかった。

「ねえ陽、お塩とおしょうゆ、どっちがいいかな？」

多少褪せた生地に染みこむように背後から聞こえた声は籠っていて、元々小さな彼女の声では少し聞き取りづらい。それが明確に聞き取れるようになったのは、確か中学に上がってからのことだ。

「ねえ、陽ってば」

「んー、塩かな。今日はちょっとイメチェンってことで」

「目玉焼きにイメチェンも何も、ないんじゃないかなあ」

小さな声の後、時折ではあるが、月代は目を伏せる。そんな時は決まって、何かを隠そうとしている時だ。今なら、こみ上げてくる笑いを堪えている、くらいのもものだろう。

「月ねえには世話になるなあ」

「やめてよ、月ねえなんて。らしくないよ」

「月代、ってさ、変わった名前だよな。それに、八代月代だと、読み方違うけど『代』が重なるよな。おじさんもおばさんも、ちゃんと考えたのかな？」

「考えてくれたよ……可愛い名前だもん。それに友達がつけてくれたあだ名も好きだな、ヨヨちゃん、って」

それも以前から疑問に思ってたんだ。いくら「代」が重なるとはいえ、「ヨヨ」はないだろう。余りのハイセンスぶりに、開いた口が塞がらないとはこのことだ。

まあ、俺にはあだ名をつけるような友達はいつしかない。悩む以前の問題だ。

「陽にはねえ、バターもつけてあげる。塩バター、美味しいよ」

「ああ、うん。まあ、いいけどね」

「ほつぺた落ちちゃうんだから」

「お前も大概あほだなあ、言動が」

首だけ振り返って俺を睨む月代にしかし迫力などあるわけもなく、結局微笑ましいという感情しか浮かんでこない。何より、この子は俺に対して本気で怒ったことが一度もないのだ。盲目、或いは妄信だろうか。

悪い気はしない。学校のアイドルを独占しているようなものだ。

「そんなこと言う陽には、食後のヨーグルトあげないんだから。せっかく美味しいブルーベリーが入ったのに」

「お前、結局何でも美味しいんじゃないの？ 不味いものあるのか？」

「知ってるくせに。わたし、ジャンクフードの類はどうしてもな」

庶民派アイドルに見えそうな彼女だが、意外にも高嶺に位置する性質も持っていたりする。舌が肥えてる。それも、極端にだ。

今作っている朝食もそう、実は彼女の家が独自に取り寄せた厳選素材を使った高級品だ。何度その恩恵を授かったかは覚えていないほどで、しかし彼女はそれを鼻にかけたりはしなかった。

高嶺の花が、庶民代表格であるファーストフードの味を初めて知ったのは、俺達が中学二年の頃だったと思う。余りに世間知らずな月代を心配した俺が一肌脱ぎ、おばさんの監視網を潜り抜けて近所のハンバーガーショップに連れて行った。その時の彼女は結局一口食べてギブアップしたけど、それもまたいい思い出だ。

「妙に脂っこいんだもん。あんなの食べたら、健康によくないよ」

「いいんだよ、それが目的で食べるようなもんだ」

「健康を損ねる為に食べるの？　なんか、本末転倒だね」

食事の目的を考えると、確かにそうとも言える。ただ、あのチープさは時折恋しくなるものだ。毎日月代の相手をしていると、たまに小湊こみなととも話したくなる。そういう感覚に近い。

「月代はだな、もう少し不健康になるべきだ」

「いやだよ。それに、生活なんてそう変えられるものじゃないでしょ」

「どうかなく。せめて夜更かしくらいしような、例えば朝寝坊——」

月代がキッチンから出ると同時に階段から足音が聞こえ、次いでリビングの扉を開いたのは、昨日からの居候だ。肩までの銀髪は眠後であるにも関わらずちつとも癖がついた様子もなく輝いている。

彼女は、その超然とした容姿の割には、とても気安かった。

両親には、俺が彼女のことを「信用できる」と言っておいた。元々放任主義かつ、信を置かれているだけあって、簡単に許してくれた。

「ああよーごあいまう」

「——そうそう、こんくらいだらしなくだな」

「……陽」

彼女を認めたその月代の声は、今までに聞いたことのない色を持っていた。敢えて言うならそれは青、とても冷たい色だ。

「誰、その子」

失態に気付いたのは、そこでようやくだ。セレネのことは内緒にしておくつもりだったのに、まさかこんなにも早く露呈するとは思ってもなかった。毎朝この家に来る彼女に会わせないなんて、実質不可能だったのに、だ。

ため息一つ、眠気眼のセレネを月代に押し出すと、少し驚いたセレネはその冷たい視線に萎縮しながらも、気丈に笑う。

「セレネと申します」

彼女がセリフの途中でいちいち噛むのにも、もう慣れた。

「陽と、どういう関係？」

「関係？ 何でしょう、ただの居候ですが」

「ふざけないでっ！」

その大きな声とは対照的に、数瞬ばかり、空気が凍ったような錯覚に襲われた。

空気が戻ると同時に察知したのは、大声の月代だ。赫怒した、彼女の激昂を初めて見た。それはいつもの穏やかな表情など欠片ほども見えない、般若のような表情——もちろん錯覚だが、そう見えた般若というのは元々女性、或いはこういう状況にあればそう思えても仕方ないのかも知れない。

頭は不思議と冷静だったけど、内心は信じられない気持ちで一杯だ。萎縮というより既に怯えてしまっているセレネを守る気もしないくらい、彼女の怒りに戸惑っていた。

「あなたなんかがどうしてここにいるのよっ！」

「どうしてと言われても……住むところがないので」

「だからって！ ……だからって、どうしてここなのよ」

戸惑いとは無関係に、その疑問には答えられない。セレネだってそうだ。

深呼吸を一つ間に挟み、案の定黙り込んだセレネに容赦ない罵声を浴びせる月代の肩を掴むと、少しだけ彼女から引き離れた。「どうして」と焦燥する月代が、俺には見ていられなかった。というよ

りはずっと、見ていたくなかったと言った方が正しいのか。

「事情があつて引き取ったんだ。察してくれよ」

「でも……そう、そうだ、うちに来れば。うち、部屋もいっぱい余ってるよ?」

「ウチじゃなきゃ駄目なんだ。俺に用があるんだからな」

例え尋問されたつて答えるつもりはないけど、セレネは俺が消えない為の方策を用意してくれている。その準備が整うまで、消えてしまふ俺が面倒を見るのが筋だ。月代にまで迷惑をかけたら、きつと俺は駄目になる。消えてしまった方がいいんだと思つてしまふ。

月代は俺にとって、そう思わせるに十分な存在だ。心苦しいのも事実だけど、少なくとも彼女に余計なものを背負わせたくはない。放つておいて欲しいというのも、多分そういうことなんだと思う。信ずるには荒唐無稽だが、それに値する証拠を見せてもらった。

見せてもらう、というよりは——体験させてもらった、といった方がずっと正しいか。

「月代、聞き分ける」

「……何もしない?」

「何も? 何するんだよ」

「へ? えと……な、何でもないよ! えへへ、陽のこと、信じてるからね」

空笑いを一度、苦笑いを一度、その後に俺の胸を一度だけ叩いた。意味も何もない、ただ目を逸らしただけの行為。月代のことを無理矢理納得させるのは簡単だ、単純に命令してやればいい。彼女は俺に逆らうことをしないんだから。

「セレネさん、だったかな。ごめんね」

「いえ、あたしも突然ですから。皆さんに納得してもらおうなんて最初から思つてませんし」

「そつ、なんだ。いいなあ、そういうの」

憧憬を目に映し、月代は手を差し伸べた。その手を取つたセレネの蒼い瞳が月代を捉えると、彼女は小さく震え息を呑んだ。

何が羨ましいかなんてわからない。ただ、月代がセレネに何を見たのかくらい想像がつくし、何より俺も彼女のそういうところには多少の羨望を抱いてしまう。俺と月代が同じだとしたら、きっとセレネの強さに惹かれてるんだろう。何者をも省みない生き方というのか、自身——或いはその目的を貫く生き方というのか、そういう強固な精神だ。

誰に納得してもらえないでも、それを達成しようと思える。それが、とても綺麗に思えた。

「まあ、その際陽介さんを虜にしても責任はないですよねえ、あたしには」

「むつかあつ！ 何よなによ、この新参っ！」

その本気とも思えない発言は、場を和ませようとしたのかどうかはわからないが、笑い声が戻ったことだけは確かだった。

焦げた目玉焼きに気付いたのは、奇しくもセレネという「新参」だった。

セレネが簡単に受け入れられたのには、ちゃんとしたわけがある。雨塚という名前の池があるのは子供の頃から知っていたが、それが昔話に由来していることはまったく未知だった。

天の使いが転じて天使となり、それが時代と共に隠蔽され、やがて雨塚という地名にまで落ち着いたというわけだ。セレネの言うアマツカというのは、正にそのことを指す。池に住むとはこれいかに、なんて疑問はすぐに解決した。あの池、どうやら本当に水底がなく、そのアマツカという場所に繋がっていて、大きな水泡と共に色々な魂がこの世に顕現する、というわけらしいのだ。

信じられるか？ 俺だって最初は信じちゃいなかったさ。

彼女が、俺の身体をその腕で刺し貫くのを知覚するまでは。

外傷どころか、血の一滴だって流れやしなかった。ただその空恐ろしい感覚は、言葉なんて陳腐なものじゃ形容できやしないだろうし、それができたとしても相応に凡庸なものになってしまはずだ。

敢えて言うなら、内臓に親水性のゼリーを突っ込まれたような、そんな感覚だった。

魂というのは便利なもので、意識や意思次第でその性質を百八十度転換できてしまうものらしい。無意識なら幽界、意識すれば現界、といった具合にだ。

彼女、セレネは天使^{テンシ}だった。俺に世界の意味を伝える為、それを守る為だけにこの世に降りてきた、正に俺の中にあつたテンシの理想像だ。

だからだろう、今まで頑なに拒んできた世界観や、その言葉が容易に飲み込めた。

俺は、今から一ヶ月後にこの世界から消えてなくなる。

原因は、俺という人間の持つ「性質」にあるらしい。世界に反する力、と言えば通じるだろうか。

つまり、世界——ありとあらゆる生命の総意に反する性質を持っている、ということだ。月代や環が俺のことを「存在する」と認識していれば、それが強いほどに俺の「存在する力」が弱まっていく。例えばただのクラスメイトとか、そういった関係性の薄い人間には関係のない話で、影響を受けるのは俺の周りにいる人間のうちある程度以上の信頼を寄せる者、つまり俺のことを強く思っている人間全てが、俺の存在を消す原因になるということだ。

ならばその対策は至極単純。俺を深く知る人間全てに、「俺が消える」と認識させればいいだけの話だ。単純だからこそ、それはとても難しかった。友人が少ないことに救われたのが、なんだか皮肉だった。

その準備をセレネは、俺——両親が与えた部屋で行っていた。訊いたところによると、人の意思を汲み取る為の道具——『天傘^{あまがさ}』を造っていたという話だ。

それが完成したのは、俺達が出会った翌日のこと。随分簡単にできるんだなと拍子抜けしたが、考えてみれば期限は一月しかなく、それから先が大変だという事実があつた。なにしろ、俺が消えるな

んで、誰も信じちゃくれないだろうからな。

話を聞いた環は、それはもう大泣きしたものだ。得体の知れぬ淡い光を放ちながら一頻り泣いた後に、「陽にいいはなくならない」と残して帰っていった。要するに、初端から蹴躓いたわけだ。

何よりの難関は、両親とこの月代だろう。だからこそ、俺は彼らに事情が話せなかった。

笑っている彼らに、どうしてそれが伝えられるだろう。

「ねえ陽？ セレネさんってさ、すごく綺麗だよ」

「ああ、そうだな。まるでテンシみたいだ」

「もう、茶化さないでよ。でもほんと、そう見えてもおかしくないよ。あの銀色の髪とか白い肌、それに蒼い瞳と長い睫毛……女のわたくしが見てもうっとりしちゃう」

陶醉しきった月代の茶色い瞳も負けずに綺麗だなんてことが言えるようになったら、多分それが終わりの傍なんだろう。どうしても守りたいものは、不変。それはつまり、両親や子供達、公園、そしてこの月代という女だった。

「何人なのかな？ 色が薄いから、寒いところかな？」

「どうだろう。しかし——そのくせ日光には強いっていうんだから反則だよな」

「女泣かせの紫外線に負けない女。かつこいいねえ」

日傘を回し、夏服のセーラーをひらりと舞わせ、月代は笑う。半袖から覗く白い肌はセレネのそれより少し日に焼けた印象を覚えたが、かえって健康的な美しさを感じる。

元々“人間の中じゃあ”相当に白い月代をしてそれだ。セレネには、現実味が薄い。文字通りこの世のものでないのだから、この世のセンスを適用するだけ無駄だというのはわかってるのに、どうしてかこの感覚をして「美しい」と思える。正しく俺が抱く「テンシ像」がそれだ。

「部屋に籠って何してたのかな？ 大事なことなんだよね？」

「うーん……詳しくは訊いてないけど、大事なものを造ってたって」

嘘をつくのには何を感じてるほど幼い精神構造を持っているわけもないけど、相手が月代だからこそ辛かった。同時に少しだけ期待してしまうのだ。月代は、俺のことをどれだけ嘆いてくれるだろうか、なんて、彼女にとっては何より不謹慎に。

翼も光環もないセレネだけど、どうしてか俺達が抱く天使像に近いものを持っている。理由を考えたところでわかりはしないし、何よりそれを考える間もなく、彼女は人間にも近かった。

今日の朝食は三人で摂った。月代もセレネも、笑いながら口を盛んに動かしていた。

「なんだか嘘みたい。セレネさんのこと、何も知らないはずなのに」「何でも知ってるっていうのが友達の証だとは限らないだろ」

「でも、わたしと陽はそうだよ？」

月代のことを本当に何でも知っていると問われると、そうでもなかったりする。俺の見たことのない月代はまだたくさんあるし、それを知りたいと思ったこともない。例えば先日の怒りであったり、例えば笑顔以外の表情や、その他深くまで踏み込まないと知ることのできないものは、ほとんど何も知らない。

何でも知っていた、というならそれは正しい。小学校までくらいなら、だけどな。

「陽、ずっと変わんないもんね」

でもそう、月代は俺を知り尽くしてる。俺の何もかもを知ってくれているのは多分彼女だけで、或いは両親よりずっとそうだ。

「ほんと、手間のかかる人だよ」

「調子乗るな。お前だって俺からしてみれば最高に手間かかるぞ」

俺の知る月代は、素直なくせに妙なところで頑固、へそを曲げたらただじゃ立ち直ってくれやしない。

「そんなこと言ったら、朝ご飯作ってあげないんだから」

「ご自由に。そんな時は自分で作るよ」

「……ばか」

その反面で扱いやすいところもあり、一つ言葉で形容するなら「

面倒」だ。

歩いて十分程度、そこには俺達の通う「雨塚高校」がある。池の名前から頂戴したらしく、ここにも様々な曰くがある。その辺り語り出せばキリがないので割愛するが、大まかに言えば池の方と似たようなものだ。それ故かどうかは知らないが、全学年全過程において、哲学という授業が施行されている。今まで役に立ったことのない知識だったが、セレネが現れてからはそれについて何度も考えさせられる。それもまた一興、なのだろう。

レンガ造りの校門を抜け、向かう先は北から二つ目の校舎。それが三年生の使う教室棟だ。通い始めてそろそろ三月が経とうとしているか、この経路にも慣れて久しかった。

「そろそろ来るかな」

「まあ、そろそろかな。騒がしいのは好きじゃないんだけど」

「可愛いよ。環ちゃんと同じくらい可愛いかも」

噂をすれば影、とても言えばいいのか。俺達の後ろから快活な大きい声が響き、ついでに周囲の視線までも頂戴した。不本意ながらあいつと一緒にいるとこういう類の視線には事欠かない。この微笑ましいものを見るような視線は、正直不快だ。

「おっはー！ お二人さん、相変わらずかー！」

「小湊、少し黙れ」

「無理だよ陽、光ちゃんひかりが黙る時は学校には来てないもん」

「二人共、酷いよー！」

それでいてまったく気にした様子もなく笑ってるんだから始末の悪い。髪を振り乱し息を切らせ、セーラー服の胸元をぱたぱたと扇ぐ小湊は、恐らく単純な性差などほとんど感じてはいないんだろう。誰よりも気安く、そして誰にでも気安かった。

「もつと男を意識しろって……見えてんだよ」

「へえー、へへー。顔真つ赤、可愛いんだー！」

幼い容姿は高校三年生とはとても思えない、精々中学二年くらいものだ。身長が小さく胸が平坦だから、制服の胸元を開くと簡単

に下着が見えてしまう。

月代以外の女性に余り慣れていない俺には、小湊のそれでも十二分に照れ臭い。

「こら光ちゃん、陽をからかわないの」

「ふふうん……ヨヨちゃんは変わらず、と。相変わらずラブいねえ」

「そ、そんなこと違うもん！ラブとかそんな、そんなんじゃないもん！」

「そうあっさりと否定されるのも悲しいんだけど。俺のこと嫌いかな？」

「き、嫌いなわけない！そうじゃないよ……」

困ったように俯く月代の顔は小湊の目線だと見上げる形になるから、そんな照れ隠しもまったく意味を為しておらず、やはりその真っ赤な顔をからかわれるのだ。わかりやすい性格は、こんなところにまで災いしている。

なんともはや、小湊がいると場が一気に騒がしくなる。それは多少鬱陶しくもあり、しかし子供達と遊ぶ時のような心地良ささえも孕んでいる。まあ、「子供」という部分が否定できないのが、悲しいところではあるが。

「さ、こんなところに突っ立ってないで教室行くよお」

「お前が引き止めたんだろ？　ったく、お前っていつもこうな」

「わわ、待ってよ二人共ー」

いつまでも紅くなってるのが悪いんだなんて揶揄を続けながら、我らが三のD教室を目指すのだった。

編入生が来るらしい、という噂が教室を占めていた。

もう知っていた、というよりは、既に聞いた、といった方が正しいのか。彼女、世界の力というのは正しく万能で、教師達には一切疑問を感じさせないようになっていいるらしく、編入試験すら受けることなく一日で編入が決まってしまった。

彼女の説明はそう長いものではなかった。アマツカはそのまま哲

学的なアイデア界であり真実在の世界で、理性把握、つまり現象界——この世の認識のみが存在する世界である。その住人であるセレネは本来現実には在り得ない存在である為、ここに現界した時点で矛盾を孕んだ生き物なのだ。その矛盾を修正する為、“世界”が、この世界全ての生き物に対し、セレネを都合よく認識するように仕向けている、らしい。想起説、アナムネーシスを視覚化したと表せばちょうどいい、という話だ。

都合のいい力、都合のいい展開、そして彼女が常に傍にいるというのもまた、都合がよかった。

壇上では、セレネが淑やかな笑顔を湛えて口を動かしていた。自己紹介は単純なもので、名前と仮の出生、それから趣味なんかを軽く摘まんだ程度だ。

天塚セレネ、そう名乗っていた。

「よろしくお願いします」

一礼を皮切りに、教室内は男達の醜い絶叫に埋め尽くされた。耳を塞いでも当然のようにそれを貫き、空気や耳を劈くような音波が身体を響かせ、まるで弱い地震にでも遭ったかのようなうだ。

騒がれるだけの容姿があり、笑顔が優しく、物腰も穏やか。今日のセレネは正しく完璧で、男に好かれるような要素をふんだんに含んでいた。

それにしたって、悪戯心を失くしちゃいないんだから厄介だ。

「あ、陽介さん。陽介さん、お世話になります」

なんて、楽しそうに手を振ってきやがった。当然のように男子が悪鬼羅刹の如き視線を俺に向け、嫉妬の炎を燃え上がらせてきたが、怖いのはむしろ月代のそれだった。

ああ、セレネってこういう人間——じゃない、テンシなのか。余りに人間的過ぎて、それがテンシだということを忘れそうになる。

「生野、知り合いか？」

「ええ、まあ」

眩い陽光を身体一杯に湛えて、セレネは微笑む。魅了されそうに

なつたのをなんとか堪え、セレネから視線を外した。これ以上見ると、本当にどうにかなくてしまいそうだ。

それがいけなかったらしい。機嫌を損ねたセレネは、

「今日の晩御飯、楽しみですね。ねえ、陽介さん？」

なんてことを、悪びれもなく口にしたのだ。

ある種の恐慌状態、とても言えば正しいだろうか。俺に対してこんなにも好奇や興味、その他の感情が集まったのは、多分初めてだ。それは決して心地良いものではないけれど、反して悪いものでもなく、複雑な苦笑いを零す他になかった。

そして思い出した。俺に興味が集まるということはつまり、消える可能性が高くなるということだ。結局それには努めて表情を消し、嵐が過ぎるのを待つしかなかった。

不器用でもいい。ただ、消えるという未知に漠然とした恐怖を感じている。

それを笑顔で見守るセレネの考えをまったく悟ることができず、少しだけ胸が痛かった。

「皆、静まってえー！」

何もかもを遮るように大声で起立したのは、意外なことに月代だった。人望も人気も高い彼女の一声に、騒がしかった教室は一度に静まり返った。そんな突然の空気転換に一番驚いたのが月代本人と、いうのだから、彼女というのは面白い。

「わ、わわ、ど、どうしよう、ねえどうする？　ね、陽つてば」

「落ち着きなさい。とりあえず座って、深呼吸な」

「う、うん……すうー、はあー」

息を吸ったり吐いたりするのはわかるが、それを声に出す辺りなものすごく間抜けだ。あの小湊に笑われているところを見るに、哀れで仕方ない。

「面白いクラスですね。いい学校生活が送れそう」

再度空気を換えるようなセレネの声を、クラスメイト達は明るい声色で歓迎していた。真っ赤になった月代とそれを笑う小湊だけだ

ろう、それに気付かなかったのは。

窓際の席でクラスメイトに囲まれ質問攻めに遭うセレネに、「ざまあ」と胸の内だけで零し、隣の席に座る月代に視線を向けた。

「あれ、絶対セクハラだよな」

「う、うん…… どうしてスリーサイズなんて知りたがるんだろう」

お前に男の気持ちなど理解できるはずもなろうし、知りたいという気持ちは否定しないでおく。俺だって、月代のセーラー服を押し上げる大きな胸には興味津々だ。

「私なら教えてあげるのに」

「誰がお前のスリーサイズを知りたがるんだよ。ほぼ平面じゃんか」

「素直じゃないなあー、陽君は」

素直も素直、まったく嘘偽りのない正直な気持ちだというに、小湊は小馬鹿にしたような笑顔で俺の胸を人差し指で突いてきた。その余裕、月代の表情を見ても崩さずにいられるかどうか、どうしてそうまで自分の身体に自信が持てるのかわからん。

小湊は明るい女の子だ。性質はバイタリテイの塊で、黒いショートヘアーは軽快に踊り、何よりその容姿からは活発な印象が具に感じられる。

場に必要な要素は、月代と小湊の二人で大体揃ってしまっている。多分、それも原因の一つだろうと思う。

「陽君さ、ヨヨちゃん以外の女の子に興味ないの？」

「ひ、光ちゃん！ 陽はわたしなんか、わたしなんかあ……！」

「月代が何考えてるかは知らんが、俺だって一人の男だぞ？」

そうさ、セレネに魅入ってしまうのがいい例だ。子供が何よりの友達という枯れた高校生ではあるけど、やはり三大欲求に数えられるものを拒絶できるわけもなく、それなりの性欲は抱えてる。

「でも男友達すくなーし、よくもまあ女の子ばつかと絡んでられるよね」

「そりやお前…… 女ってなんか、子供に似てるんだよ」

「えー？ 男の方が子供っていうよ、普通さ」

それはよく聞く話だけど、話したり遊んだりしているとよくわかるのが、女は「子供」でなく「子供を真似た大人」であるということ。具体例を挙げることはできないが、我が俤を故意に見せるのなんかその典型だろうと思う。男は我が俤を無意識に繰り、そういう点でいかにも子供だ。

「ま、お前見てるとよくわかるわな」

「可愛くねーな、陽君は。私ほど精神の成熟した女はいないだろうに」

「知ってるか？ 心と身体って、割と繋がってるんだぞ？」

「……そ、そそそそんなこと、あ、ああるわけないじゃない！」

平坦な身体に凸凹の心、少なくとも同じというわけではなさそうだけど。

「月代は……うん、立派な大人だな」

「ヨヨちゃんは立派な大人だよ」

「二人共、皆のこと言えないよ。セクハラだよ」

月代が注目を集めるような身体をしているのが悪い。なんて極論は言えそうにないけど、少なくとも月代に対して妙な気遣いは必要のないことくらいは承知している。

月代は、着替えを見られたって本気では怒ったりしなかった。多分、俺限定だけど。

胸元を隠す腕がそれを押し上げ、魅力をも押し上げていることに、彼女は気付いていない。いいものを持つ者は、総じてその自覚をしないものだ。

「まああれだ、小湊を否定するつもりもないぞ？」

「だよー。そういうニーズもあるよねー」

「よ、陽って、そうなのかな？」

「馬鹿にするな、俺の基準は常にお前にあるんだ」

女の基準、っていうと失礼だろうか。大抵の人間は、自分の最も近くににいる人をその「基準」に据えてしまうものだろうし、それに

疑問すらも抱くことはない。俺が持つ「女」の基準は、正にこの「月代」という人だった。こんなのが基準だったら、とは思うけど、それに疑問を抱いたことも、やはりない。

「訂正しよう」

「なに、何のこと？」

「陽君に訊くべき質問じゃなかったね。陽君がヨヨちゃん以外の女に興味がないのか、じゃなくて、ヨヨちゃんが陽君以外の男に興味はないのか、って訊くべきだったよ」

破裂音を当ててやればぴたりとはまっただろうか、と思うくらいに月代の頬が急激に紅潮した。どうにもこうにも、そうまで照れたら、俺の方が照れるじゃないか。

「ば、ちょ、な、ええと、光ちゃんっ！」

「ヨヨちゃんほどわかりやすい女はいないだろうに、どーして陽君は……」

「ほっとけ」

気付いてないとも思ってるか？ 気付いたところでどうにもならないこと、お前らにわかるか？

どうにもなりやしない。俺と月代は、そういう関係だ。

いや、そうじゃない。俺が、そういう関係を強いているんだ。

「小湊こそ、お前まったく男の影が見えないが」

「わったしはー、そこはかとなーく、もてるよー」

「そうなのか？」

「うーん。もてるというより、可愛がられてる？」

小湊が男に囲まれる構図は想像できなくはないが、その内容は、頭を撫でられたりとかそういう愛玩としての扱いだとしか思えない。

小湊に足りないもの。それは圧倒的なまでに色気だ。

「むふふ……皆は知らんだろーけど、私は脱いでからがすごいんだよ」

「……そうなのか？」

「う、うん……すごいと、思う」

脱いだら凄い。月代から見たら、ある意味ではそうなんだろう。しかし、よくも男の前でこうも大胆な話ができるものだ。大胆といよりはずっと、無恥といった方がよっぽど正しいか。少なくとも月代に行き過ぎた下ネタを振れば顔を真っ赤にして照れるだろうし、向こう数十分は口も利いてくれないかも知れない。現代の女の子は小湊に近いのか、それとも月代に近い性観念を持っているのかはわからないけど、少なくとも性について厚顔な女と付き合いたいとは思わない。

大体だ、そんなことを知ったところで何の意味もないんだ。小湊の裸なんて一分の興味もないし、見る機会だって一分たりともないはずだ。

がははと笑う小湊が、少し憎らしい。

「何の話してるんですか？」

その背後から近づいてきたのは、ようやくクラスメイトに解放されたセレネだ。そういえば教室が静かになったと思ったら……あれだけの質問を浴びて疲れているだろうに、それでも殊勝に微笑んでいる。

「小湊——このちっこいのが、脱いだらすごいって」

「それはまた……ある意味女の子らしい、んですかね？」

「わ、わたしに訊かれてもなあ」

男の前では取り繕うのが女だって、どこかで聞いた。そういう意味で、俺の周りには女が少ない。

「紹介しとくか。こいつ、小湊光。見てわかる通りだ」

「なんね、その適当な紹介は。あ、よろしくセレネさん。……ほんとならね、私を語ったら一日潰れちゃうんだからね！」

現実でウィンクをするヤツは初見で驚いたが、そこはさすがのセレネ、笑顔で受け流して握手を求めた。そういえばテンシにも握手なんて文化があるのだろうか、なんてことが頭を掠めたが、特に追及しようとは思えなかった。

セレネのことを深くまで知ったら、どこか俺の中の機関が壊れてしまいそうで怖かった。そういう虚ろな恐怖というのも、その瞳は湛えている。

「あ、いきなり名前は馴れ馴れしかったかな？」

「いえ、特に気になりませんよ。ただまあ――」

少し不躰かと思える行動――小湊の爪先から頭までを巡視し、セレネは口元に添えた手で言葉を隠すようにしながら呟いた。小湊には聞こえなかったようだが、俺の耳にはしっかりと届いてたぞ。「年下と呼ばれてるみたい」って、その行動よりずっと失礼な言葉だ。

そういえば、セレネっていくつなんだろう。アマツカという場所の時間の概念は、この地球と同じ感覚で考えてもいいのか、それとも遅いのか早いのか、或いはずっと高次故に時間などという概念は存在しないのか。

いずれにしたって、見た目は高三で十分通じる。多分、それだけの事実があれば十分なんだろう。

「でも大変だね、こんな中途な時期に編入なんて。というか、相当の事情がないとあり得ない、かな？」

「そうですねえ……陽介さんに呼ばれたから、かちら」

今日も絶好調に噛んでるな。腕を組んで彼女の声を胸の内で反芻すると、不思議と心地良い気分になる。

そしてそういう現実逃避が意味を為さないこともわかってる。セレネは、そういう発言が余計なトラブルを運ぶんだって、わかっててやってるんだろうか。何より、ここには月代がいるんだ。頼むからそんな怖い顔をしないでくれと視線を向けたが、その形相には貌を逸らすことしかできなかった。全ての言葉を飲み込み、代わりに蛇に睨まれたかのように縮こまり、同じような状況に置かれた小湊と意思疎通を試みていた。

大丈夫か？ ノー・サ―。

「セレネさん、あんまり陽を困らせないで」

「困ってるんですか？ どっちかというと、月代さんが怖いから縮

こまってるように見えますけど」

相変わらず正直者だな、セレネは。お兄さん感心だ。

「大体、用があるなら早く済ませてよ」

「貴女にも原因——責任はあるんですよ？ 結構な重大責任」

「え？ な、何、何なの？」

「セレネ」

何か？ そう視線で問われたけど、俺の意思を口に出すわけにはいかず、首を横に振るだけに留めておいた。どちらにしたって月代は傷付くだろうけど、それは俺にとって大事な選択肢だったんだ。

「だそうです。すいませんが、教えるわけにいかないみたいですね」
「陽？ 何なの？」

月代の眼を見ることはできず、視線は床の木目ばかりを数えていた。その綺麗な瞳は今、悲しみの湖に潤んでいるだろうか、それとも失望の砂漠に渴ききつているだろうか。

それだけで十分だったようで、月代は乾いた笑いと「ごめんね」を零した。

「そろそろ授業始まるよー」

小湊の一声で場は解散されたが、隣の席からは授業中もずっと、潤んだ視線が俺を絡めていた。

2話

夕方の公園は遊具や花、池も何もかもが真っ赤に染まり、それにこそ幻想的という言葉が相応しい様相を呈していた。入梅して久しいこの時期というのに最近はやも降らず、季節はやはり夏と言って正しく、乾いた空気が全てを包んでいる。

子供達は変わらず元気だ。この喧騒は、それというのに決して喧しくも騒がしくもなく、俺にとっては何よりの精神安定剤だった。笑い声、小さな争う声、全てがこの乾いた空気を潤してくれている。

「あんまり走るなよー」

俺の呼びかけに元気よく応え砂場を駆け回る少年達に手を振って、ベンチの上で肘を突くと、少しだけ眠くなってくる。

そろそろ月代は晩御飯を作り始めているだろうか。八代家の食卓事情は朝食を除き月代に一任されており、先日のように一緒に遊べるのは例外を除いて休日のみ。子供達の世話を任されているのも本当は俺で、月代は文句も言わずそれに付き合ってくれた娘だ。子供達がどちらを慕っているかなんてわからないけど、親から見れば、ずっと月代のほうが信頼できるだろう。

でも、俺一人で大丈夫。ほら、俺の周りにはちゃんと子供達が集まってくる。

「陽にい、月ねえとめぐちゃんのどっちが本命？」

「はは、難しい質問するなあ、お前」

ベンチに座る彼女の質問は本人の前で訊くようなことじゃないし、

訊かれた方だつて答えるわけにはいかないだろう。それともお世辞でいいから「環」と答えるのが常識か、そんなことは知らないけど、少なくとも環の機嫌を損ねるようなことはしたくない。ただでさえ月代の名前を出すと不機嫌になるというに、どっちが好きかなんて質問は火に油だ。

案の定、環はぶすつと頬を膨らませ、目を逸らしてしまった。

「めぐちゃん、どうして月ねえが嫌いなのかなあ？」

「そういうことはな、本人の前では訊かないものだ。わかったか？」

「えー？ あはは、わかんない！」

これが子供特有の無邪気な悪意というやつだろうか、なんて苦笑しながら隣に座る環の頭を撫でてやった。いつもならこれだけで機嫌を直してくれるのに、今日ばかりはそうはいかないようだ。

まだ立ち直れないか？ 少し考えればわかるはずだったんだ、泣いてくれるということはつまり、俺が消えると信じているということ。どうしてそれに気付かなかったのかなんて、そんなことはどうでもいい。

大事なのは、環を裏切ること。下手に「俺は消えない」なんてことを言えば、環はこの先ずっと俺を信じ続けるかも知れない。だからこのままでいいんだ。

信じないでくれ、なんて、酷薄すぎるかな。裏切ることが何より残酷で、それが新たな裏切りを呼ぶと、俺はちゃんと理解してるはずなのだ。ただ、胸が痛かった。

「めぐちゃん？ さっきから黙ってどうしたの？」

「んー。なんでもない。遊ば」

「陽にいいいの？ いつもいっしょなのに」

「いいの！ 遊ば！」

語気を荒げる環に少しだけ萎縮しながら、女の子は彼女と一緒に砂場の方に駆けて行った。砂場にいた皆は既に遊具の方へ移動してそこには虚しく積みあがった砂の山が鎮座しているのみだ。それはまるで、陰気に悩む環を拒んでいるかのようだった。

子供を眺めていると、少しだけ沈静になれる。環の場合は特にそう、一緒に話しているよりずっと、眺めていた方が好きだったりするんだ。今は尚更。

「何、してるの？」

声を掛けてきたのは、見知らぬ男の子。十歳くらいだろうか、今までに見たことなかったから、多分誰かの新しい友達だろう。夕陽に隠れてよくは見えないが、変わった瞳の色が印象的だ。

「お守りしてるんだ。あいつら、目離すと危ないだろ」

「へえ……じゃあ僕も隣にいい？」

「お好きなように」

男の子の座った三人掛けのベンチの左隅は、さっきまで環が座っていた場所だ。それだけで環の温もりが奪われた気がするから、自分でも都合のいい性格をしていると思う。自分が助ければ環を裏切ってもいいなんて、独り善がりもいいとこだ。

「お兄ちゃんはこの辺の人なの？」

「ああ。あの砂場で遊んでる環って女の子——髪の毛の長い方のお隣さんってやつだ」

「めぐるちゃん……」

呟く声に色はなく、何を考えているかは知れないが、その視線が環に向いていることだけはわかった。

この子と環が恋をしたら、環は救われるだろうか。そう考えて、すぐやめた。

「一緒に遊んできたらどうだ？ 少なくとも、初めてで嫌われはしないだろ」

「……一つだけ、いい？」

頷いてから、少しだけ後悔した。初めての相手には、例えば子供であろうと下手に質問など受けるものじゃない、というだけの理由だ。「おかあさん、知らない？」

知るわけもない。

首を振った俺に残念そうな——悲哀を湛えた顔を見せてから、男

の子は駆けていった。そういえば名前訊いてなかったなんてことを思い出すのと、男の子が環と手を繋いだのは、同時のことだった。

月代の誕生日がすぐ近くに迫っている。

満月の日に生まれてきたらしいが、別にそうロマンに溢れているわけでもない。月の引力による影響が如何に地球上の生態に働くかという、バイオタイド理論の影響を一手に受けた結果、そうなっただけのことだ。曰く、受精した日と月齢が重なる日に生まれる、だから。月の魔力と考えるとロマンも感じられようものだが、やはり両親のことを思うと現実的過ぎて泣けてくる。

ロマンはともあれ欠かさず祝ってきたから、今回も盛大なパーティーとささやかなプレゼントを用意してやりたいのだが、生憎とここ最近の彼女の好みはよく知らないのだ。そこで頼りになるのが、彼女の一番の親友。俺だと言えないのは残念でならないが、恐らく彼女以上に月代を知る人間はいないであろう。

「よろしく頼むぞ、ロリっ娘」

「任されたぞ、無愛想」

小湊光と名乗るロリ娘の減らず口は、紳士的な態度で受け流しておいた。これから世話になるというのに、余計な波風は起こしたくない。

「むふふ……スル・クレームのブリュレ……楽しみだにゃー」

まあ、見返りを要求されたのは甚だ心外だったが、そこは男として親友として、何より正当な代価として用意してやることにした。古今東西女の子は甘い物好きとは聞いた覚えがあるが、それをこの子に見ると、どこか信憑性が出てくるから不思議なものだ。

ここは隣町の繁華街——普通電車で二つほど駅を跨いだ所にある大きなところだ。ビルは軒並み八階建てを超え、最大の規模にもなると天辺が見えないくらいだ。

駅から程近くに比較的小さな百貨店がある。そこに目的の店がいくつか入っているらしいが、当然のように件の「スル・クレーム」

のテナントまで入っているというのだから彼女は抜け目ない。

「さー、この曇天の下、気分だけは晴れやかにー、ごー!」

「元気だなあ、お前。雲くらい吹っ飛ばせるんじゃない?」

「あはは」

「否定してくれ、頼むから」

揚々とデパートの自動ドアをくぐった小湊は、左手の白いポーチバッグを振り回しながら、鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気だ。どれだけ楽しみにしてたのかは知らないけど、よくもケーキでそこまで上機嫌になれるものだ。「ケーキごとき」なんて付けたら怒られそうだから、敢えてそうは言わなかったけど。

しかしそこまで非常識ではないらしく、しっかりと月代に渡すプレゼント選びから進めてくれるらしい。先にエレベータに乗った小湊が押したのは、玩具店のテナントが並ぶ五階のボタンだ。

「私さー」

一度だけ言葉を区切り、小湊は昇り始めたエレベータのガラスに張り付いた。

「この外が見えるタイプのやつ好きなんだよね。なんかさ、人がごみみたいで」

「お前が人を見下ろす機会ってあんまないもんね。それによく言うし。馬鹿と煙は、って」

「うつわー、この人遠慮つてものを知らないね。女の子には優しくしなよ、顔が良ければ割と簡単に騙されてくれるから」

女というのはそういう生き物なのかと考えてみてはたと気がついたのは、男も似たようなものだという事。美人が優しくしてくれたら、そりゃ勘違いもしたくなるというものだ。だとしたら、月代やセレネも、俺を騙そうとしているのだろうか?

考えようとして、やめた。あの二人は、信ずるに値するだけのものを持つてる。

「にしても、そういうこと言うなよ。仮にも女だろーが」

「あー。別に何とも思わない。だってさ、そういう女って嫌いだし

？」

信ずる値しないのが一般的な女なんだろう？ 世間から逸脱して、困るのは結局自分だ。出る杭は打つのが人間というもので、時にそれは恐ろしい牙となって杭を噛み砕く。俺だってそうだ、月代がいなかったら、今頃クラス中で無き者にされてもおかしくはない。

「でもまあ、優しくされて悪い気しないのは確か。でもそういうの、普通見てわかんないかな？ 下心って、結構顔に出るよね？」

「そうだなあ……見分けるのは、ちょっと難しいんじゃないか？」
首を傾げながら腕を組み、ぶら下がったバッグを揺らす小湊。中には何が入ってるのだろうとどうでもいい疑問を浮かべて、少しだけ彼女を見直してみた。

観察眼というのは、多分何より必要な能力だろうと思う。下賤な人間と付き合わずに済むというのは、意外に難しいことだ。俺の周りにそういう人間がいないのは小湊の、或いは月代のおかげだろうか。

エレベータは結局各階で止まり、五階に着いたのはその話題が終わった頃だった。

「さてと、ヨヨちゃんが欲しそうな物、ね」

「何か考えてきてくれるって、期待しただけ無駄だったみたいだな」
「こういうのはね、現地で現物を見て選んでこそだよ。わかってないな、陽君は」

わからないわけじゃないけど、大切なものだからこそしっかりと準備くらはするものじゃないか、というのが正直な意見だ。飄々としてるけど、小湊だって月代のことは好きだろうし、いいものをプレゼントしたいと思っているはずだ。

なんにしても考えの読めないやつだ。いつも笑ってるから尚更、というのは果たしてポーカーフェイスというのか否か。

それこそどうでもいい。小さな背中を、ゆったりとした足取りで追った。

最初に着いたのは、大きなファッションショップだった。ピンクを

基調とした店内は男の入りにくい空間ではあるが、確かにあのんびりとした月代の好みではありそうな品々が揃っている。あの子の部屋にも、結構な数のぬいぐるみが飾ってあったはずだ。

内数点は、確か子供の頃俺が送ったものだ。あの小さなトナカイは、今でも飾ってあるのだろうか。

「ぬいぐるみ好きは変わってないけど、詳しい好みは陽君の方が詳しいんじゃないかな？」

「いやーどうだろう。嫌いなもの、っていうならわかるけど」

感心そうな笑顔で俺を覗き込んだ小湊に、少し照れ臭くて頬を掻いた。

「現実で獰猛な動物は、可愛くしても駄目だってさ」

「へー、あの子らしいね」

今度の笑顔は、優しかった。まるで妹を想う姉のようなそれに、少し可笑しくなった。どう見ても立場が逆だ。

店の中央になるガレージ品には見向きもせず、後ろ手にバッグを持った小湊は俺から離れ、軽快な足取りで店の外周を見回っている。総じて数千円はする、結構な品物だ。バイトもせずお小遣いも多いわけじゃないけど、大して使い道がなかったから結構な額が溜まっている。財布の中には諭吉さんが数人いらっしやるし、いざとなれば親に請求すればいい。月代へのプレゼントの為と言えば、喜んで大金を出してくれるはずだ。

「パツとしないかな？　どうかな？」

「さあ……いくつか良さそうなのはあったけど、他も見てみないと」

「そだよねー、さすがにぬいぐるみだけ見て満足はできないよねー」

店員に聞かれたら気まずいようなことを大声で喋り、小湊は店外へ駆け出た。子供みたいな所作、子供のような言動は、いずれも俺が好きなものだというのに、どうしてかこの場合は心が休まることは少ない。嵐のような女、という言葉が正に当てはまる。

そんな夏の嵐に翻弄されながら、それでも楽しい時間が流れ、気付けばちょうどお昼時だった。デパートの中というだけあって飲食

店のテナントは両手で数え切れず、そこで食事を取ることになった。食後のデザートは、もちろん「スル・クリーム」だ。

「らららーめん！。陽君は何派？ 私塩派」

「俺、とんこつかな」

「女の子と一緒に食べるもんじゃないよ、あれは。くさいよ、あれは」

そもそもラーメン自体が女の子とのデートコースに選ぶべきものじゃない、なんて指摘は無粋だろうか。手狭な店内は若者から中年まで揃い溢れているものの、男だらけだ。

周りから見て俺達はどんな関係に見えるだろうか。

「しかしケーキ屋の前にラーメンはないだろ？　せめて洋食にしろよ」

「らーめん好き。陽君、嫌い？」

「嫌いじゃないけど……あああもう」

そんな小首を傾げて、可愛い仕草をされたら断れないじゃないか。相手が小湊だというに、まさかこういう女こそが男心をくすぐる術を心得ているとは思わなかった。男ってというのは単純だ。子供のくせに自尊心が高く、それを逆撫でされると容易に憤慨し、逆に褒められると簡単に付け上がる。或いは、男心をくすぐることほど簡単なものはない、と言っているのか。

女は複雑すぎる。というよりはずっと、天邪鬼だ。

そろそろ話すべきだろう。複雑になる前に、こういうことは済ませておくべきだ。

「なあ、小湊さー」

「なあにかな？　何でもお姉さんに話してごらん？」

調子に乗るな、とだけ言ってから、すぐに本題に入った。

「俺がここからいなくなるって言ったら、信じるか？」

「え、引越すの！？」

その大声に店内の視線が集まり、俺はそんな外聞を気にして謝辞を告げておいた。それを睨む小湊に迫力などなく、結局俺は笑みが

零れてしまうのだ。

例え解釈が間違っけていても、それを嘆いてくれたことが、不謹慎ながらも少しだけ嬉しかった。

「違う違う」

少し間は空いたけど、一応それだけを否定すると、小湊は安堵のため息を零した。先に届いたのは、俺のどんこつラーメンだ。今にも崩れそうな煮卵が美味しそうに光っている。

「……食べない？」

「食べる。まあ、後で話すよ」

「うんうん、伸びちゃうもんね。不吉な話は長引くもんね」

結局、小湊はいつも通りだった。信じちゃいないことは明白だったし、これから行くスル・クレームに想いを馳せて笑っているのもわかった。この笑顔は、俺の為に曇るだろうか。そんな不安と、少しの期待。胸を締め付けるのは、一体どちらの感情なのだろうか。

スル・クレームの店内で話した事実を、小湊は笑いながら聞いていた。俺の前に突然現れたセレネのこと、その正体、そして彼女が告げた俺の宿命。認識の反意性という事実だけを伏せたその話を聞き終わったその時、小湊の笑顔は消えていた。それで救われた気がするんだから、俺も相当に病んでいる。

「……本気なの？」

「ああ。少なくとも、こんな性質の悪い冗談を言うほど腐ってはないつもりだけど」

声にならない呟きを残し、小湊は黙り込んだ。

気まずい沈黙、居た堪れない空間。そこは女性の集まる華やかな場所だというのに、どうしてか天涯に広がる曇天のような色をしている。

「本気、なの？」

「本気。信じてくれると、嬉しいかな」

「信じてくれたら嬉しい？ それこそ本気？ どうして消えたら嬉しいのさ！」

「げつとだぜ！」

小湊の激昂を遮る強く綺麗なソプラノは、俺達の視界の外、テールの左側から聞こえてきた。半ば呆然とする俺達の頭上には、奇妙な形をした傘が広がっていて、その中に小さな光の粒が少しずつ溜まっている。

件の場所には、爽やかな笑顔をしたセレネが妙なポーズで傘を掲げていた。

「……セレネ？」

「はい、セレネです。よかったですね、陽介さん。一人目は順調に成功ですよ！」

頭上に疑問符を浮かべる俺の質問に、セレネは丁寧に答えてくれた。

曰く、この骨の存在しない奇妙な傘こそが、セレネの造っていた天傘というものらしい。それは人の身体から発せられる意思の波動——今小湊から出ている光の粒が天に昇るのを防ぎ、集める為のものだということだ。その波動は至極微弱で、相当に強くない限りは視覚化されず、特殊なケースでしか使えない。

この特殊なケースこそが、今だ。小湊が考えた「陽君が消える」という意思——それが悲しみか喜びかは知らないが、それが光となつて現れ、回収した。これを集め俺の身体に入れることで、俺の存在は確立される、らしい。

「あと何人くらい必要なんですかね？ 結構大変な作業なんですよ、こうやって陽介さんに張り付いてないといけまふえんし」

「なんだ、信じさせるだけじゃ駄目なんだ」

この子の都合のいい力も、そういえば本人がいちいち出向かないと使えないんだった。ましてこんな大規模なことをするんだから、それ相応の苦労は強いられるのが当たり前だというのに、どうして気付かなかつたんだろう。話をするなら何かしら口実を作つて、最初からセレネも連れて来ればよかったんだ。

しかし小湊に関してはこれで成功。幸先はよし。期限は残り二十

五日程度だ。

「……ちよつと、私にわかるように説明してくれないかなあ？」

ただし、事後処理に尽力する必要は当然出てくるわけで、小湊さんの光ちゃんは、それはそれは大層お怒りになっていたそう。

あの意思の波動は、一度集めただけでは意味を成さないこともあるそう。一度に集められるそれは微量に過ぎずあくまで散漫とした光——波や粒というものの束である為、その「確信」が浅かった場合、何度か集めて完全な形を成す必要があるらしい。信じ続けているだけでは強い意思は生まれず、どうにかしてショックを与えなければならぬというわけだ。

その場合、最低二度。それが条件だ。

「小湊はどうだった？ 場合によっちゃもう一回小湊か、或いは子供達に取り掛かるべきか」

「そうですね……光さんはまだでした。でも、二度目は難しいので、とりあえず全員一度ずつクリアするべきじゃないでそうかね」

この美貌と舌足らずな口調とのギャップに何か感じるところがあり、どうしても話のみに集中できない俺を、誰が責められるだろう。「真面目に聞いてくだいたいね。えと——子供達は割と簡単に信じてくれそうですよね」

「かなあ。引越す、じゃあ駄目なんだろう？」

「はい。世界から完全に消え去るものとして認識してもらわないと」そう考えると、一度でも信じてくれた小湊には少し畏敬の念を抱いてしまう。そしてそれだけ俺のことを信用してくれてるのだと思うと、不謹慎ながらも笑みが零れるほどに嬉しくなってしまうのだ。「思い出し笑いですか？ 少し気持ち悪いですよ？」

「ほつとけ！ お前ってほんと正直というか、少しは建前を大事にしろよ」

顎に指を置いて少し考えたセレネは、その指をそのまま胸の前で立てた。服の上からでもわかるほど、形の整った胸だ。

「ほら、あたしは人間じゃないですから。あんまり人間の思想とか関係ないんですよ」

言い訳にしか聞こえないのは気のせいなのか……いずれにしたって、この子には世話になるし、下手に機嫌を損ねたら元も子もない為、仕方なく俺が折れることにした。

また月代や小湊と不和にならなければいいんだけど。

「あ、知ってましたか？ 子供の意思は割と純粋に近いので、多くの場合一度で済むんですよ。まあ、あくまで仮説ですけど」

「……いや、仮説だけで十分だ。できれば——」

環がそうであって欲しい。皆を好きなつもりではいるけど、やはり彼女だけは特別だという認識が捨てられない。人間、誰しも平等にとはいかないものだ——これもやはり、言い訳にしか過ぎないわけだけど。

どうしてこうなったのだろうと、理由を訊いたことがある。セレネは「別に珍しいことじゃない」とだけ言っていた。世界は常に不安定な状態にあり、その原因にあたる人間達それぞれに、一人のテンシが付くのだという。全ては世界の安定の為、或いはその人の為、それがテンシの生き方だそうだ。

「皆、セレネみたいに綺麗なのかな？」

「人々に受け入れられ易いよう、ある程度の容姿は約束されているようです。もちろん、目的に応じて、というのがありますが」

醜い容姿では相手に受け入れられない為、傍にすることができない、ということか。それだけじゃない。テンシにも色々な者がおり、それぞれの目的があるのだという。

「あたしはまだ楽な方です。世界は色々な試練を人間に、テンシに与えますから」

「例えば？」

「本当に色々ありますが、最悪は……対象と添い遂げる、というものです」

それは人間にとって何よりの幸福だというのに、彼らにとってそ

れは何よりの不幸だと言う。セレネの口調から読み取れたのは、きつと「好きでもないから」という単純なものでなく、別の理由があるのだろう、ということだけだ。

悲しみに満ちた声は、それよりずっと、寂寞としたものだった。

「いいんです、そんなことは。今は、陽介さんのことをなんとかしない」と

「……だな。よし、じゃあ——」

環とあの男の子は、傍にすることが多くなった。しかしそれでも、俺の傍を離れてからの環は一度も笑うことがなく、時折目を伏せて表情を消してしまう。

誰をして彼女を救うことができるだろう。そして、彼女以上に、月代や両親が心配だった。彼らは生まれた時からずっと一緒にいて生活を共にしてきたし、何よりの辛苦は大抵共有してきた。年季と悲しみが比例するとは言わないけれど、しかし年月が情を深いものにしたことは否定できない。

環はよく砂場で遊ぶ。山を作った後、それを壊さずに公園を後にする。

俺はそれを、見守っているだけだ。彼らに後始末を教えるのも、忘れたそれをするのも俺の仕事だけど、どうしてその山が崩せるだろう。投影しているだけなのだ、この山は「俺」なんだ、と。

「環、何か言ってるか？」

「んー？ わかんない」

ベンチの上、両隣に座る男の子と女の子に、どうしても気になったから訊いてみた。あの子は今、俺のことをどう捉えているのだろう。

「でもねでもね、『陽にいはもういいの』って言ってたよ！」

「そりやかなり凹むな。とうとう俺も飽きられたか」

悪女らしいセリフを吐くものだ、などと意味のない感心をしながら、内心では本当に落ち込んでいた。環が言うのは、つまりこうい

うことだろう。

「消えてしまう人に用は無い」

自分の娘でもあるまいに、子供にここまで心乱される高校生も珍しい。

消えない為に頑張ってるんだ、わかってくれ。これだけのことが言えないのに辟易し、これからの行動を悔い、他の子供達との間にもどこかで線引きしている自分がいる。あの小さな身体を、もっと優しく抱き上げてあげたいのに。

「めぐちゃん、元気ないよね」

「うんうん、いつもよりきびしいね。ママみたい！」

他人に厳しくすることで自分を知ることができると聞いたことはあるが、環はそれで何を埋めようとしているのだろうか。それは俺が開けてしまった穴なのか、それは俺以外の誰かにも埋められる穴なのか、環はまた笑えるようになるのか。

「ほら、お前らも一緒に遊んでこい。今日は人数が少ないんだ」

元気よく返事をして、二人の子供は砂場へ駆けて行った。この二人でも、あの砂の山は崩せるのだろうか、また直すこともできるのだろうか。

直った山に、中身はあるだろうか。頭を過ぎったけど、すぐに消えてしまった。

「セレネ、いるんだろ？」

「ご用でつか？」

振り返らずともわかる、ベンチの背もたれから生えるように登場するセレネの笑顔。

横に突き出してきた顔に張り付いたそれは、何も知らない笑顔だというのに、どこまでも深くを見られているような表情で、とても出会って数日とは思えなかった。

だから、弱音も吐きたくなる。

「俺さ——」

「うーん……そこは、言わないが華ですよ？」

でもそう、彼女自身に止められてしまった。そして自覚するのは、子供達——環にとつての俺という存在の意味、その重さ、発言、そしてその全て。十メートル離れているからといって、ここは彼らの目の前なのだ。そんなところで俺の弱いところを露見してしまえば、もしかしたら子供まで弱くなってしまうかも知れない。

言わぬが華、その通りだ。

「元気なお子さん達で結構ですね。何人か見覚えのある子もいて……あたしには、ああいう時代はありませんし」

その笑顔に映ったのは何だろう。図り得ないのが、どうしてか悔しかった。

「あたし達、生まれた時からこの姿なんです。以前言った通り目的に応じた姿をとりますからそうならざるを得ませんし、それに疑問を覚えたこともありなせん」

今は相槌だけで十分な気がしたから、「うん」とだけ返しておいて、その代わりに十二分にまで聴いてあげようと思った。人間がテニスを慰めるなんて、多分あつてはならないことなんだろうけど。

「子供は子供のまま、大人は大人のまま。これの意味、わかりますか？」

「……ごめん」

「そうですね。あたしもあんまりわかりませんし」

からかうような笑顔でセレネはベンチを回り込み、俺の隣に腰掛けた。こうしてみると、いつも思うよりずっと細い身体をしている。それはとても頼りないはずなのに、どうしてかここまで頼りにしてしまっていた。

「あれ？ 笑うとこですよ？」

「いやいやいや、今のどこに笑えと？」

おかしいな、なんて呟きながら、セレネはどこからか例の天傘を取り出した。どこにしまってたんだ？ なんて疑問は、この場の空気が封殺しておいた。

「これもそう、あたしにしか造れないあたしだけのどーぐ」

「あれ、俺みたいなのって結構いるんじゃないの？」

「同じ例は滅多にありませんし、陽介さんのケースに至ってはあたしが初めてです」

その事実が俺の頭に浮かべたのは、「どうして俺が」なんて情けない発想だけだった。テンシが強いものだとするれば、俺なんてのは救う対象としては最低なのかも知れない。

テンシは、その使命に応じた姿、能力、知識が与えられる。文字通り世界の使いという立場であって、そこに善悪の境界などなく、求められるのは役割の完遂のみである、ということだ。そしてその生き方に、満足するようにできている。

「使命を全うするのは、人間にだって気持ちいいものでしょう？」

「そう、だな。わからなくもないけど」

横目に見たセレネの笑顔は、何の蟠りもない気持ちのいい笑顔だ。確かに、何の疑問も抱いてはいないのだろう。

「人間は面倒です。下らないことに一喜一憂して、いざとなると何もできずに他を頼る。さればこそです、あたし達が必要になる」

感情が複雑に絡まれば絡まるほど、テンシのような単純明快な命が必要になる。調停者というのは、本来そうあるべきなのだ。

「貴方も同じですよ？ 仕方ないっていう都合のいい言葉で片付けられたら、こっちは堪ったものじゃありません」

何も言えなかった。だって俺は、こんなにもセレネを頼りにしていて、自分で動くことをしていないのだから。

でも、セレネの笑顔は俺を責めているようにも見えなかった。この笑顔には見覚えがある。それはそう、母さんが俺を見守る時のそれによく似ていた。手のかかる息子に辟易しながら、それでも隠しきれない慈愛というものを感じているように見えたんだ。

「でも、」

「セレネ」

言葉を止めたセレネの瞳を覗き込んで、俺は一度だけ笑ってみた。今まで生きてきて余りしたことのない愛想笑いを、俺は上手くでき

ていただろうか。

「大丈夫。俺、頑張るから。セレネのこと、ちゃんと受け入れてみるからさ」

偉そうかな、なんて思ったけど、それくらいしか言葉が見つからなかった。そう、俺はセレネを受け入れてやらなくちゃならない。それは多分自分に降りかかった運命を受け入れるということで、何が起こっても諦めてはならないという意味の表れだ。

セレネの目には何が映っただろう。少しだけ惚けた様子で、セレネは笑っていた。

「——はい。期待、してます」

3話

飲み込んだ言葉は数え切れないほどに多く、それ故に表情を消すのが上手くなった。培った処世術はとても綺麗なものとは言えないけど、少なくとも誰かを不快にすることはないはずだ。そんな自信のなさが時折表れるのが、月代という女だ。努力の陰にそういった情緒を見せるのは決まって、彼女が一人の時だけだった。

誰にもその陰の部分を見せたことはない。友達はもちろん、幼馴染の俺にもだ。どうしてだろうと嘆いたこともある。俺は月代に救われてきたのだから、月代のことも救ってやりたいと、そう心から思っていた。

ただ、その気持ちに気付いてからは素直にそんなことは言えなくなった。だってそうだろう、彼女がそれをする理由は、俺自身なのだから。

気付いたのは何時頃だったか、もう覚えはないけど、遊びに行ったら彼女のその部屋で、彼女は一人泣いていた。

どうしてわたしは笑っているんだろう、どうしてその一言が告げられないのだろう、どうして、どうしてどうして、——

逃げ出した。彼女の泣き顔を見ていたくなって、何よりその気持ちに気付くのが怖くて、俺は顔を背けてしまった。悔いても悔い切れない、俺の過ちだ。その時月代に走り寄り、彼女の気持ちの一切を聞いていれば、今の何かが変わっていただろうか。

放っておいてくれなんて言ってみるけど、そんなこと彼女にできるわけないじゃないか。それでも、それ以外に何が言える？ 一度拒

絶した俺に、何を言う資格があるっていうんだ。

だから、俺はいつも通り彼女を見守っている。或いは守られているのは、俺の方なのかも知れないけど。

「陽、お勉強は真面目にね？」

「あ、ああ……ここ、わかんないんだけど」

月代の部屋には行かなくなって大分経つ。俺の部屋で宿題に打ち込む俺達を包んでいるのは、梅雨独特の強かな雨音だ。

小さなテーブルの上、宿題に出た微分の問題をシャーペンで指し、突き出したノートを映した月代の瞳を覗き込んだ。いつも通り、透き通るような綺麗な茶色だ。

「あのね、あんまり見ないで？ わたし、得意じゃないから……」

いつもクラスメイトの視線を浴びているというのに、月代は見詰められるのが苦手だった。特に瞳や髪の色にコンプレックスを持っているらしく、それを指摘されるのは今でも嫌だと言う。

色が薄い。そのせいか日光にも弱く、長い時間太陽へ出る時などはあのような格好をしていないと体調を崩してしまう。白い日傘と帽子は、子供達の中では彼女のトレードマークだった。

それでも俺は、時折そうして彼女の髪や瞳に魅入ってしまう。

「何回も言ってるだろ、キレイだって」

「そ、それでも……陽でも、嫌だもん」

俺でも、というよりはずっと、「俺だから」なんだろう。昔はそれが原因で彼女を疎んでしまったことも、あっただろうと思う。

「それより宿題、見せてくれると楽なんだけど」

「ダメだよ、ちゃんと自分でやらないと。テストでいい点取れないと困るんだから」

「大学かあ……まあ、それなりだろうな。月代はいいトコいけるだろ？」

いい機会かも知れない。近づく進路の問題——俺には関係ないかも知れないけど、それは月代との何かを変えるチャンスになる。高校進学の時、彼女は「雨塚にする」と言って聞かず結局そうしてし

まったが、今回ばかりはそうはいかないだろう。高校と違い、大学はそれ一つで将来を大きく変えてしまう。

それでも月代は、聞かない。

「陽は、どこの大学に行くのかな？」

「んー？ まだ、決めてない」

最後まで、言う機会はないかも知れない。

「いい加減決めなくちゃいけないよね。わたし、調べたら色々教えてあげるよ」

その言葉の陰に隠れる意思が手に取るようにわかるから、彼女はとても厄介だ。多分、わかるように言っているんだろう。

「月代さあ、大学くらい自分で選べよ？」

「わ、わかってるもん。わかってる……」

少しだけ遅れた拳動が全てを語っていて、俺は肩を落としてため息をついた。

俺は、月代が信じてくれないとこの世にはいられない。彼女が望む限りは一緒にはいられない。だから、大学を自分で選ぶくらいの独立心を養ってもらわないと、心配で仕方ないじゃないか。

俺よりいい男はいくらでもいる。素直だから、悪い男には騙されないで欲しい。諦めたわけじゃないけど、そんなことを時折思う。そんな時は決まって、俺は一人だった。いつでも傍に行ける子供達と、いつでも傍にいてくれる月代が、傍にいない。今じゃあ、そんなことまで苦痛に感じるようになってしまっていた。

セレネが、穴を埋めてくれる。そう信じたいこともあった。

「大体お前、元々文系だったろ？ それがどうして理系を選んだんだよ」

「た、楽しそうだから。文系は、わかることの方が、多いでしょ？」
それなのに、救ってくれるこの人に対する糾弾を止めることができない。傍にいてくれと願いながら、どうして俺は突き放すような真似をするんだろう。月代がわからないという以前に、自分の方がよっぽどわからなかった。

「陽こそ……陽こそ、何言っても断らないから……だから……」

「それがお前の選択か？」

「そう、そだよ？」

わからないな。俺が選んだことを選ぶことが彼女の選択？ それは結局、俺の意思じゃないのか？ こうして直接求める発言に気付かないふりをするこの作業にももう、疲れ始めてる。聞こえたノックに応えた俺の声は、少しだけの疲労を滲ませていただろうと思う。

「お茶、もてきましたよ」

「おお、さんきゅ。セレネもどう、勉強してかない？」

「そうですね……できるだけ自力でやりたかったですけど、あたしも一緒に頑張りましょうか」

月代に視線を向けられないようにした提案は、あっさりと受け入れられた。もしかしたらわかつていたのかも知れない、俺が今ここで、月代に全てを話すことが。

嘘、嘘、冗談はらしくないよ。笑顔でそう繰り返した。

月代の反応は、それだけだ。

わかつてはいたが、前途多難だ。月代を信じさせるには、実際に目の前で消えてしまう以外にないんじゃないだろうか、というくらいに頑固だった。意思の波動なんて、一欠片も出てくることはなかった。

このままじゃいけない。早くしないと、時間がないんだ。

まだ俺の「可能性」を知らない人間も混ざってしまいが、協力を仰ぐことにした。味方は三人、数えるまでもないセレネと、小湊とそして環だ。環が今の俺に協力してくれるか、それどころかまともに取り合ってくれるかさえわからないけど、少しでも希望を見せてあげないと余りに不憫だ。多少の危険は承知の上で、まだ幼い環に無茶はさせたくなかった。

その代償が月代かと思うとやりきれない気持ちにはなるけれど、それも仕方ない。仕方ないなんて都合のいい言葉で片付けられたら、

月代だつて堪ったものじゃないだろうけど、やるしかなかった。消えない為の、俺の世界に対する抵抗だ。

「何かいいアイデアないか？」

「そだなー。やっぱり環ちゃんが一番なんだろうけどねえ」

環は、自室には招いてくれた。ただ、自身は可愛いピンクのシーツがかかったベッドの隅に腰掛けたまま、一言も発しようとはしなかった。

それでも、とりあえずは聞いてくれるだけでいい。

「陽君でもできるだろうけど、それだとあんまり残酷すぎるよね」
「俺がかける言葉から選んでると、そうなるな」

「なんだかなー、私はもう完璧信じちゃってるもん。というか見ればわかるよ、陽君すごく焦燥としてる。ヨヨちゃんも、わかってるはずなんだけどなあ」

自覚していたかと問われると、ノーだ。彼女達の前では、上手く立ち回つてると思つていた。

「セーちゃんはどう？ 陽君、変わってる？」

「セーちゃん……まあいいですけど。えと、残念ですが、あたしは今の陽介さんしか知らないもので。すいません」

そう言うセレネの知る俺がどうという人間が知りたい反面、救う対象にどういった感情を抱くのかなんてことを知るのは禁忌ではないかという恐怖もあった。セレネの感情ははまだ量り得ず、だからそれが怖かった。

何が怖い。セレネの瞳が怖い。消えるのが怖い。環に嫌われてしまふのが怖い。そして、月代を突き放すのが、怖いんだ。

「光さん、陽介さんとはいつ頃お知り合いに？」

「ヨヨちゃん経由だね。中学上がってすぐだったかな？」

「ああ、そのくらい。あいつ、中学上がって初めての友達だよーって、すげえはしゃいでたからよく覚えてる」

あの日は、初めて下校を別にした。部屋に戻ってくつろいでいた俺の前に現れたのは、満面の笑みを浮かべた月代と、一回り小さな

小湊の影。あの頃から元氣印だった小湊に少しだけ圧倒されながら、それでもあつという間に仲良くなった。

俺から離れていくんだろ、あの時はそう思っていた。

「小湊がもつと引つ張ってくれたらな」

「私は十分引つ張ったよ。ヨヨちゃんが強いんだ」

「それは――」

俺と小湊、揃って首を傾げ、セレネに視線を向けた。微かな笑みを浮かべたセレネの表情は、それでいていつも通りに見える。

「それは、果たして強さでしょうか？」

「聞き捨てならないね、それは」

少しだけ、些細な変化ではあるけど、小湊は憤慨した様子でセレネを睨んだ。月代のことにに関して、こいつはどこか譲れないものを持っている、ということだけは知っていた。あの子には、それだけの人格が備わっている。

月代には人望がある。どうして俺にまわりつくのかという命題に答えを出すのなら、きつと、「いつも一緒にいてくれる人だから」なんだろう。それを確証に至らしめるのは、彼女の中では俺だけだということだ。

それも終わり。確信は疑念へと、疑念を確信へと変える時だ。

「好きな人を想い続けることの、どこが強さじゃないっていうのさ？」

「盲目は強さですか？ 障害者を差別するなどは言いますが、区別と差別は違います。それに、本当に障害者にマイナスはないと思いますか？」

正論は確かに正しいが、それ自体納得はし辛いものだ。

「普通に扱ってくれ。障害者がよく言うセリフだそうです。じゃああたしは簡潔に答えましょう。無理です、とだけ」

「それは……そう、だけど、でも！ でも、ヨヨちゃんは違うもん」「お前らさ」

声を発した俺に、二人はそれぞれの視線を浴びせてきた。活発な

色を消してしまったその瞳と、相変わらず虚ろな恐怖を湛えた蒼い瞳。二対ともが、恐ろしく映った。

「お前らさ、ここがどこだか忘れてないか？　いくら本人はいないからってさ」

「あ、ごめんなさい。ついつい……」

小湊からの返事はなかった。

その代わり、完全にへそを曲げてしまったかと思ったが、それでも帰ろうという意思はないらしかった。それだけに安心して、話題を元へ戻し、セレネと小湊の仲の軌道修正にかかった。

「小湊の口から言うのは？」

「私が怒られちゃうじゃん。絶交されるの、嫌だよ」

「セレネは？」

「やつてもいいですが、どうなっても知りませんよ？」

つまり、どうなるか予想はできている、と。

俺にだって予想くらいはできる。小湊の言う通り月代は、下手な冗談を言う人間とは口も利きたくないという人間だ。セレネなら或いは、とは思うが、信じた場合は尚都合が悪かった。今度はセレネに何が起きるかわからない。

結局、彼女を諭せるのは俺自身か、もう一人――

「環、どうにかならないかな？」

やはり返事はなかった。もう、頼れるのはこの子だけ。この小さな身体に背負わせるには余りに大きな荷物だけど、それが希望なら縋つてもみたくなる。自分勝手、我が侬ではあるけど、消えたくないんだ。

「環ちゃん、私からもお願いするよ。知らないままなんて、ヨヨちやん可哀想だよ」

「あたしも一応、そうしてもらわないと困ります」

環はそれでも口を開こうとはしなかった。月代と同じ、俺との幼馴染の少女は、だからこそ心開けないでいるのだろう。視線は虚空に消え、ぬいぐるみを抱いた腕がきつく絞まっている。不細工に歪

んだシマウマが、泣きつ面で俺達を見ていた。

「……月ねえ、めぐのことなんか信じてくれないもん」

そしてようやく口を開いたと思ったら、そんな冷たい言葉だけが出てきた。

「めぐのこと、嫌いなんだもん」

部屋に静寂の帳が下りた。誰しもが否定できるものではあったが、本人の表情や声調が余りに真摯だったから、誰もが声を発することができなかった。両親の次に二人を近くで見ていた、俺でもだ。

要素はいくつか見当たった。それでも月代は間違いなく環のことを愛しているし、大切にしている。どうして、どこで曲がってしまったのだろう。

「めぐ、なんにもできない。なんにも、したくないもん」

「環ちゃん、陽君は消えちゃうんだよ？」

「消えちゃうんでしょ？ 消えちゃうんだ……めぐのそばに、もういてくれないもん。だったら、もういいもん」

そう信じている限り俺は消えない。そう説明すれば、子供心に「俺は消えない」と信じるようになり、結果俺は消える。だからそれを説明することができなかった。

これはどういう運命だ。世界に対する恨み言があるとしたら、こんなジレンマを子供に課さないでくれ、くらいのものになる。

「小湊、セレネ、ちよつと出てくれないか？」

頷いた小湊が反応しないセレネを引つ張り部屋から出て行くと、俺はベッドサイドに小さく腰掛けた。環との距離はちょうど一メートル、これが二人の壁だろうと思う。

しばらくは声が出なかった。何を話していいのかわからないという以前に、話す言葉を探してすらいなかった。敢えてそうしなかったわけではなく、ただ邪魔者なしにして環と二人になりたかった、というだけだった。我ながら失策だったかな、なんて苦笑したら、ベッドが少しだけ軋んだ。

環が動いたのかな、なんて淡い期待を抱いたけど、俺の身体が無

意識に動いただけだったようだ。

十分くらいだろうか。体内時計はそのくらいの時間経過を感じ取っていた。

「陽にい、何かお話して？」

「何が聞きたい？ 童話の類は結構詳しいぞ」

「陽にいのこと聞きたい。たくさん、聞きたい」

それは懇願というよりは、訴えに似た声だったと思う。その訴えを聞かない理由もなく、俺は環を抱き上げ、膝に乗せてから話し始めた。学校でのことや家でのこと、環と一緒にいられない時間のこととを、とにかくたくさん聞かせてやった。俺が知り得る自身のことなんて、そう面白いものでもないだろうけど、それでも時間が続く限りだ。

膝の上で俺の腕に抱かれながら大人しくそれを聴いていた環は、いつしか小さな相槌で答えてくれるようになった。小さく細く、それでも可愛い声だ。

結局いつものように笑ってくれることはなかったけど、環は膝の上で舟を漕ぎ出すと、部屋から出ていた二人が戻ってくる頃には、あどけない寝顔を無防備に晒すようになっていた。

「可愛いね…… やっぱり陽君はすごいや」

「懐いてるから、だろ？ この場合、付き合った時間の長さだよ」

「どれだけ長くて、どれだけ短くても、子供ってそういうの見抜けるんだよ。誰になら心許せるんだ、って」

そういうものかなと考えてみたけど、やはり付き合いの長さからか、環のことをよくわかつているとしか思えなかった。

よく似てるんだ、何だかんだ言ってみても。

「この子も大変ですね。子供だというに」

「そうだな。でも、出会わなきゃよかったとは、不思議と思えないんだ」

そんなことを思ってしまったら、彼女の気持ちを否定することになってしまっし、俺の根底にある感情が、彼女を否定してくれそう

にはなかった。誰よりも、とは言えないかも知れないけど、それでも誰よりも大切だった。

セレネの表情は、いつも変わらない笑顔。テンシに喜怒哀楽は存在するのだろうか、という疑問はすぐに解けたが、表情の有無ばかりはその限りではなかった。

どうしてだろう、笑顔以外の表情を見たいと思った。

「セレネは、家族がいなかったよな？」

「ええ、そもそも親というものがありませんし、何よりテンシに種の種としての意味はにやいんですよ」

「悲しくないの？ 寂しくないの？」

小湊の言葉には多少の憐れみを感じられたけど、多分セレネにとつては意味のないことなだろう。

「無いものに、何を感じると言うんですか？ 無いものは、無いんです」

純粹な疑問だ。そこに寂寞も哀愁も何も感じちやいないだろうし、疑問だって同様だ。だけど、果たして「そういう風に造られたから」で納得できるようなものだろうか。人間である俺には、理解できないことだ。

理解するのが無理だとするなら、彼女を知るにはどうしたらいい？

「テンシって、もっと温かい感じがすると思ってた」

「宗教上そうならざるを得なかった、というだけでしょう？ あたし達には、使命と矜持が全てなんです」

「使命感で、たった一人の人間に人生捧げられるの？」

一瞬の間も置くことなく、セレネは答えた。「必要ならば」と、それは正しく使命に生きる者の台詞だったろう。

「ヨヨちゃんに、ちょっとだけ似てるかな」

どこがと思ったのは一瞬のことで、次の瞬間にはその考えに辿り着いた。

「思い続けるものの違い。それが信念か人かの違いでしかないんだよね」

「そうですか？　あたしは特にそれを思ってるわけでもないですけど」

思い続けてるわけではなく、だったら何だと言った？　残念だけど、そればかりはわかりそうもなかったし、セレネに直接訊こうとも思えなかった。

環の寝顔を眺めながら、取り留めのない話ばかりを繰り返した。当初の目的などは忘れたかのような笑顔でそうしていると、不思議と満たされた気分になる。月代のこととか環のこと、小湊のこと、セレネのこと、そして俺のこと。どうしたってわかり合えることなんてないのかも知れないけど、今ばかりは彼らのことを知りたいと願っていた。

どうしてだろう。深くまで知れば知るほど、見えなくなってくる。例えばセレネに家族はいないと知って、その先にある感情にまではどうしても触れることができない。小湊も同様だ。人間でない「未知」に対し、少しだけ臆病になっている様子が見受けられた。

「アマツカからは、バベルと呼ばれる塔を使って昇ってきたんですよ」

「なんか不吉な名前だね」

「そうですね、で、ですね、バベルの天辺に、まあ——装置とでも言えがいいのか、そういうのがありまして、そこから出てくる気泡に入って、あの池から出てくるんです」

あの時セレネ、溺れてたよな。もしそんなに精巧な装置があるのだとしたら、それはあり得ない事態なんじゃないだろうか。今頃アマツカは恐慌状態かも知れないな、なんて考えてすぐに否定した。セレネの言うことが本当なら、誰もセレネの安否など気にしてはいないだろう。

それを哀れんでしまうのは、多分俺が人間だからだ。

「陽介さんはどうしてあの学校を？」

「あ、いや——特に理由はないけど、ただ近いからって」

「そうなの？　でもそうだね、ヨヨちゃんと離れたくないもんね」

「ああ……そう、だな」

我ながら煮え切らない返事をしたものだが、小湊には悟られなかっただろうか。

本当は、月代とは別の学校に行くつもりだった。もつと偏差値の高い進学校に進むとばかり思ってたから、俺は大したことの無い雨塚高校を選んだ。結局、月代の意思は最初からわかりきってたはずなのに、どうしてそうしたのかは、今でも俺にはわからない。

どうしても譲れないものが俺にだってある。月代にとって、それが俺なんだろう。自覚するのも変な話だが、月代というのはセレネの言う通り本当に盲目的に俺を信じ、その後を付いてくる。

心地良くもある反面、心配や不安が尽きない。嫉妬なんて醜い感情をぶつけられはしないだろうか、なんて表面的なものから、この先あの子は壊れてしまわないだろうか、なんてものまで、それこそ様々だ。月代が月代である限り、それは常に纏わり消えることのない悩みなんだろう。

だから、それを受け入れるかは俺次第。他人に代わってもらおうなんて虫のいい考えは持つちゃいない。

「ヨヨちゃんも、あれだけの要素を持ちながら、他の男に全く靡かないんだからすごいよね。あんな女の子今時いないよ」

「でもああいう人って、意外と厄介ですよ？」

「でも贅沢は言えない。でしょ、陽君？」

「まあ、そうだろうなあ。月代で物足りないなんて言ってたら、他の男に刺されそうだし」

そう、俺がどう見たって、世間はそう捉えてくれない。月代はあくまで最高の女で、それを独占する俺というのは男の敵、というわけだ。

「やりたいこと、ないのかな……」

「あるん、だろ。我慢することないのにな」

「それ、ヨヨちゃんに直接言っちゃだめだよ？」

手遅れといえば手遅れ、昔の話になるけど、もう何度も言っ

まっている。

我慢するな。俺に構ってばかりいないで、もっと自分のやりたいことやれよ。それは果たして、月代の為だけに言った言葉だったのだろうか。

「セーちゃんが来たから、何か変わるかも知れないよ?」

「そうですかね? あたしは……そうですね、あたしがやりたいことといえばそれくらいでしょうか」

「何、セーちゃんにもあった?」

好奇心をくすぐられ、小湊と俺はつい前のめりにセレネを見詰めてしまった。気を悪くするでもなかったが、セレネは悪戯っぽく笑ってはぐらかすのだ。

「秘密です。いずれ、叶ったらいいな、くらいのものですから」

期待の枠を超えることのない、希望でないもの。曖昧で不器用で、それは使命や矜持とは一切の関わりを捨てた願い。セレネにもそういうものがあつたんだなという驚き以外の感情は何も浮かんでこなかった。

それでも、セレネのそれが実現すればと、そう思う。俺の為に生きてくれる彼女には、せめてささやかでもそれを叶えて欲しかった。光さんは? 夢、それから今やりたいことでも、あります?」

小首を傾げ、小湊はすぐに答えを出した。

「ヨヨちゃんを幸せに。それが私の幸せかな」

「他人の為に、ですか。ふふ……あたしとおんなしですね」

そうだねと笑い合った二人が、ようやく重なった。多少ぶつつかってしまうのは、方向性こそ違えど目指す場所が一緒だからだろうか。月代を幸せにするというのも、俺を消さないというのも、他者を思う気持ちは同じだ。

「じゃあやることは一緒だね」

「そう、ですか? あたしは……そう思えない。思いたくないです」
「どうして? 陽君がヨヨちゃんの為に——」

言いかけて、小湊は黙り込んだ。一瞬だけど、俺がここにいるの

を忘れてしまったんだろう。けれどセレネの気持ちはわからなかった。それでも確かなことは、セレネは月代の幸せを願っているわけではない、ということだけだ。

謎が多いミステリアスな女性に惹かれる気持ちもわからなくはない。それは多分、その先にある「知る喜び」を想ってのことなんだろう。俺がセレネのことを知った時、きっと満たされた心地になる。俺が、或いはセレネが。

「――いずれにしても、手段こそ違えど目的は同じ」

「うん。どうにかして陽君をここに留めないとね」

具体策なんて浮かびはしなかったけど、三人の気持ちは一つになった。

膝の上の環の寝息は優しく、その小さな胸は俺の膝でゆっくりと上下していた。

4話

学校での生活は変わらない。たったの一週間ではあるけど、セレネの制服も大分馴染み、クラスにも粗方溶け込んだように思う。或いは、友人の少ない俺よりはずっとだ。

それでも使命の為セレネは、まるで昔の月代のように俺の傍から離れなかった。男子からの視線がまた強くなったのは、気のせいじやあないんだろう。学校中の女子生徒を把握しているわけでもないから言い切れはしないが、恐らくセレネが校内一の美人だと思う。そう、こと外見だけで言えば、「美しい」以外の言葉は彼女に必要ななかった。

純銀よりも輝度の高いその髪、サファイアより透き通ったその瞳、雪よりずっと艶やかなその肌。人間の造形では有り得ない、神の姿がそこにあつた。

もっとも、セレネの話によると、神なんてものはどこにも存在しないそうだ。世界を操るのは世界そのもの——生物達の総意なのだ。梅雨特有の豪雨によりグラウンドが使えず、体育館も上級生に使われている四限には、先生の監視下に置かれての自習時間になったが、その先生は早々に片付けたい仕事とやらで職員室へ戻ってしまった。

喧騒に包まれた教室の中、俺の席の周りに集まったのは、いつも通りセレネと小湊だ。隣の席の月代からは顔を背ける形になってしまったが、話すのに支障はない。

「服を着ていないわけでもないのに、露骨に胸が揺れるんですよ」「なにそれ？ 冗談じゃないの？」

嘘みたいな本当の話らしいが、セレネはどこからそういった知識を仕入れてきたのか、甚だ謎だ。必要な知識のみを与えられているとばかり思っていたが、実はそうでもないのだろうか。

「それだけじゃないんですよ。彼女、ある時期を境に人が変わったようなんです。表情も、以前のような快活さを見る影もなく」

「嘘だあ。それって鬱ってレベルじゃないよー？」

さすがの小湊も信じられないらしく、その赤い髪的女性に興味を持った様子だ。確かにセレネの話す女性には奇怪な行動が多いが、どこか惹きつけられるものがある。しかし、この世界の話なのか、それともアマツカの話なのか——そもそもアマツカにそういった文化の類は存在するのか、謎が謎を呼ぶ。

セレネのステータスに話し上手も加わった瞬間だ。同性すらも羨み魅入られるその容姿、決して近寄りがたいわけでもない、大らかな性格。惜しむらくは、

「頭可笑しいですよ。ええ、おかしいじゃなくて可笑しいです」

齒に衣を着せないことだろうか。毒舌というのは、こういう人のことを指して言う言葉に違いない。

「セレネさん、色んなお話知ってるんですね」

「ええ。月代さんには多少劣ると思いますけど」

「ああ、月代の童話に関する知識は異常だからな」

毒を持った舌とは裏腹に、その笑顔には甘い蜜が宿っている。感心そうな視線に、月代は照れを隠せない。

月代のその童話の知識の起因は俺にある。そもそも月代が子供と遊ぶのは、俺がそうしていたからだから、それも当然だ。最初の頃は俺が話す童話を聴いていただけのはずが、いつの間にか俺の代わりの話し手になってしまっていた。

時折混ざる童話のオリジナルは、子供に恐怖心を教えるという意味では素晴らしいものだ。例えばグリム童話である『茨姫』の元になった、シャルル・ペローの『眠り姫』では、グリムでは語られることのない続きがあり、人食い鬼である王子の母が、孫にあたる才

ーロールとジュールを狙った為に毒蛇に食い殺される、なんて終わり方になっている。それは童話というより、色々な社会風刺に基づいた「民話」と言って正しい。

加工されていない童話——特にグリム童話なんかは本当の意味で残酷なものも多く、正しく「子供心」に直接響いてくる。純粹で無邪気な悪意、子供の心に潜むそういったものを引きずり出す独特の恐怖を持っていた。それを敢えて聴かせる月代は、決まって最後に「怖いと思える子が、わたしは好きだな」と付け加える。それを聞いた子供達は、決まって身を震わせて月代に縋ったのだった。

「でも月代のは、子供がある程度育ってるから許される話だよな。もっと幼かったら泣き喚くだろうし、あれより育ってたら却って残酷になる」

「そうかなあ。童話っていつてもやっぱり文学作品だから、楽しむだけの知識と教養があれば、どんどん深くなるよ？」

将来に期待、といえは聞こえはいいが、あくまで子供は子供。

「環ちゃんがヨヨちゃんに近づかないの、それが原因じゃない？」

その可能性を考えてみたけど、俺が見ている限りでそれは違う。

それだったら、月代はこんな表情をしないはずだ。

「わたし、環ちゃんに嫌われてるんだ。ダメなんだ、わたしじゃあ」

苦虫を潰したような笑顔、多分それを「苦笑」っていうんだろう。

月代のそれは、人望が高いからこそそこに周りを巻き込んで伝染する。

俺にできるのは、精々話を逸らすことくらいだ。

「セレネは童話とかそういうの知ってるか？」

「ええと……そうですね、詳しい方だと思います」

「へえ、意外。セーちゃんってなんか浮世離れしてるから」

その知識が必要になったからと、セレネは俺だけに聞こえる声で話してくれた。要するに、子供と遊ぶことの多い俺の傍には、自身も子供を惹きつける必要があった、というわけだ。

席に座る俺の左隣に立つセレネは、同じく右隣の席に座る月代に笑いかけた。

「月代さんには足りないものがありません。そういうことですよ」
「足りないものが、ない？」

首を傾げた月代に対し、セレネはやっぱり笑っていた。

こんなにも早く、いやだからこそか、セレネは月代と環の関係にある意味を見出してしまった。どうしてだろう、それが甚く悔しい。

「『星の銀貨』ですよ、月代さん」

「わかん、ないよ」

それでも答えを示すことはせず、セレネはただ道のみを広げてみせた。その意味を見つけた時、月代と環は仲良く遊べるだろうか。その時俺は、隣で笑っていられるだろうか。それが少しだけ、気になった。

「そつえばセーちゃんってさ、いつも台詞噛むよね。今も「思います」が言えてなかったし」

軽くなった空気に乗じて、言っではいけないと思っていたことを、小湊があつさりと言にしまった。恐る恐る窺ったセレネの顔は、いつもと変わらぬ穏やかな笑顔だ。

「……え？」

「え？　じゃなくてさー、なんか口調も舌足らずだし」

「え？」

「いやだから……」

有無を言わさないつもりだ。このまま笑顔で押し切れればどうにかなるとでも思っているのか、その笑顔に一点の曇りも見当たらない。
「ちよつと早口言葉に挑戦しよう」

耳に届いた「ちっ」は、聞かなかったことにしておこう。

「わたしも苦手だな、早口言葉。知ってるのだと……庭には二羽、裏庭には二羽、鶏がいる……くらい」

「一応言えるレベルだな。小湊、『東京特許許可局長今日急遽休暇許可拒否』はどうだ？」

これは俺のとおっておき、というより唯一言える、難易度の高い早口言葉だ。破裂音が多く、意外に発音しやすいようになってる、

らしい。

「それは楽勝。むしろ、『お綾や、親にお謝り。お綾や八百屋にお謝りとお言い』の方が難しいと思うよ?」

まあ、予想はしていた。普段から良く喋るし、言葉に躓いたこともなければ舌が乾いたこともない。彼女くらい舌が回れば、将来言葉に関して困ることはないのだろう。

滑舌というのは、人間関係において意外に重要な役割を担っている。拙い言葉遣いは時に自身の意図を誤解させ、人間関係の不和を呼ぶことになる。進学や就職などの面接でも、それを重視するところがあるそうだ。

「セレネは? 何でもいいから言ってみてよ」

「えーと……こほん」

クラスの視線がセレネに集中した。ここまで注目しなくともいいが、やはり皆も気になるところではあったらしい。

「となりのかきはよくきやくくつかきだ、でしたっけ?」

教室に沈黙が降りてきた。

一応単語自体は間違わずに言えている。言えてはいるが……どうして微笑ましい早口言葉が、一瞬でホラーになってしまっただろうか。

「それ、何てB級ホラー?」

「どうしてもこーなっちゃうというか、ちゃんとわかってはいるんですよ? お客さんが柿を食べるんですよね?」

一応自覚してたんだな、発音が苦手だってこと。喋り自体が苦手というわけでもないのにこうして発音できないというのは、どうしても不憫に思える。

「舌足らずっていうくらいだし、舌が足りないんじゃない?」

「その発想はなかったわ」

小湊に促されるまま口を開け、「あー」と突き出された舌は、特に長短に特化しているわけでもない。これといった発見はなかったが、少し湿ったピンク色のそれが妙に艶っぽくて、俺は思わず魅入

ってしまった。だってそうだろ、こんなにも扇情的なんだから。

「陽、えっちだよ」

「ば、馬鹿、しょうがないだろ」

顔を背ける形になっていくというのに、月代にはそれがしつかりと見えていたらしい。気恥ずかしくなつて、意味もなく黒板へ目を向けるのだった。

黒板には何も書かれていない。薄く引かれたチョークの粉が、少しだけそれを汚しているだけだ。雨特有の湿った空気と匂いが包み込む教室内にあつて、それはどこか褪せた印象を覚える。

ため息一つ、視線を戻した。いつの間にか話題を換えて笑い合う二人がそこにいて、疎外感を覚えた俺は、天邪鬼にもそれに参加することなく月代に目を合わせる。

「陽って、そういう積極性が足りないんだよ」

「なんか、お前って何でもお見通しだな」

「そうだよ？ 陽のことなら、何でもわかるよ」

生まれた時からずっと一緒だ。家どころか、生まれた病院のベッドすらも隣同士で、ずっと互いの顔ばかりを見て育ってきた。そんな風に生きる兄妹同然だというのに、月代はそれに親愛とは違った情を見出してしまった。

俺はどうだ？ 自分自身というのは、やはり見えなかった。

「月代もさ、他の友達と話さないのか？ あんまり俺とばかりいると、誤解されるぞ？」

「たまに話してるもん。皆、わかってるもん。……それに、誤解つてなに？」

何度も言ってきたが、やはり回答は同じだった。

「枯れてるよなー、お前も俺も。幼馴染以外に異性に近づかないなんて、探究心が足りないぞ」

「いいもん、そんなの足りなくて。陽がいれば、わたしそれでいいよ」

「興味ないのか？ 恋愛とか、そういうの」

俯いたその表情は、俺からじゃ見えないけど、容易に想像がついた。これも付き合いの長さかと思うと、弊害にも思えてくるから嫌なものだ。

「興味、ないと思う？」

床に放たれた言葉は少し竦っていて聞きづらかったけど、それが誰に向けてのものかは、俺自身よくわかってる。今まで知らないふりをしてきたのに、どうして今更それに返事ができる？ 「さあとだけ、それで十分だ。」

「うん、でも……一緒にいてくれる人がいれば、やっぱりわたしはそれでいいな」

「そうか……なら、」

危うく口を滑らせるところだった。危うく、「一緒にいてやる」なんてことを、口にしてしまうところだった。

そんな保障、どこにもないくせに。

「環じゃあ、駄目なのか？」

「環ちゃんがそれでいいなら、わたしもそうしたいよ。でもね、ダメなの」

「直接言えよ、そんで歩み寄ればいいだろ」

首を振って、月代は微笑んだ。慈愛に富んだその笑顔は、それなのに悲哀ばかりを映し出している。真に一緒にいるべきは俺じゃなく、環のはずなんだ。

互いが互いを誤解したままにいるのは、とても悲しいことだ。

「陽、わたしお花摘みに行ってくるね」

「……ああ、全力で出し切ってこい」

「ばか」

頬を紅潮させた月代は、小走りで教室から出て行った。その言葉が本当にしる嘘にしる、彼女がこれ以上環の話をされたくないと思っていたことだけは確かだ。どうしたいかはわかってる。それなのに、どうしたらいいかわからない。それは目的と手段が一致してこないという点で、セレネと小湊によく似ていた。

どうしたらいい？ 最近の環には遊んでくれる男の子がいる。あれがいれば、もしかしたらと思うこともある。でも根本的な解決にはなっていないし、何より月代にはそういった俺の「代替」がないんだ。

「重症だね、陽君」

「気に病むことはないのに。陽介さん、今の貴方にそんな余裕があると思いますか？」

「だからこそだろ？ 『その先』が見えなきゃ、生きてないも同然だ」

消えた後のことを考えたからといって、それは決して悲観じゃない。危機に瀕して足掻くのは勝手だが、それで周りを貶めてたら本末転倒だし、何よりそれでは自分に関する記憶の永遠性を否定することにもなりかねない。

消えても、ずっと覚えていて欲しい。その為には、周りも納得させなければならぬということだ。

「それよりそろそろ自習時間終わりだろ？ 早いとこ課題終わらせなきゃ」

「そだね。じゃあセーちゃん、よろしく」

「いや、自分でやれよ」

ようやく聞いた名前は、日本人のものではなかった。ベルシズというそれは、子守唄という意味の『ベルスーズ』に由来しているそうだ。かといって、それが名になったところで意味などわからないし、それを訊いてやろうとも思わなかった。

嫌いではない。ただ、自分から進んで近づく気には到底なれなかった。環の傍に居てくれる存在というのは、今にあってとてもありがたいものだというのはわかってるのに、どうして俺は彼に不思議な敵愾を抱いているのだろう。

「陽にい。ベルがのどかわいたって」

「ん？ ああ……」

駆け寄ってきた環に渡した小銭は、いつも僅かながらに彼らの親から受け取っているものだ。お世話させるだけでは申し訳ないからというお駄賃と、それ以前の世話にかかる必要費という内訳が、千円に為されている。

二百四十円。それ以上は渡せない。

「ありがとつ。……ここにいてね！」

ようやく笑ってくれるようにはなったけど、不安ばかりは消えてくれそうになかった。何かにつけては俺が“ここ”にいることを確かめるようにして、小さくその手を振る。意思の波動が現出したということはつまり、俺がここから消えることを確信しているということ、それは不安などという言葉では表現しきれないのかも知れない。

仕方ない。世界がどうしてそれを俺に課したのかはわからないけど、彼女にはそれを信じてもらうしか道がないんだ。

それでも、「仕方ない」で片付けられてしまうのが、どうしても悔しかった。

「にしても、あいつはどこに住んでんだろ」

ベルはいつもそこにいた。俺と環が行く前には必ず公園に先着して待っていて、環を認めた瞬間にその顔を綻ばせる。以前からその報告を聞いたことがないので間違いはないと思うが、母親すらも確認されていない。

環の傷を癒す為、都合よく利用しているだけ。俺の中にはそんな認識もあった。

「たまには、混じってやるか」

自分ばかりが囲まれているのも気が咎める。ベルも含めて四人の子供が遊ぶ小さな広場に、俺は足を運んだ。

「おい、混ぜろー」

「おー陽にい、やるかー！」

「わー、めずらしいね！　じゃあ陽にいはいキーパー、あたしシュートする！」

「ばかだな綾香、陽にいはディフェンダーだろ？ やっぱフィジカル強いのはそうじゃなきゃ」

途端に周りに集まる子供達、女の子は綾香という子の一人だけだ。ベルは控え目に笑うのみで、自分を主張しようとはしなかった。サッカーという団体競技にあって彼がまともに動けるのか、少しだけ疑問だ。

「ベルは何やってるんだ？」

「僕はめぐるちゃんに言われた通り。フォワードだって」

そこまで本格的なものじゃないし、誰がどのポジションについても差し障りなどありはしない。華奢なベルだって、楽しくやってるはずだ。

その瞳には、不思議な煌きがあった。吸い込まれそうな、深い青だ。

「めぐちゃんは？ 自はんき、すぐそこなのに」

「……ちよつと心配だな」

子供達の監査役として、そして幼馴染として、彼女のことはいつも気にかけてきたつもりだ。戻るのが少しでも遅くなると、途端に胸が騒ぎ出す。

その広場に大声が響いたのは、それから数分が過ぎた時だった。

「陽にいのばっ！ あそこにおいてって、言ったじゃない！」

「ごめん、ごめんって」

「探したんだからね！ たくさん探したよ！」

激昂しているのに、その瞳が潤んでるから、余計に心が痛かった。俺がいなくなることにここまで怯えてるのかと思い知ると、その瞳に視線を合わせることができなくなる。いくら子供とはいえ、本当に責められている時というのは辛いものだ。

たった数十メートルの距離を空けて環が不安を感じている時に、俺は皆と遊んでいた。すぐに見つけるだろうなんて、ただの樂觀でしかなかった。

「ばか、ばか。なんで一緒にいてくれないのよう……」

遂には泣き出してしまった環を見て戸惑う子供達に待っているよう告げ、環を抱き上げてその場から離れた。泣きじゃくる環に、抵抗する力は残っていない。

嗚咽が耳に響くと、その振動が胸まで届いてくる。子供にとって「自分に近い人」を失う恐怖というのは相当なものなのだろう。幼い頃には、両親が風邪を引いただけで妙に心配になったものだった。いつものベンチに腰掛けた俺の膝、その上に環を乗せ、向かい合った。白い日傘が、二人の頭上で無頼に揺れている。

「ほら、環。掴まりな」

無言で首に縋りついた環の背中に回した腕は、いつの間に余らなくなっただろう。大きくなったもんだ。

「ごめんな、怖かったか？」

「……ばか、ばかあ」

少しだけ、情緒不安定になっている。

思うのは、環にとつての俺の存在価値だ。それは大切なものを持つ人なら誰しもが考えることなんだろうけど、結局その答えに辿り着くことなんてありはしない。大切な人にとって、自分はこういった存在なんだろう。

その涙雨は、俺の中の何を想つてのものだろうか。ただ、思うのだ。俺を失ったその先に、こんなに辛い涙はあつて欲しくない。と。梳いてやるその茶色の髪は、長くも美しい。肩に押し付けられた彼女の涙とその髪、首に回るその細い腕。なのに、どうしてこんなに重いのだろう。

「環、俺がいなくなったら——」

「そんなこと言わないで。めぐ、聞きたくない」

身体を起こした環に遮られた言葉を飲み込んで、その瞳を覗き込んだ。

「——そっか。じゃ、気が済むまでこうしてな」

「うん。ごめんね」

謝るなどだけ言って、再び環を抱え込む。細く小さな身体は涙に

冷えていて、せめて俺の全身で包み込んで温めてやりたいと願った。背後の並木道から聞こえる木々のざわめき、少し遠くでサッカーに興じる子供達の喧しい声、灰色の空を流れる雲の悲鳴が、色々なものを俺に教えてくれる。

世界に反した性質。敢えて言うなら、規模の大きな反抗期のようなものだろうか。大袈裟に言えばあの木々が俺を認めてくれるから、そして子供達が俺を慕ってくれるから、俺はこの世界にいられなくなってしまうた。

でも、それを恨めるだろうか。この世界の仕組みを全部知ってるわけじゃないけど、少なくとも、俺もこの世界の一部なんだ。

「ねえ、陽にい」

返事は、少しだけ掠れてしまった。

「陽にいにね、お礼してあげる」

「お礼？ 俺、何もしてやれないけど」

「そんなことないよ。たくさん、もらったもん」

ゆっくりと身体を起こした環の顔に、涙の跡はなかった。

どれほど考えたのかはわからないけど、強くなった。たくさんのものを貰ったのは、環よりずっと、俺の方だ。

数瞬後、頬に静淑な肌を感じた。柔らかなそれは少しだけの湿気を帯びていて、そして陽だまりのように温かった。

小さなキスをくれた環は、唇を離し頬を紅潮させ、縋るその腕に力を込める。

「お礼。ちよつと、はずかしいね」

「……ああ。ちよつとそつちの方面に目覚めそうな気分だ」

首を傾げる環が可愛くて、最後にもう一度だけ強く抱きしめた。消えたくない。強くそう思った。この温もりを二度と味わえなくなるなんて、そんなの冗談じゃない、そんなの嫌だ。この声を二度と聞けなくなるなんて——それでも、俺は泣くわけにはいかなかった。

しばらく抱き合ってから、俺達は子供達のサッカーに合流した。

ただ笑っていられる環境。ベルに楽しそうに笑いかける環を見て、それが実現することを切に願った。

それなのに、ベルは一度も笑うことがなかった。子供達の中でただ一人だけ暗い影を落としていて、やけにそれが気に掛かった。子供というのは、感情が露骨に表層化する生き物だ。だから、そういう陰を見逃すと、時に人格すら歪めてしまうことも十分にあり得る。

ベルを一人呼んで、皆に目が届く位置という条件付で先のベンチに腰掛けた。ここからなら、環の笑顔まで良く見える。

「なんか、元気ないな」

遠回しな気遣いは、却って相手の心労を増やす。子供相手ならそう言えたが、果たしてこのベルはどうだろうか。

「サッカーは、あんまり好きじゃないから」

「下手な嘘もあつたもんだ」

「嘘じゃあ、ないよ」

環がそこにいればどんなことでも笑っていられる。俺には、ベルという男はそういうものだと思えた。多分それに偽りはないだろう。それなのにどうだ、環が泣き喚いて、立ち直つてからも一度も笑えずにいるじゃないか。ベルの笑顔はいつも穏やかで優しく、そして淑やかだった。多少の敵愾は目を瞑るとして、それが消えてしまうのは残念だし、何よりそれはこの先の環を悲しませかねない。

彼には、ずっと笑ってもらわなくてはならない。それが環の為に――引いては自分の為だというのには少し、失望したけど。

「これでも子供の扱いは心得てるつもりだぞ？」

「だから、嘘つきくらいは見抜けちゃうんだ」

「そういうことだ。正直に言っちゃえば、意外にすつきりするかも知れないぞ」

特に子供の「嘘」というのは大きくなることが少なく、ただ「嘘をついた」ということに罪悪感を感じていることが多い。だから、彼らにとって一番大事なのは、「許してもらえるか」どうかなのだ。話してみないことには許すこともできず、余計に双方を苛むことに

もなる。

もちろん、許しがたいこともあるけれど。

「めぐるちゃん、ほんとに楽しいのかな、って思ってた」

「……ちゃんと笑ってるだろう？」

「あのね、お兄ちゃん。僕だって、そういう簡単な嘘なら、ちゃんと見抜けるよ？」

ベルは、予想以上に人を見ている。それはしかし、子供心に辛いことだろうと思う。

内面というのは、見えない方が幸せということもある。それが子供達の心象というのなら、人を傷つける時、こんなにも残酷なものはないのだ。

「多分、そういうことなんだと思う。お兄ちゃんが、生野陽介さん、なんだよね？」

「あ？ ああ、そうだけど……名前、言ってなかったか？」

俯いて苦笑したベルは、そのまま空を仰いだ。空が放つこの湿った匂いを感じるその気配。そろそろ、雨が降る。

「意思を集めてるんだよね？ まだ、そうたくさんは集まってない」
心臓が跳ねた。

どうして、どうしてベルがそれを知ってる？ どうして、何気なくそんな言葉を使える？ ありえない、そのことを知ってるのは、俺と小湊、そしてそれを集めるセレネだけだ。まして俺が消えることさえ知らないこの子が、知るはずもないじゃないか。

次の言葉は、次の行動は、もつと信じられないものだった。

「協力、するよ。僕も、世界の意思だから」

ベルの身体から発せられた光の粒。それは間違いなく――

ベンチの後ろから天傘が現れ、その光を拾った。振り向いた先にいたセレネの顔には、いつものような笑顔はない。

「貴方、何者ですか？」

「初めまして。――おかあさん」

セレネの知らない、セレネの息子。それがベルの正体。

「とはいっても、テンシに血の繋がりなんてないから、この世界で初めて、僕達の『使命』に関係があっただけ」

「あたしのそれと、どのような？」

ベルが言うには、俺が消えた後の「穴」を塞ぐのが彼の使命らしい。そして、恐らく一番大きな穴になるであろう環の傷を癒す為に彼女に近づいた、ということだ。環の為にここにいて欲しいという俺の願いは、正しくその通りに彼の使命だった。

「人の感情はよくわからないから、どうしていいかはよくわからないけど」

「あたしの、子供——？」

「そうだよ、おかあさんも使命から生まれた使命だもの、そうしか言えない」

それ自体が彼らの命、のような言い回しだった。そこを気にかける義務はないし、もちろん資格なんてものも存在しないんだろう。ただ、使命にしか生きられない彼らには、少しだけの哀傷を感じてしまう。

天傘は消え、セレネは俺の右隣に腰掛けた。俺を挟んで反対側、ベルを見ようとはしない。

「めぐるちゃんからは、まだみたいだね」

「そんなこと、わかるのか？」

「僕の力はそれ。埋めるべき穴の意思を汲み取るの」

意思を読む力。心を読むというのは、どんなに辛いことだろう。

俺は知りたくない。環が、月代が、今の俺に何を思っているかなんて、絶対に知りたくない。それを半ば強制的に知らされているのが、このベルという子供だ。

「どうしようかなあ……僕のは、そう簡単じゃなさそう」

「環さんは、陽介さんを慕ってますから。それも……普通じゃないくらいに」

俺には無理だ、そんなの。環の傷を埋めるというだけでもできそうにないのに、その後には月代が待ってる。自意識過剰でもなく、

彼らが俺を想う気持ちというのは、それほどまでに大きい。感じるんだ、肌で。

「この先、どうするんだ？」

「もう少し、様子を見るよ。というよりは、僕の使命は、動きようがないから」

「ご協力に感謝します。意思を集めたら、また」

「そうだね。その時には、僕はもういないだろうけど」

それだけ言って、ベルは子供達の元へ走り去ってしまった。

残されたセレネと二人、それなのに顔を合わせる事ができなかった。空気を震わせるものは遠く、それが耳に届く頃には感情は見えなくなっている。環やベルのそれを感じながら、隣に座るセレネの手を、ゆっくりと握った。

「……似ない親子もあったものです。そこに、意味などないのに」
血の繋がりはなく、しかし使命によって繋がっている二人。それでも、彼女には家族はいないのだろうか。それとも、それすらも疑問には思わないのだろうか。

「貴方のご両親のことは余り知りません。一度しか会ったことがないし……でも、貴方を想っていることだけはわかりました」

「結構、ほったらかしだけど」

感謝しろと言われれば、それができるだけの謝意は持つてる。それを普段意識することはないけど、大きな人だなと思うことも時々あった。例えばそう、セレネの居住を許してくれた時、無条件に信じてくれる親愛を感じた。いなくてはならない、空気のような存在。親とは、家族とはそういうものだ。

雲が鳴り始めた。その小さな手を握ったまま声を張り上げ、子供達に帰るよう告げ、それなのに俺自身はこの場を去る気にはなれなかった。梅雨の割に少ないそれは、慈雨となつてすぐにでも降り出すだろう。

「彼、どうなると思いますか？」

「どうなるって？」

「使命を果たせなかった時」

つまり、生き様を否定された時。

「その時、テンシは生きる意味を失います。魂といえば聞こえはいですが、アナムネーシスの具現、その実はただの意思の塊です。意味を失えば意思は消え、つまり——」

この世から——アマツカからすら、消えて亡くなる。

「不憫な子。そんな使命、果たせるはずもないのに」

以前、セレネが言っていたことを思い出した。「一生を添い遂げるのが、最悪の使命だ」と、そう言っていた。つまりそれは、対象と関わりながらその死を見届け、そして消えていくことを意味している。それが、ようやく理解できた。

セレネは俺の手を取り、それを強く握り締めた

「あたしはやり遂げます。それが、全てだから」

何を言えはいいだろう。頼もしいと激励すれば？ 有難いと礼を

言えは？ どれも、違う気がする。

「本当に、それが全てか？」

考えずに出てきた言葉は、それだけだった。

「どういう、意味ですか？」

「やりたいこと、できたんだろ？」

「ああ——それなら、もういいんです。思い知ったから」

その声に隠れた感情がわからなくて、俺はようやくセレネの顔を見ることができた。その表情は——やはり、変わってなどいない。

笑っている彼女に、手を繋いだまま環流の「お礼」をした。やっぱり照れてすぐに離れてしまったけど、とても柔らかな肌だったと思う。

5 話

よく笑う人間に「悩みがなさそう」と言える人は、本当に悩みを知っているだろうか。笑顔の意味を、本当に理解しているだろうか。実のところ俺だってそうだった。小湊を今まで見てきて、少しだけ羨ましく思っていた。

それでも、磊落を模倣してられるというのは素晴らしいことだ。どれだけ重いものを抱えていても、どれだけ覚悟を背負っていても、それを撥ね退けるだけの力を持っている。

小湊が羨ましい。俺を信じて尚、月代を背負ってられるその強さが。

「なーんて、言ってくれないかな？」

「言わんわ。自己陶醉も甚だしい」

ぶー垂れる小湊の膨らんだ頬を突くと、その小さな口から空気が漏れた。身長百五十センチにも満たない彼女の視線は、真っ直ぐに俺を捉えている。

昼食後の屋上は、雨の気配からか、それともその蒸し暑さからか、人も疎らだ。小湊の頭は、もたれたフェンスよりずっと下にある。

「あんたにはわからんだろうね、私の悩み」

「背が小さいことだろ。いつも人を見上げてるのは、偉いと思うぞ」「だー、もう！ それは触れるなよー！ そうじゃなくてだね、もっところ……」

何かを捏ねるような奇妙な手振りを交え、彼女は難しい顔で宙を睨んだ。一瞬の間を置き、俺の視線と彼女の瞳の間に浮かんだ不思議な光を、小湊は右手で捉える。

これは意思の波動だ。小湊が見つけた、彼女にしかできない、意

思の具現化。

「これはね、私が一番強く思うこと。それ以外は出せないから君の役には立てないけど……すごく、綺麗だと思うの」

「まあ、確かに」

淡い白、と言って理解できるだろうか。見たものにしか理解できない、言葉では形容のし難い、光の精白色だ。今まで見てきたそれとは一線を画すその色は、オリジナルと比べてもその美しさに遜色はない。例えば――まだ採取はできていないけど、環のそれは、不安を感じさせる淡い蒼をしていた。以前小湊から採取したのは、それとは違う、乳白色だ。

「これ、色によって違うのかな？」

「俺に訊くなよ。そういうのは専門家に任せとけて」

「セーちゃんか……彼女が来てから、変わらなかったものがどんどん変わってく」

例えば環、その気持ちの揺らぎは見ていて痛々しい。例えば小湊、快活さの中に大人びた印象を覚えるようになった。例えば月代は、環の変化を敏感に感じ取り、変化を一層に恐れるようになった。そして俺は、それを受け入れながら生きている。

セレネがいなければ、俺はずっと安穩と揺らいでいたはずだ。それを非とするか、それとも是とするか。それはつまり、彼女を肯定するか否定するかだ。

「テンシ、かあ……聞いたんだけど、羽って、ないわけじゃないんだってさ」

「へえ。誰に聞いたんだ？ いつもは隠してるのかな？」

気のない返事をして、小湊は空を仰いだ。あの“天”に天使がいないと知ったら、ミレトス学派の哲学者達は何を思うだろうか。理性存在であるはずの天使に、四元徳の全てが備わっていると知ったら？ イデアに生まれ真理を知り、気概により行動を選択し、理性により欲望を抑える、極めて人間的なものだと。

ホメロスらの神観と似て非なる存在である彼女達。違うのは、生き

方だけだ。魂として生まれ、プシユケーを持つという矛盾。彼女達は、そういう生き物だ。

「この光も、彼女がここにいないくちや見えないものだって。私達、セーちゃんがいなくちゃ、意思の存在すらも認識できない、意思の傀儡なんだよ」

「人間なんてそんなもんだろ？ イデアを知ってるのは、ソクラテスだけだとき」

「その人も、実際のところ何も知らない。だって、彼女達を知らないんだから」

彼女達の存在は哲学そのものでありながら、そのまま哲学の否定に繋がる。パラドックスに答えなどなく、やはり彼女達の命にもそれは存在しない。

「この意思が、せめてセーちゃん達に何かあげたらいいんだけどね」

「天傘に入れてみたらどうだ？」

「余計な物は、入れない方がいいよ。きっと、意思は純粹であるべきなんだ」

雑り気のない意思にのみ宿る力。天傘というのは、そういうものを集める道具なのだろうか。確かにあれは「俺が消える」という意思のみを集めたものだけど、不思議とそうとは思えなかった。

多分、セレネと俺はどこかで繋がってる部分があるのだと思う。

だってそうだろ、童話の知識だって、俺のそれに少しだけ準拠していた。

「だからこれ、陽君にあげる」

「は？ どうしてそれが俺になるんだよ」

「私の意思がなくなるわけじゃないから、安心していいよ」

「そういうことじゃなくて——」

「いいから！」

声を荒げて、小湊はその白を俺の胸元に突き出した。

「いいから、受け取ってよ。陽君に、一番必要なものなんだから」

俺に必要なもの——？

首を傾げる俺に構うことなく、小湊はその光を俺の胸に押し当て、そのまま腕を突き出した。

「ほら見て、私達一つになってるう……！」

「そういうのいいから。いいから黙ってやれ」

もう拒む理由もない。その光を受け入れ、小湊の意思をそのまま受け取ることを決めた。それがどんな意思かは、俺の中に入ってみればわかるだろう。当然だ、その意思はそのまま俺の物になるんだから。俺の胸に収ると、淡く色づいた光は心臓のように鼓動し、やがて収斂、完全に不可視となった。

「どう？ 私のこと、感じる？」

「——いや、全然。ただ、漠然と違和感を覚える程度」

肩を落とし、小湊はフェンスから離れた。制服のスカートが風に舞い、白い太腿が空に輝く。空は灰色に濁っているというのに、この人には一点の曇りも見えはせず、いつでも笑っていた。そうだろうと思った。

小湊はそう零し、人差し指を宙へ投げ出す。

「それを渡したのに、私の気持ち、全然色褪せないもん」

「じゃあ、そういうものなんだろうな」

「力そのもの。きっと、陽君の背を押してくれるよ」

「どこで——」

一度だけ感じた鼓動を掌で押さえ、小湊の瞳を映す。

「どこで、覚えたんだ？ これを出す、方法」

「……訊いたんだ、人に。強い人だった」

どこかに哀惜を感じさせる表情が胸を締め付け、俺はフェンスから離れ、小湊の手を取った。

俺が消えるまで、残り二週間を切っていた。

今日は月代が生を受けてから、ちょうど十八年目になる。要するに十八歳のバースデーだ。小湊と一緒に買ったプレゼントと、豪勢

な食事と、彼女の笑顔がそれを彩ってくれる。なんて気取った表現をしたところで別に何が変わるわけもなく、月代はまた一つ歳を取るのだ。

朝はいつも通り、月代と一緒に登校する。お隣さんなら当たり前、と言いたところだが、これは単に月代のお節介から始まり、そして今まで続いてきた、ただの「習慣」だ。朝の静謐な空気は、それなのに梅雨特有の湿った風に冒され、少しだけの不快感を覚える。通学路に雨塚高校の生徒が増え始めると、途端にこの町は活気を取り戻し、喧騒が空気を換えた。

昼までは当然のように授業がある。高校三年になり数ヶ月、もう授業内容も大分浸透したように思えるが、やはり受験期独特の緊張感が教室を覆っている。果たして俺にそれが関係あるのかはまだわからなかったもんじゃないけど、とりあえずのところ真剣に公式や単語を頭に入れた。ルーチンワークに辟易したものを覚えられないけど、これも実益を兼ねると思えば……やっぱり、納得はできそうになかった。

意味の有無は、全て俺とセレネが握っている。どうせなら全部、意味のあるものにしたくないじゃないか。今まで重ねてきた全てがここで水泡に帰すなんて、俺にそれが耐えられるか？ 消えてしまえば、それに疑問を抱くことすらできないのだ。

怖い？ 怖い。でも、逃げない。

月代は、いつも俺のことを支えてきてくれた。この十八年間、ずっとだ。感謝しているし、その意味は別としても好きだと言える。きっと幸せな一日にしていられるという自信はあったし、何よりそのつもりだ。クラスメイトからプレゼントを受け取る月代は、輝かばかりの笑顔を身体一杯で表していた。これ以上の幸せが、俺に贈れるだろうか。

美麗な瞳。艶やかな髪。いつも通り、彼女は美しい。

「おいセレネ、次移動だぞー」

「はい……っと。すいません陽介さん、指環知りません？」

「指環？ セレネ、そんなのしてたか？」

隣に立つ月代と見合わせてみたが、首を横に振るばかりだ。やはり、彼女が指環をしていたことなんてなかったと思う。

「おかしいですね。確かに持ってたと思うんですが」

「わたし、探すの手伝うよ」

「小湊は？」

セレネの元へ走った月代の背後を侍従のように付き添う小湊へ、一応のように尋ねておいた。そんなのは訊くまでもなく、こうなっ
てしまえば俺に与えられた選択肢などあつてないようなものだ。

「すいません、皆さん。えと、白い指環なんですけど」

彼女の細い指に入るんだから、小さなものだろう。白い指環とい
うのなら、セレネの白磁のような指に納まると、そう目立つわけ
もないかも知れない。見逃してもおかしくはない、ってことかな。

とはいえ、教室内でセレネの移動範囲など高が知れてる。彼女
と俺の席、それから黒板との間を調べれば、それで終わりだ。

「ない、ですね」

「どっか落としたか……家に忘れたとかないのか？」

「学校へは持ってきたはずなんです。一応、大事な物なので
大事なものは肌身離さず、それで落としてりゃ世話ないな。

「セーちゃん、とりあえず遅れるから授業いこ。後で職員室行つて
みようよ」

「そう、ですね。それがいいです」

「いいの？ 高いものなら、今探さないと……」

追い縋る月代を窘め、開いたドアをくぐって廊下へ出ると、途端
に喧騒が大きくなる。確かにこれだけの人数がいる狭い校内に高価
なものを落とすというのは、不安にもなるうものだけど、高いから
こそ安全という話も聞くし、悲観ばかりはしてられない。

樂觀も悲観も、行き過ぎれば毒になる。ここ最近で、ようやく学
んだことだ。

「次は化学かー。私、どうも好きになれない」

「そう難しいものじゃないよ。基本は数学みたいなものだからね」
そも、理系クラスに在籍しながら小湊に化学的センスはない。長年の付き合いでわかっているだろうに、それなのに月代は「諦める」ということをさせてくれない。できることはやる、それだけのことだと言い張る。

これも樂觀といえは樂觀だ。けど、美德でもあるし、何より月代の才媛はそうして培われてきた。それなのに、どうして環のことを諦観してしまっているのだろう。

「でも哲学の講義よりずっと楽ですよ。あれ、辛いですもんね」
「セーちゃん、君がそれ言ったら……」

何も知らない月代は首を傾げたが、俺だつてそれには閉口した。哲学の道を地で行く女が何を——とも思うが、反面で納得できる部分もあった。敢えて自分のことを勉強しても仕方ない、ということもあるだろう。

未知なるものだけど、知りたくはない。「自分」というのは、そういうものだ。

「月代さんは何の講義が苦手です？ イメージ的には文系に見えますけど」

「月代は元々文系の人間だぞ。古文も現代文も、今じゃ週に二回ずつしかないってのに」

教科書を抱えた腕を少しだけ持ち上げ、セレネは頷いた。月代より小さい胸がつぶれる様子は、しかし具に見て取れる。俺の周りにいる美女は、どうしてこうも性的な魅力にすら溢れているのか、囲まれる男が一人、哀れで仕方ない。月代は月代で後ろめたいところがあるらしく、同じく抱えた教科書で胸を隠す。

「えちいね、陽君」

小声で揶揄を飛ばす小湊に「黙れ」と返し、視線を逸らした。慣れてるはずなのに、彼女の魅力は衰えるところを知らない。単純なのは男なのか、俺なのか。知りたくない自分の最たるものが、このはしたない性欲の部分じゃないんだろうか。

小湊と俺を先頭に化学室の扉を通り、自由席になっているうちの一つの机を四人で囲んだ。両手に持ち切れない華が、視線を一手に集めている。

「で、何の指環なの？」

「あ、はい。ちよつとした細工をしてある、不思議な指環ですよ」

「へえ……セーちゃんにそう言わせるんだから、すごいんだろうねえ」

彼女自身が「不思議」だ、それにして不思議というのだから、相当に珍しいものか、或いは一周回って俺達の世界じゃありふれた物のどちらかだろう。

「セレネさんの髪の毛って、自前なのかな？」

「ええ、自慢の品ですよ。月代さんのように色素が薄いわけではなく、こつという色の色素が入ってるんですね」

都合のいい言い訳だ、そんな色素は人体には存在し得ないというのに。

引き合いに出されたのが意外だったか、それともそれが本意だったか、月代は苦笑だけを残して俯いてしまった。長い付き合いでわかっていてもあるが、彼女のコンプレックスは相当深くにまで浸透しているらしい。

「月代さん、自信を持ってください。貴女のそれは、とても綺麗です」

「これ、すぐ傷んじゃう。皆は変な目で見るし、……もつと綺麗な黒髪が、よかった」

「月代は、俺が綺麗って言っただけじゃ満足してくれないんだな」

「ち、違うよっ！ そうじゃないよ……」

我ながら下手な慰撫もあったものだけど、月代はそれなら納得してくれると思った。でも、そういうわけでもないらしい。

いつからだったろう、月代がこの髪のことを気にしだしたのは。あれはそう——今から五年くらい前だったろうか。あの長い髪を、一度だけショートヘアにしたことがあった。突然短くなった髪に

驚いたけど、月代は「イメチェン」と笑っていたから、あの時は気にしてなかったんだ。今思えば、あれが始まりだと思う。

余りコンプレックスというモノを持たない俺には、彼女の自信が持てない理由は理解できない。ただ、自信を持つていいだけのものだというのははっきりしてるから、それを理解させ納得させてやりたい。

「小湊は？ 何か自慢とか」

「私はね、存在自体を自慢してやりたいね。皆、私みたいに生きればいいのよ」

天晴れだ。もちろん本音じゃあないんだろうけど、月代もこうあれば——というのは、やはり考えたくないな。

「セーちゃんとかヨヨちゃんみたいに綺麗でもないし頭も良くないけど……どうかな、劣ってはいないと思うんだ」

「劣った人なんて、いないよ。皆、頑張って生きてるもん」

それは甘えた発想だとは思いつけど、彼女の本音ということに変わりはしないし、それが月代の美德でもある。それなのに自分に自信を持てないという矛盾に気付きながら、誰もそれを指摘することができない。生き方を自慢したいという、小湊にすらだ。

椅子を下げて頬杖をつく小湊は、そんな月代を見詰める。少しの嘲笑と苦笑、それに羨望を交えた、複雑な笑顔だ。月代は、余り世間を知らない。世間でも社会でも、或いは社会でもいい、それを知った時、彼女のそれはどうなっているだろう。本当に劣った人間はいないか。本当に自分の髪や瞳は劣ったものなのか。本当に、世界は平等なのか。

答えが見えるわけじゃない。ただ、それらを否定するだけの要素は知ってる。だってそうだ、そうでなくちゃ「優劣」なんて言葉は生まれなかったはずだし、月代が羨望の眼差しを受けることもなかったし、——俺が消えることもなかった。

そしてセレネは？ その生き方は月代から見て、肯定できるものなのだろうか。

「それにしてもあれですね、なにやら注目を集めてるようですが」
小声で訴えるセレネの瞳に、迷いはない。どうしてだろう、何が
あったとしても、彼女が動じるようには思えなかった。

「わたし達、少し騒がしかったかな？」

隣に座る月代は簡単に動じ、縮こまってしまふ。こういうところ
も欠点ではないから、そのコンプレックスは修正し難いところでも
あるんだよな。

「安心しなよ二人共。私ら、悪い意味で目立ってるわけじゃないか
らさ」

「まあ、俺だけは悪い意味で目立ってるんだらうけどな」

首を傾げる月代を笑い、小湊は椅子を引き、背筋を正した。納得
をしたセレネも、姿勢を正したように思える——元々姿勢がいいか
ら、違いはよくわからないけど。

「わかんないなあ……わたし、そんなに目立たないから」

「これ本気で言ってるからねえ。罪な女」

「へ？ な、何なの、光ちゃん？」

三人で笑い、一度でため息を重ねた。もうすぐ始業時間、先生が
入ってきた。授業中に私語をすると月代に注意されるから、残った
三人は仕方なく黙々と講義を聴くことにしたのだった。

授業後、セレネは一人化学室を後にし、次の授業まで現れること
はなかった。不安が募る。

そろそろ八代家に向かわなくちゃならない。約束の時間は近いし、
何よりセレネが焦れて挙動不審になってきた。

「楽しみですね。お金持ちの家って、あたし初めてなんですよ」

「金持ちも何も、俺の家以外を知ってるのか？」

「いえ、知りませんけど」

しれっと言つてのけるセレネに閉口していると、彼女は自室のベ
ッドから立ち上がった。ここは彼女の部屋、一種の乙女空間である。
男を部屋に招くのに抵抗はないらしく、ノック一つであっさりと入

れてくれた。

「そもそも、アマツ力ってどんなところなんだ？」

「言いませんでしたっけ？ えーとですね、この世界で言うアイデア界に当たる世界で、しょの通りに理性把握のみが支配する世界なんです。つまり感覚は全て無く、頭に入ってくる真実という認識のみがあたち達の全てなんです。何も感じない代わりに全てを知らされ、全てを考えさせられる、そんな場所です。その認識は全てこの世のものの本質——だから、陽介さんのことも、以前からずっと知っていました」

そして与えられた認識の中から必要なものだけを取り出し、この世界にやってくる。

つまるところ、その世界では他の生物は認識として以外で何者も存在しておらず、生まれた時から彼女達は孤独だということになる。もつとも、認識がそれらを悟ることができたのなら孤独でなく、しかし産まれてすぐに、別たれることになる。ベルというのは、恐らくそうしてセレネを追ってきたのだ。そしてセレネは世界に言いつけられ、俺を追ってきたことになる。

「まあ、その分だけこうして都合よく暮らせますし、問題はないですけどね」

「そう、だよな。そうでなきゃ、ここにはいられないもんな」

「そうですよ。あたしは、幸せなんです」

幸せという概念が、彼女に当て嵌まるのが、わからなかった。それはあくまで“認識”だから、もしかしたら彼女にこそ相応しいのかも知れないけど、使命に生きる彼女のことを幸せだとは思えなかったのだ。

「そろそろ行きましょう。皆さん待ってますよ！」

「だな。プレゼント持ったか？」

「持ちましたとも！ さーいこー！」

拳を振り上げ、セレネはドアを押し開けた。今にも走り出しそうな勢いのまま笑っていると、本当に「幸せ」なんじゃないかって、

そう思えてしまう。それが、少し怖かった。

月代の家は隣にありながら、玄関まで二十メートル以上もあるという、世の不公平さを感じる作りになっている。毎朝俺を迎えに来るとき、彼女は二十メートルで何を考えているんだろう。朝食のこと、環のこと、セレネや小湊のこと——俺のこと。夕闇の中でセレネと歩くと、不思議とそういったことが気になってくる。その二十メートル——たった二十メートルではあるけど、セレネと手を繋いで歩いた。

手を離れた後の、この作業も慣れた限りだ。インターフォンを押すと、小さなスピーカーから可愛い声が響き出た。

「もしもし、八代さん？ 月代さん、いらっしゃいますでしょうか」「陽？ 待っててね、今開ける」

声も変えたつもりがあっさりとは看過され虚しい気分になっていると、セレネに肩を叩かれた。ありがとう、慰めてくれてるんだな。

数秒待つと、玄関のキーはすぐに開いた。彼女の家の一軒家でありながらカードキーという形式を取っており、一度閉まってしまふとオートロックで締め出されてしまふ。月代が焦れない内に玄関を潜ると、彼女の案内も待たずにリビングへ向かった。勝手知ったる八代家、といった感じだろうか、幼い頃から何度も出入りしていると我が家にも近い感覚になってくる。

リビングには幼い子供が三人、トランプに興じていた。

「ふるはうす」

「フォーカード」

「可愛くないぞ二人共！ 大人に面目を保たせなさい！」

「勝負の世界にだきようはいらないって、光ちゃんが言ったよ」

シビアナ世界を展開しているようで、首を突っ込まない方が懸命かも知れない。

君子危うきに近寄らず、とは言ったものの、虎穴に入らずんば虎児を得ず、というのもまた事実。この葛藤が、また面白い。

「混ざるんですか？ あたしもやってみようかなあ」

この言葉が引き金だ。セレネは遊びらしい遊びをしたことがなかった、ということをやうやく思い出し、折角だからと混ざることにした。三人はそれを快諾し、八人掛けのテーブルを五人で囲ったのだった。

「じゃあ、大富豪で」

「了承。セレネ、わかるか？」

「大体は。詳しいことはまたやりながらでも教えてくださーな」

先ほどのポーカーでも、どうやら環にはハンデをつけていたらしく、今度の大富豪（地域によっちゃ大貧民か？）でもそうすることと相成った。ベルはともかく、環はまだまだ小学四年生、駆け引きの面で劣るところもあるだろう。ハンデは単純、最初からジョーカーを一枚持たせてやっただけだ。

配ったのはセレネ。小湊という小さな鬼が、カードに慣れさせる為だという名目の上、面倒を押し付けた形だ。たどたどしい手つきで置くようにカードを配るセレネに内心辟易しながら、どこかそれを可愛らしく思ってしまう。容姿とのギャップというのは、なかなか罪なものだ。

「で、今日のヒロインは何をしてる」

「え？ ええと、わたし、トランプって得意じゃないから……」

「そういう問題じゃないよね、絶対。ヨヨちゃんも交じろうよー」

目を伏せて笑む月代の意思は手に取るようにわかる。小湊の要望に応えたいのは山々だけど、その隣が存在がそれを阻んでいる、くらしいものだろう。彼女が望んでいないわけじゃなく、合わない視線に月代の中で誤解が生じているだけ。それだけなのに、どうして分かり合えないんだろう。

「わ、わたしはやっぱり遠慮しておくよ。お母さんのお料理、手伝ってくるね」

小走りにキッチンへ消えた月代にため息を零したのは、俺だけじゃなかった。仲間の小湊と視線を合わせ肩を竦めると、それに気付いた環が頬を膨らす。「めぐのせいじゃない」とでも言っているよ

うだ。

もちろん、環が悪いわけじゃない。月代もそうだ。ただ歩み寄れない、不器用同士、というだけの話。折角の誕生日なんだから、形だけでも仲良くすればいいのに。そうすればいつか、本当の意味で仲良くなれるはずなのに。

「配りました。さあ、やりましょー」

「最初って誰だっけ？ ダイヤの三だっけ？」

「スペードの三だろ、常識的に考えて」

始まったゲームは、幸先のいいものだった。何せエースと二が二枚ずつ、ペアもそれなりに揃っていて、負ける気がしないとはこのことだ。

表情と視線、言葉による牽制、駆け引きの応酬した、非常に大人気ないゲームになった。小湊のそれは正に外道で何度も騙され、環の機嫌を窺い、初めてのセレネに気を遣い、結局俺は貧民という結果に落ち着いてしまった。所謂ブービーだ。カードが揃ってるだけじゃ勝てないんだなあ、なんて、妙に悟った気分になる。

ゲームは五回。大富豪一回に貧民一回、後は全て真ん中だった。

「トランプ、面白いですね」

「お手軽だよなー。ウノみたいに応用利かないわけでもないし」

「アメリカンページワンなんてウノみたいなもんだしな」

特に勝敗に拘ったわけでもない——小湊と環を除いてだが、俺達は笑って雑談に移行した。元々闊達な小湊は負けてもめげず、勝ち続けた環の機嫌は上々。場の空気はそれなりに和気藹々としていた。テーブルの真ん中には、三ゲーム目辺りに置かれた、月代謹製のマールクッキー。それぞれの目の前にはレモンティーがそつと湯気を立てていた。

「そっいや小湊、今日はどうすんだ？ 結構遅くなるけど」

「陽君に送ってもらう。断らないよね？」

仕方ないと肩を竦めると、小湊は意地悪に笑った。「にしし」という声でも聞こえてきそうだ。

「楽しみだなー、ヨヨちゃんママのお料理。美味しいんだよね、これが」

「そうだよ、お母さんのお料理はさいこーなんだから」

「環も料理とかやってるか？ 料理できないといいお嫁さんにはなれないぞ」

女の子の夢が「お嫁さん」なんて時代は終わったんだろうか、なんて考えたけど、それこそどうでもいい。カップを持ち上げ、口元に寄せた。

「め、めぐもがんばってるよ。教わってるもん」

少し眉を顰める環を笑い、今度はセレネに視線を移す。それに合わせて全員のそれが彼女に向かったけど、少しも慌てた様子は見られず、やはり年上の威厳というものが見受けられた。余裕を崩したセレネというのも、なかなか想像しづらいものではあるけれど。

「あたしもできますよ、おろつり。和洋中、何でも」

「すっげー、完璧女がいる。ヨヨちゃん以外にもいるんだなー、こいういの」

月代も大概だ、何でもできる。

思えばそれも原因だろうか。環の瞳は、一度に不機嫌な色を点してしまった。引き合いに出さないだけマシだったが、そういう時は大抵話は拗れる。

喉が渴く。子供の機嫌を窺うのも、結構な心労を重ねるものだ。

「ベル、お前は？」

「僕？ 僕はそう、一人で暮らすのに問題ないくらいにはできるよ」

「へえ、じゃあ俺と同じくらいだ。昔から八代家に世話になりっぱなしだからなあ、俺」

「気にしないでいいよ、陽」

そこへお盆を持った月代がちょうど現れ、それを机に置くと、俺の左隣に腰を落ち着けた。上品な仕草は、やはり真正のお嬢様を思わせる。

「ベル君、環ちゃんと仲良くしてくれて、ありがとね」

「僕が望んでやってることだから」

望んで——本当に？ 俺の右隣に座るセレネを窺ったが、その表情に変化はない。いつもの、穏やかな笑顔だ。

「ベルさん、教えましょうか？」

笑顔のままのセレネが口にした言葉、それは何を思っただろう。種族を同じくする者として？ 親子として？ それとも別な理由が？ それでも、彼女と二週間暮らしてみただけ汲み取れるようになったのは、彼女に種を想う気持ちなどないということだ。でも、それもいい。テンシとしてでなく、そして人間としてでなく、唯一の個として動けばいい。

「——機会があれば、お願いします」

「はい、承りました」

親子の、親子らしいコミュニケーションは結局それだけだ。

「で、ベルちゃんはどこに住んでんの？」

「近くのアパートに部屋を借りてるよ。本当は十八才超えてないんだめだって言われたけど、事情を説明したらわかってくれた」

「お金は？ あるの？」

「保護者から受け取ってあるんだ。けっこう大金だから、注意しないとね」

世界から受け取ってるってわけだから、それこそ文字通りに“世界規模”、なんだろうな。果たしてそれは幸せか否か。

月代のお母さん——おばさんの手によって、テーブルの上には見事な料理達が並んでいく。ローストチキン、カルボナーラスパゲッティ、コールスローサラダ、スープはコンソメでそれぞれに胡桃パンが配られた。相変わらずの料理上手、これなら月代の腕が上がるのも納得できる。

このお金の使い方は、多分幸せな使い方。ベルのような使い方を否定するつもりはないけど、他人の為に使うというのはとても気持ちのいいことだ。彼の使い方も或いは他人——特に環の為だとは言えるけど、それでもどこか寂しい印象を受ける。

口出しすべきじゃないだろう。彼の役目は俺が消えた後の処理だから、俺は消えないことだけを考えていればいい。

「おいしそー。ヨヨちゃん、パパさんは？」

「うん、お父さんは今日も遅いんだ。お仕事じゃあ仕方ないよね」

「さ、皆さん、今日は月代の為にありがとうございます。陽君も、ありがとね」

この家での特別扱いも慣れた。月代や環の特別は、そのままおばさんの特別になっているから、難しいんだ。

「いえ、やっぱりめでたいですから」

「そうね、今日は無礼講。環も、たくさん食べるのよ」

「はい……」

既に視線を料理にロックオンした環に、月代と目を合わせて笑った。やはり彼女にとって、環という人も特別らしかった。当たり前だ、妹なんだから。

分かり合おうとしていないわけじゃなく、ただすれ違っているだけ。

おばさんもテーブルへつき、ようやくの食事だ。それぞれ飲み物が注がれたグラスを手にして、それをテーブルの中心に掲げ合わせた。

「かんぱーい！」

揃った声で場は和み、各人料理にナイフやフォークを伸ばした。陶磁の皿を銀製の食器が叩く甲高い金属音に耳を傾けながら、小湊に負けじと、食卓の真ん中に鎮座するローストチキンを切り分ける。

「あ、こら陽君、それ私が取ろうとしたやつ！」

「馬鹿め、戦場に卑怯も何もない」

「その言葉、後悔させてやる！」

「光ちゃんもヨヨちゃんも、まだたくさんあるよう」

やはり八代家は上品に、セレネはいつも通り黙々と、そしてベルも彼女と同じに黙ってパスタを頬張っている。使命が似ると、生き方や所作まで似てくるのだろうか。

「ベルちゃん、美味しい?」

「あ、はい。初めて食べるものばかりで」

セレネは普段俺の家で同じメニューをとっているけど、ベルは何を食べているのだろう。同じくして生まれてきこうも生活に違いが出てくるというのは、親子として正しい形なのだろうか。もちろん彼女達が“真実在”の世界に生まれ、形式に囚われないことも知っている。それでもだ。人間の尺度では、駄目なのだろうか。言っただけだ、俺はいつかセレネを受け入れると。その時、その息子が一緒になくてどうする?

スープを啜ると、腹の底が温まる。それは夏の暑さの中で、不思議と不快でない優しさを持っている。

「月代も十八……大きくなったものね」

「よかったな月代、アダルティな物が色々買えるぞ」

「よ、陽っ! せっかくお母さんが昔を懐かしんでるのに……!」

おばさんは性に関して厳格なお方だ、月代にも徹底してその行為の重要性を教え込んである。それも娘のことが大事だからだとわかるから、この親子はとても尊い。自由にさせるばかりが愛ではないというのは当然のはずなのに、それを忘れる親は現代においてとても多い。嘆かわしいことだ。

「陽君なら、月代にぴったりだと思うの。そうやって多少強引に話を進められる子が、この子にはいいのよね」

「お母さんもっ! わたしをからかうの、やめてよう!」

「からかってなんてないのに。月代も、陽君ならいいのよね?」

「だ、だからそういうことじゃなくて、ああ……どうしよう、どうしよ、陽?」

何かに困ると俺を頼る癖、そういえばこれも正しておかなきゃいけない。これじゃあ、おばさんも叔父さんも本人も、環だって困るだろう。折角温かい家族だというのに、俺が原因でそれを崩したくないじゃないか。

「お母さん、陽にいはめぐのだよっ!」

「あらあら、そうだったわね。月代も負けないうにしないと」

「環ちゃんまで……」

うるたえる月代も、子供らしい主張をする環も、当人は至極本気だというのだから始末が悪い。

料理のおかげで良かった機嫌を損ね、環は低い声で唸っている。よほど月代と比べられるのが気に入らないのか、或いはもつと別の理由があるのかはわからないけど、少しだけ空気が沈んでしまった。環のことにに関して、微笑ましい子供の反抗というだけで済ませられないのが月代の悪い癖だ。

「ご、ごめんね環ちゃん、わたし、陽のこと取ったりしないよ？」

「……月ねえ、いつも陽にいいっしょ。めぐのいないとこで、いっぱい仲良くしてる」

「それは、そうだけど……わたしの知らない陽を、環ちゃんは一杯知ってるでしょ？」

久しぶりに聞いた会話がこれかと思うと、少しやるせなかった。少なくともはつきりしていることは原因が俺だということなんだから、却って何も言えなかった。

セレネとベル、小湊は料理に手も付けず、二人の動向を見守っている。彼女達を放ったまま自分だけが楽しもうなんて奴はここにはいないだろうし、何よりこの空気で食べる料理はどれだけ上手く作ってたって美味しくはないはずだ。

義務感、だろうか。まとめるべきは俺なんだな、って、そう直感した。

「落ち着けて、環。俺は二人から離れるつもりは——」

そして、言い出してようやく気付く。二人を宥めるのに必要な、これから俺が言わんとしていることは、俺にとって言うてはならないことなんだ。でも、止められやしなかった。このめでたい日に、こんな悲しい争いを見ていたくはなかった。

「——離れるつもりは、ないぞ」

それにいち早く反応したのはもちろんセレネ、それに続いて小湊

とベルが肩を竦めた。その言葉の全てを信じたのは、結局のところ月代だけだ。そう、何も知らないから。

反芻してようやくそれを飲み込んだのは、数秒後。環は乱暴に椅子を引き、悲痛な叫びを上げながら二階へ上がっていつてしまった。やはり信じてはくれなかったけど、それなのにに信じてくれている、なんてパラドックスに胸が痛くて、しばらくは動くことすらできなかった。

「うそつき！ 陽にいくら、うそなんて聞きたくないもん！」

環はそう、俺の言葉を信じていてくれた。でも、希望というのは失望よりずっと浸透しづらく、簡単に浸食されてしまう。

おばさんが倒れた椅子を起こし、苦笑を漏らす。「仕方ない子」と、或いは慈愛すら感じられる、それでも苦い笑顔だ。それはどちらへ向けた言葉だろう。盲目的な姉だろうか、それより少しだけ柔軟な妹だろうか。たった二人の娘が喧嘩しているというのは、とても悲しいことのはずだ、その原因が俺だというのはなら尚更に。

「すいません、おばさん」

「いいのよ。折り合いをつけるのは、いつだって本人なのだからね」
俯き加減は、親子そっくりだ。おばさんと似たような角度で俯く月代の表情は、前髪に隠れてよく見えない。

「月代、ごめんな、折角の誕生日なのに。俺、行ってくる」

その時は返事がなかったけど、リビングのドアを開ける時にようやく掠れた声が耳に届いた。

「環ちゃん、よろしくね」

6話

階段は緩やかなカーブを描いて、やや急勾配になっている。少しだけ手狭な印象は覚えるけど、その分だけ他の空間を広く使っている、というわけだ。その恩恵からか、小四の環の部屋でさえ俺のそれよりよっぽど広い、十二畳もの空間を広げている。慣れたからいいものの、彼女がその部屋を手に入れた時はその不公平を親に嘆いたものだ。

懐かしい思い出に浸ると、環の笑顔をもそう感じてしまう。数日前まで、あの快活な笑顔は健在で、いつもその元気を貰っていた。

ノックに返事はない。鍵はついてるけど、彼女のことだから、どうせ閉めてはいないんだろう。嘆きながら、泣きながら、助けに来てくれるのを待っているなんて、そんな子供らしさは失くすことができないのだ。

「環、入るぞ。……あと十秒待つから、片付けとけ」

散らかっているのはぬいぐるみでも文具でもなく、彼女の心の中。今頃は、悲しみとか怒りとか、そういった負の感情で掻き回されて荒れ放題に違いない。

きつちり十秒、それ以上は待てない。ドアノブに汗ばむ手をゆつくりと掛け、少しだけ押し開く。廊下に漏れず、代わりに廊下から彼女の部屋を浸食した光のように、環にも踏み込んでやりたい。

「暗いな。電気、つけるぞ」

「だめ、つけちゃや。見られたくないもん」

声は小さく震えていた。暗い闇に紛れては何も見えないものはないけど、それを感じ取るくらいはわけなく、だからこそ余計に辛いんだ。

子供にここまで心乱される高校生——か。カーテンの隙間から微

かに漏れ出る月明かり星明りを頼りに、ベッドの上の環に歩み寄った。隅にちょこんと腰掛けた環の首は、やはり母や姉のような角度に傾いている。

「陽にい、ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ？ 悪いの、俺だろ？」

「また、月ねえとけんかしちゃった」

明確には見えないけど、少しだけ触れ合う小さな身体が、小さく震えているのを感じた。こうして素直に月代のことを認められるのに、当人の前だとそうはなれない。

環の隣に座ると、頭に手を遣り、そつとその髪を梳いた。

「月代も今頃、それを後悔してる。わかるだろ？」

返事をせず、代わりに首肯する環の頭を乱暴に撫で回し「偉い」と褒めると、喉を鳴らした。気持ちがいいのだろうか。

「どうして、月代が自分のこと嫌いだって思うんだ？」

「……だって」

小さな声で少しずつだけど素直に話してくれた。

月代は、昔から優しかった。ただそれは環にではなく「誰にでも」であって、環は特定の感情を彼女から感じたことがなかったのだという。それをずっと疑問に思っていた。どうして、自分はたった一人の妹なのに。どうして、自分はこの世の唯一なのに。血の繋がりなんて、特別なものじゃないのかな。そうやって悩むうちに、月代に対して反骨心を抱くようになってしまった。

要するに子供らしい、ちよつとした我が儘だ。特別な人に、もつと特別扱いして欲しいと思うのは、誰だって当たり前だ。ましてそれが幼い精神にたった一人の姉だというなら、より強いものとなるだろう。

「月ねえ、めぐのこと、ほんとの妹だって、思ってくれてないのかな？」

小さかった声は震えを含み、余計に聴き辛くなってしまったはずなのに、耳にはよく響く。

「めぐ、もつと優しくして欲しい。もつといっしょに遊んで欲しいもつと……しかって欲しかったな」

そうだろうか、本当に、環は子供だろうか。だって、俺なんかよりずっと、深く月代を求めている。

「陽にいとなかよしの月ねえもうらやましいけどね、ほんととはね、月ねえとなかよしの陽にいても、うらやましいんだ」

「そ、つか。そりやそうだな、姉妹だし。でも――」

でも、周りで見ているからこそわかることもある。

「俺は環も羨ましいぞ。月代の話聞いてると、どんだけ想われてるかわかるしな」

どうしてその想いを本人に表現することができないんだろう。ただ少しいだけ、「好きだ」と言うだけなのに、口を開くことができないんだろう。

――誰に言っただか。俺だって、人のこと言えやしない。

「月代、環のことあんまり話したがないんだ」

「……やっぱ、きらいなの？」

「でもたまーに話題に上がるとな、すげえ辛そうな顔するんだ」
辛苦を知った顔というのは、つまりそれだけ想いが深いことを示している。好きでもない相手の為に、いちいち表情を歪めたりはしないだろう。環と余り遊んでやれていないこと、環の話を避けてしまっていること、全部自覚しながらそれが克服できないこと、それが悔しい。

全部、俺も知ってる感情だ。月代と余り触れ合ってやれない。月代の想いを避けてしまっていること。全部自覚しながら、克己できないこと。

「環も、月代の話が出ると、辛そうな顔してる」

「だって、ほんととはきらいじゃないもん。うそつきは、わるい子だもん」

「ああ、嘘つきは、悪い子のすることだ」

一度だけ大きく震え、環は俺の腹に縋りついた。こんな小さな身

体に、たくさんのものを背負ってきたと思うと、少しだけ居た堪れなくなる。

小さな呟きが聞こえる。

「好き。好き。おねえちゃん、好きな。おねえちゃん……っ」

悲痛な叫びだった。それなのに温かく、優しく、その言葉に俺は深く安堵した。その声は、暗がり、ベッドに机に、タンスにクロ―ゼットに、大好きなぬいぐるみに、小さく反響して、また最初に戻ってくる。環には聴こえているだろうか、自分の声は、決して悲しみばかりを映してはいないこと。

嘘をつき続けることは、悲しいことだ。子供心にそれはトラウマにもなりかねない。そうだとすれば、今、環の心はカタルシスに包まれているだろうか。これから月代の前で、素直な感情を表すことができるだろうか。

上半身を預ける環を抱き寄せて、その頭を抱え込んだ。小さくて、温もりに満ちている。

「この髪。今は見えないけど、綺麗な瞳。顔もそうだ、全部月代にそっくり」

「おねえちゃん、に？」

「ああ……妙なところで素直になれないところも、全部だ」

思えば環は、月代を真似て髪を伸ばしているんだろうか。いつからかその長さは月代を超えてしまったけど、それを切りたいなんてことは聞いたことがなかった。

「いたみやすいって、おねえちゃん言ってた。でもね、めぐは好きだよ、このかみ。きれいだし、さわってるときもちーの」

「うん、触り心地は最高だな」

「おねえちゃんと、どっちがきもちー？」

それに答えられずにいても、環は笑っている。

「ねえ、陽にい」

「ああ」

流れた雲に隠されたか——月明かりが一瞬だけ翳った。輪郭すら

も確認できなくなった部屋に、その声は響いた。

「いなくなっちゃ、や」

「環……」

「おねえちゃんに、やっと好きって言えそう。でも、陽にいいなきやできないよ」

響いた声が消える前に、環は上半身を起こして俺から離れた。俺の胸までもないその身体に色々なものを詰め込んで、覚悟して、決心し、今こうやって俺をここに留めようとしてくれている。そんな強さを肌で感じたから――

「……ああ、いなくならない。俺は、ずっと二人の傍にいてやる」

再び現れた月明かりに照らされた環の身体は、大きくこちらへ向いていた。心なしか、微笑んでいるように思える。

「――よかった。めぐ、すぐ安心した」

暗闇に溶けるその身体からは、淡水色の光が漏れていた。

予定調和のように部屋に現れたセレネがそれを回収すると、環はそれに何の疑問も抱かず、部屋から出て行った。ベッドの傍らに立つセレネの瞳は、少しだけ不気味に光り、闇の中に存在している。

その感情、少しだけ読めるような気がした。ようやく、彼女の「中身」を理解し始めていると思つて、大丈夫だろうか。

「強い子。とても九つとは思えませんね」

「ああ。俺なんかよりよっぽどだ」

「どうでしょうかね。それこそ、優劣なんてものはないと思います」
出ようというセレネの手を取つて、環の部屋を後にした。廊下に溢れる照明の光に少し眼が眩むと、思わず蹣跚を踏んでセレネに支えられた。少し、闇に目を慣らしすぎたみたいだ。

でも、この光は不快じゃない。少しだけの笑みを顔に感じながら押し開けたドアの先、リビングでは、信じられないような光景が広がっていた。環もそれを認められないかのように立ち止まり、それに魅入っている。

部屋が、淡い色の光で満ちていた。

「な——何が、起こってんだ？」

「陽介さん、よかったです。これ全部、ここにいる全員の——」

意思の波動だ。目が慣れてくるとようやく理解したが、この場に
いる全員の身体からそれぞれの光が乖離し、空中で収斂していく。
おばさん、月代からは、環とよく似た淡い青、小湊は以前見たよう
に乳白色、そして——

「ベル、お前……何だよ、それ」

一番大きな光を放っていたのは、ベルだった。ただそれは意思の
波動とは似て非なるもの。それはベルの身体のある一部分——大き
な白い翼から発せられていた。

「そうですか……悟ってしまったんですね」

「うん、もう僕には無理そう」

傍らのセレネの声には、多少の諦念が感じられた。それに応える
ベルの声も同じだ。

わけも分からずに立ち尽くす俺に対し、皆はその意味を理解して
いるみたいだった。いや理解しているからこそ、その身体から意思
を放っている、というべきか。推測にしか過ぎないが、そうとしか
思えなかった。

「お疲れ様でした。貴方のことは——そうですね、あたしだけは忘
れないでしょう」

「うん……仕方ないよ。僕は、負け犬だから」

「運がなかったんです。もっと具体性のある使めーなら、或いは」

何が起こってる？ セレネは少しも慌てた様子もなくベルを見詰
めた後、ゆっくりと天傘を取り出して、それを広げた。……今まで
に見たことのないほど大きな傘布が、天井を覆っていた。それは光
の全てを補って余りある、真白な、まるで空だ。

真白の天に向かってやがて光は上昇し、消えていく。全ての光が
そこへ収まった瞬間にそれは大きく発光し部屋を包み込むと、瞬時
に掻き消えた。

盛大なため息に目を向けると、セレネが天傘を畳み、俺に向けて

小さく笑っていた。どうしてだろう、そこには、満ち足りた感情しか感じられない。

「よかったですね。一度にこれだけの意思を集めることができました」

この場にいる“五人”全員が何も言えず表情を強張らせる中、セレネはただ笑う。ある意味ではこれも、強張ると言うのだろうか。

「あれ、ここは喜ぶところでしゅよ？」

「——どこに、喜べって？」

ようやく口から出てくれた言葉に、セレネは首を傾げ、笑顔を崩した。純粹に「わからない」という、疑問だけを映した顔だ。

「どうして、喜べないんです？ 大きく一步、前進しました」

「だって……」

「だって、何ですか？」

だって、その言葉に続きはなかった。だって、それこそ今ここで、俺は何が起ったのか全く覚えてないんだから。ただ覚えているのは、たくさんの意思が一度に集まったという、「喜ばしい認識」だけなのだから。

ただ違和感のみが付き纏う。本来ならあつてはならないはずの現実との不和が、どこか心にしこりとなって残っている、という感じだろうか。それはセレネのような存在で、彼女のような美しさで、ただそこにあつた、はずだ。

でもここには何もない。

「さあ皆さん、パーティーの続きをしましょう？ 少し空気は換わりました、まだ今日は終わってませんよ」

手を叩き場を収めるセレネの声に、皆がようやく気をつけた。首を傾げたままそれぞれ空になった皿や余った料理を片付けていくと、自然とテーブルが空いていく。“七人分”の Pasta 皿は、未だにテーブルの上だ。

「陽、消えちゃう？」

ぼつりと零れた言葉は、俺の知れた幼馴染から発せられた。悲し

みというには巨大すぎて、そこには何も無い、虚無感のみが反映されているように思えた。

「陽、わたしから離れちゃうの？」

「月代さん」

遮ったのは、俺じゃなくてセレネ。少し、悔しかった。

「プレゼントです。あたし、一生懸命作ったんですよ」

彼女の手には、白い指環が鎮座していた。荘厳さ、慈悲、どこかに空虚すら感じられるその色は、どこかで見覚えのある色——精白色をしている。我を忘れたようだった月代ですらそれに魅入られ、やがて恐る恐ると手を伸ばし、それに触れた。

彼女の細い指にはよく合った。セレネの肌ほど白くはないが、それでも白い月代の肌にあって、その白は不思議とその存在を誇示している。

「セレネ、さん——これ」

「ただの指環じゃございませんよ。それはそれは、不思議な指環なんです」

「うん。すごく、感じてる」

指環を握った手が胸を押さえ、月代は淡く笑んだ。

俺が消える。そういう認識が消えたのかと思っただけ、そうでもないらしかった。隣に座る月代の右手は、しっかりと俺の手を握っている。柔らかい手、白魚のような手と一緒に、何もかもが繋がったような気分になる。

「じゃあ私も。ヨヨちゃん、おめでと！」

月代と同じように、その言葉が今の感情を隠すものであっても、開闊に笑う小湊は強いんだろう。「開けていい？」と尋ねる月代に頷き、ピンクの包みを開ける彼女を期待の眼差しで見守ってる。

「わあ……綺麗なストラップだねー」

少し過剰とも思える包装から現れたのは、俺と一緒に行ったデパートで選んだ、極彩色の宝石が鑲められた小さなストラップだ。月代は滅多に携帯を鞆やポケットから外に出さないけど、それがあれ

ば眺める機会だつて多くなるかも知れない。連絡が欲しいという小湊の願いが、さり気なくそこに介在している。

早速だ。月代は白い携帯を取り出し、そこにそれを括った。

「なんかすごいなあ。ストラップなのに、すごい高級感」

「やだなあヨヨちゃん、そんな高いものじゃないよー」

頭を掻いて笑う小湊の額に、一筋の汗が見えた気がした。だつてそれもそのはず、それはストラップという嗜好品のはずなのに、五千円もかかったのだ。これなら立派な奢侈品だ。

「じゃあ次はお母さんね。月代、おめでとう」

「あ、ありがとうお母さん」

笑顔で受け取った彼女の身体に、プレゼントが積みあがっていく。おばさんからは小さな腕時計、銀色をしている。

「綺麗……これ、ダイヤかなあ」

「ええ、よくわかるわね。大事にするのよ」

「うん。ありがとね」

腕にはめた時計は、ちくちくと時を刻んでいく。少しだけ惜しいけど、もうすぐ今日という日が終わってしまう。

おずおずと、恐る恐る、月代の目の前から腕が伸びた。短い腕、小さな手、そこに握られた小さなオレンジの包み。彼女なりの“気持ち”が、そこにあった。

「つ、月ねえ、これ、あげる」

「え——環ちゃん？ これ、もらっていいの？」

「早くとつてよ！ 重いもん！」

「あ、わわ、うん、ありがと」

月代が慌てて手にしたその包みは、とても重いようには見えない。妙な照れ隠しもあったものだど苦笑しながら、目の前の環に「偉い」と声には出さずに伝えておいた。

月代の手元を見てわかるのだが、その包みは随分と薄汚れていた。長い間渡せずにいたプレゼント、ようやく——ようやく、月代に「好きだ」と言えそうと言っていたから、このプレゼントは、そーい

うことなんだろう。

中身は高いものじゃない。でも、どうしてか、複数あった。一つは小さなビーズで作った小人、一つは黒い紐で作ったチョーカー——やはりトップにビーズがあしらえてある。そしてもう一つは、メッセージカードだ。

「環ちゃん……ありがとね、ほんとに、ありがと」

「な、泣くことないよ。みんな、めぐの手作りだもん。みんなみたいに、お金かけてない」

「なら、余計に大事。環ちゃんの、手作りかあ」

照れ臭いのか、月代の顔を見ていられない様子の環と、それを優しい眼差しで見守る月代。双方の瞳は、共に潤んでいる。

これでいいのだろうか。姉妹は、これで愛し合うことができただろうか。

残るは俺だけ、それをポケットから取り出す時は、少しだけ緊張した。多分月代にとって何よりのプレゼントになると買って買ったそれは、結局小湊の意見は少ししか反映されなかったけど、喜んでくれるはずだ。

「ほら、月代」

「あ、うん。ありがと、陽」

微笑んでそれを受け取り、包みを解いた。

「これ——」

番のイヤリングだ。二つそれぞれに勾玉がトップになっていて、それを組み合わせると陰陽太極図が描かれるようになっていて。それは本来の意味とは違うが、黒は運気の下降、白は上昇、合わせて平穏を象っていると店員には聞いた。二つで一つ、それで初めて意味が為される。

そこまで深く考えたわけじゃない。運気の下降なんて、文字通り不吉だ。ただ、その「平穏」という言葉に酷く惹かれただけだから、或いは自分の為だ。

「すごい、綺麗。もらっちゃっていいの？」

「貰わずにどうするんだよ。折角だ、受け取っちゃってくれ」

「でもでも、高いんだよね」

「値段なんか気にするな、おばさんも言っただろ、無礼講だ」

最後に「ありがとう」と深く呟いて、月代は左耳に白、右耳に黒を身につけた。

よかった。俺のこと、割り切れたんだろうか。手が空く毎に俺の手は握ってくるけど、その「確信」に嘆くこともなかった。セレネが話を逸らしたおかげ——そう思うと、ただ誤魔化しただけでも取れるけど、今はそれでよかった。徐々に、少しずつ飲み込んでいけばいい。環だって、こうして笑ってられるんだ。妹より強く、妹の規範であるのが姉ってもんだろ？

パーティーは成功。結局ではあるけれど、皆が楽しく笑い、月代も環もそのまま別れ、セレネと共に家へ送った小湊も最後までそうであつたし、セレネも——セレネも、上手く笑えていた。俺も、彼女のように笑えていただろうか。

家に帰った後、セレネは部屋に籠ってしまった。ノックしても、出てくることはなかった。

月代はそれから呆けることが多くなった。声をかけても返事をしないことが多々あるどころか、視線がどこを向いてるのかわからないこともあるくらいだ。その理由は痛いくらいにわかるけど、どうして“それ”を知っているのかわからなかった。俺がそれを話した時、月代は一分も信じてはいなかったはずだ。

セレネがその理由を知っているという確信があつたけど、彼女に問い詰める気にはなれず、結局俺はまた溜め込むことになった。自分で考えて、解決なんてするはずはないのに。

その日は、隣町の繁華街にあるデパートに来ていた。小湊も好きなスル・クレームのケーキでも奢ってやろうと思っただけど、彼女はそれを素直に喜べるような心境じゃないらしい。先刻から俯いて黙ったまま、俺が注文したケーキに指一つ触れようとしなかった。

「なあ月代って、ケーキ取っちゃうぞー」

「うん……食べて、いいよ」

ようやく口を開きこちらに視線を向けたと思えば、その瞳は俺を映してなどいなかった。虚空を見据えるその双眸は、やはり美しい飴色に輝いている。どうしてこう美しく光っているのに、その色を濁らせてしまっているんだろう。最近になってやけに素直になった俺は、それをようやく「勿体ない」と思えるようになった。いや「なっってしまった」と言うべきなのだろうか。

月代の隣に座る小湊は、さっきからケーキ——好物のクレームブリュレに夢中で月代のことは見ていない。幸せを願う割には、薄情なものだ。

「俺は食わんけど、小湊が食うぞ。小さい腹に、どんだけ詰め込むつもりだか」

「うん……たくさん食べたらいいよ。わたし、あんまり食欲ない……」

「ヨヨちゃん、ちゃんとご飯食べてる？ それ以上痩せてもいいことないよ？」

小湊の言葉に少しだけ苦笑したけど、やはり次には俯いてしまう。元気がない理由はわかってる。でもそれを慰めることは俺にはできないし、一人でどうにかすることだって同じだ。俺の隣に座る白銀のテンシに視線を向けるが、彼女も小湊のようにケーキに夢中で月代には視線すら向けていなかった。俺の視線に気付いたのか、セレネは口いっぱいに頬張ったショートケーキをそのままに首を傾げる。

「可愛いな、セレネ」

「むぐう、まみまもうもまいまむ」

ありがとうございます、か。褒められるのに慣れているのか、照れる様子もなく、余り面白味のある反応とはいい難かった。照れて過剰に慌てて、月代にも何か変化がないかな、なんて妙な期待も二割程度。上手くないかないものだ。

「小湊も可愛いぞ」

「おう、任せとけ。でもね、陽君。私ね、可愛いってあんまり褒め言葉には思えないんだ」

「だろうなあ。違う意味でなら言われ慣れてそうだもん」

これにも、月代は反応なし。白いテーブルの上にあるのはセレネと小湊の腕だけで、彼女の手は、ここに着いてからはずっと自身の膝の上だ。

ため息一つ、店内を見回した。白を基調とした店内は恐らく女性客の華やかさをそのままインテリアにしておいてしまおうという店側の意図、つまり月代や小湊、セレネなんかそのまま飾りとなっているんだろう。月代の淡い色のフレンチスリーブブラウス、小湊の黄色をしたフードパーカー、セレネの水色をしたハイウエストワンピース。綺麗な彩りだ。

セレネの服は、自身の肌や髪と合わせて、空をイメージしているそう。ファッションにそこまでの意匠を見せるとは……大したやつだ。いしうだけに。

「陽君、何笑ってんの？　ちょい気持ち悪いよ？」

「ごめん、ちよつと思ひ出し笑い」

「陽君、笑うの下手だモンねー。時々綺麗な笑顔してるけど、愛想笑いとか思ひ出し笑いとか、そういうのは止めた方がいいと思うよ」

「よ、陽の笑顔は素敵だよっ！」

身体を竦ませて驚いたのは、どうやら俺だけじゃないらしい。小湊もセレネも、それぞれケーキを口にしながら硬直していた。

ようやく反応したと思えば、やはり俺に関することだけだった。いくら長い時を共に過ごしてきたとは言え、彼女はどこまで俺のことを妄信しているのだろう。苦楽を共にし、色々なものを共有して生きてきた。兄妹よりずっと、兄妹らしい絆を持っているとも思う。

でも、血は水よりも濃いものだ。本来、そうあるべきはずだ。

「ヨヨちゃん、元気でたならケーキ食べな？　ミルフィュー、美味しいよ？」

「う、うん……陽、いただくね？」

「たとと食べ。少し遅れたけど、誕生日ケーキだ」

そういえばあの日、結局ケーキは食べなかったな。買ってなかったというわけでなく、そういう空気じゃなかった。喪失感と、合わない人数に、少しだけ空気が白んでいた。その場にいたのは六人だったはずなのに、何度数えてもそう、八人分のケーキがそこにあった。おじさんを数に入れたって、一つ分余るじゃないか。

結局、捨ててしまった。月代に頼まれ、勿体ないという気持ちを振り切るように、おばさんはそうしたそうだ。

目の前のミルフィーユを寝かせ、フォークを刺し、月代はゆつくりとその一部を口に運んだ。咀嚼は十五回、少しだけ顔を綻ばせる。「あまい。おいしい」

女の子は砂糖とスパイスと素敵なものでできている、なんて、マザーグースの歌で歌われているが、なるほど月代の反応を見ているとそれも頷けるといふものだ。

「よかったですね。やっぱり月代さんは笑っているべきです」

「そうだよー。陽君のなんかより、十倍は素敵な笑顔だよー」

その素敵なものというのは、もしかしたらこの笑顔なんじゃないだろうか。きつと笑顔なんて義務付けるものでもないんだろっけど、セレネの意見には概ね賛成だ。月代の泣き顔なんて飽きるほど見てきたし、それが彼女の望むものじゃないこともよく知ってる。それが泣いているよりずっと難しいことだと知りながら、誰もが「ずっと笑っていたい」と願う。そしてそんな気持ちよりずっと強く、周りの人間はその人に「笑っていて欲しい」と願うのだ。

月代の笑顔は、多くの笑顔を作る。例えばクラスメート、子供達、例えば小湊やセレネ、そして環、家族――

「陽、ごめんね」

「別に。心配しなくても、俺は――」

言っつのは憚られたけど、それは口にするべきだったんだと思う。

「俺は、お前らの前からはいなくならんよ。特に月代なんか、俺が

いないと駄目だろ？」

目を瞬かせた月代は少しだけにはかんで、瞳を潤ませて微笑んだ。見る人に笑顔を運び、それよりずっと安寧をもたらしてくれる、柔和な笑顔だ。

「——うん。わたし、陽がないと、なんにもできないよ」

そう、ずっと一緒に生きてきた。だから、今更離れられるはずもないし、その可能性なんて考えることすらできないはずだ。少しだけ心配になって、それよりずっと、安堵した。

「でもどう考えても逆だよ。どこからどうみても、陽君がヨヨちやんに依存してるもん」

「余計な茶々を入れるな、いい感じで月代が納得してるんだから」

「料理以外の家事もできませんし、勉強もできるって程じゃない。スポーツなんかも、結構互角ですよ」

そんな世間の評判にも慣れたといえは慣れたけど、やっぱり、

「空しいから言うな」

月代は笑った。声を上げて、可憐に笑んだ。

恐らくという推測の域を出ることはないが、残すところは月代のおじさんと子供達、それから両親に親戚と——月代がもう一度。月代はあの時、心根までそれを信じていたわけじゃなかった。だからこそだろう、ケーキと言葉だけで立ち直ることができた。セレネはもしかしたら、それがわかっていたからスル・クレームについてきたのかも知れない。ありもしない希望に縋るような人間——テンシじゃないんだ、セレネは。

飄々としながら朝食のトーストを頬張り、それを甘いミルクティーで流し込むと、セレネは喉を詰まらせて呻いた。どうやら咀嚼が足りなかったようだ。

「水、汲んでくる」

「おね、が……う」

言葉は言葉にならず、セレネは空に縋ってテーブルに倒れ伏し、

そのまま無言になってしまった。慌てず騒がず、ゆつたりとした動作でキッチンに入ると、そこにいた月代に一言告げてから水をコップに注ぎ、俺はそれをセレネに渡した。先ほど出たばかりのキッチンからは、月代の苦笑だけが伝わってくる。

一気に飲み干し、セレネは盛大に息をついた。

「し、死ぬとこでした……」

「テンシって、喉詰まるんだな。無意識なら幽体になるんじゃないか？」

「常に意識するのに慣れちゃって、逆に意識しないと無意識になれなくなっちゃいました。なんというか、自分でもどうかと思います」
「パラドックスなのに、答えが出てしまっている。これもある種のパラドックスじゃあないんだろうか。」

食べたものはどうなる？ セレネの身体に入っただけは既に幽体なのか、それとも現実にあるまま幽体の中を走るのか——その場合、透き通って地面に落ちてしまいはしないだろうか。そもそも、セレネの身体が“そのまま”現界すること自体、大きなパラドックスなのだ。疑問を持つてはいけないこと、世界の俺に対する「操作」が誤ったのか。

「陽介さんは、触れる方が好きですね？ あたしもここで三週間足らず生きてきて、触られるのが好きになっちゃいました」

セレネに触れることといえば、精々手を握ったり肩を叩いたりする程度——それでもアマツカから光臨したセレネにとっては、未だ知らぬ「未知」だった。だからこそだろう、それに強い憧れを見せることもある。手を繋ぐというのは、大抵そういう時だ。

「ねえ、陽介さん。ほら、触れて」

差し出された手を握ると、セレネは俺の手をとってその顔へ導いた。出会ったあの日、安否を確認する為に触れて以来のそれは温かく柔和で、艶やかで滑らかな処女雪よりも強く心地のいい、至高の芸術だ。触れていると毒されてしまうのに離れられない、中毒性すら持っている錯覚してしまう。惚けた表情をするセレネの顔もそ

れを助長して、しばらくは手を離すことができなかった。

「温かい手。あたしが生まれたのは貴方の為——相性はよくて当然ですけど、それでも……素敵な感覚」

陶然と呟くと、セレネはその手で頬を擦った。その白い雪面を滑ると、その感触に驚く。まるで吸い付くようで、俺の手と完全に合致したような感覚。なるほど、相性がいいというのも頷けた。

「麻薬のよう。気持ちよくて離れたくない……でもこのままでしたら、あたしは墮落しちゃいます」

「どうして、そう思うんだ」

「どうして？ わかるでしょう」

使命に生きるセレネが、俺に依存することなどあつてはいけない。それは彼女にとって何よりの墮落だろうし、その時彼女が感じるのは麻痺した快樂だけだろうから、それは正しく“麻薬”だということ。

何ができるだろうと考えても、何も浮かびはしない。ただ唯一は、その使命を受け入れ全うし、全てを成し遂げることだけ。セレネはその時、変わっているだろうか。

「これでいいんです。快樂は、刹那で」

「俺は、離したくない」

何も考えず、ふと口をついて出た言葉は、完全に理性の手綱を手放したような発言だった。不用意だったと気付くのは、その数瞬後だ。

「——ど、どういうこと？ 陽って、そ、そうなのかな？」

それを月代が聞いていたのが嬉しい誤算だろうか。セレネの頭にその言葉が浸透する前に話をはぐらかし、話題を月代に移すと、今の発言を自分で覆い隠した。

でもどうしてだろう——なかったことには、しなくなかった。

「そういえば月代とあんまり触れ合わなくなったの、いつ頃からだったかな？」

懐古はどの程度の時間を遡るだろう、月代は頬に人差し指を立て

て首を傾げたまま、黙り込んでしまった。元々二つ以上のことを同時にこなせる器用な人間じゃないから、先ほどの動揺も忘れてしまったのだろう。

誤魔化したつもりはなく、純粋な興味だ。セレネに触れてその温かさに気付くと、ふと彼女の現実味に気付き、彼女と付き合うことで感じる浮世離れから帰ってくる。そこに月代がいたから、それがやけに気になった。

一度手を叩いた月代は「あ、」と呟き、セレネの隣にある椅子を引いて、そこに腰掛けた。

「受験期くらいからかな。勉強に必死になってたら、いつの間にか手も握らなくなっちゃったね」

残念といえば残念、月代の表情からもそれが感じられる。

「ちよつと前にお前が俺の手握った時、なんか久しぶりだなって」「え？ 手、握った？」

あの日、俺がいなくならないようにとその手を握り締めていたことを、月代は一切覚えてはいないらしかった。その笑顔に翳りなく疑問以外の感情は俺には窺えない。

「柔らかい手だった。セレネとどっちが気持ちいいかな？」

「わ、わたしだよ。セレネさんはほら、肉付きがよくないから、肉のあるわたし……言ってて空しくなってくるけど、わたしの方がほらっ、ふかふかつ」

慌てて疑問を封殺し、特に意味もない——ある一点においてのみの効力を発揮する、精一杯の自己主張をする月代は、セレネに対して多少の劣等感を抱いているのだろう。言葉の端々から、それが僅かながらに感じられた。

向かい合って座る月代の右手は今、テーブルを越えて俺の目の前に差し出されている。惹かれないと言うと嘘になるけど、こうも露骨な感情表現だと少したじろいでしまうのが本音だ。

「……この右手をどうしろと？」

「取るんですよ、陽介さん。その後気が済むまで舐め尽くしてください」

さい」

「わ、わ、ダメだよつ。舐めたらダメだよつ。きたな……汚くはないけど、でもダメだよつ」

それでも手を引つ込めたりはしない辺り、その期待値というのは相当なものなのだろう。意識して彼女に触れたのは、結構に以前だったと思う。

「ほら、陽介さん」

「ああ——うん。改められると、なんか照れるけど」

少しだけ鼓動を早めながら、左手でその小さな手に触れた。

途端、痺れが身体を襲う。それは鋭いものでなく、鈍くもなく、敢えて形容するなら「甘い」という言葉こそ相応しい、心地のよい痺れた。サキユバスが夢の中で精気を吸い取ったなら、或いはこの程度の快感だろうか。

その感覚は月代にも伝わっていたのか、陶醉しきった表情の月代の手は、微かにだが何かを求めるように、縋るように蠢いている。

「月代……すっげえ、気持ちいいんだけど」

「わたしも——いっちゃいそう」

呟いた月代の頬は僅かながらに紅潮していて、それが本気の快楽だと示している。どこにいくつもりかは知らないけど、相当の快感なんだろう。

見詰め合い繋がったまま、幾許かの時間が過ぎた。その快感は数秒後に消えてしまったけど、月代とこうして触れ合うのが久しぶりで心地良かったから、本当ならいつまでだってそうしていたかったくらいだ。しかし生憎とここには第三者がいるし、それは本来快くは思われない行為だった。

「あのーお二人さん、そろそろ離れたらいかがでしょーか？」

案の定の制止に、俺は平静を努め月代は狼狽して、急いで手を離すと、今度の彼女は違う意味で顔を紅潮させた。

「よ、陽、ごめんね？ 久しぶりだから、たくさん触っていたくてね？」

「わかってる。でも手握るくらいいつでもしてやるから、お互い自重しような」

「う、うん。ごめんね、セレネさん」

それを快く許容し、セレネは手を打った。滞っていた朝食の席を再開させ、いの一番にスープを啜った彼女は、時間が経ったにも関わらないその意外な熱さに、それを思い切り俺の顔に向けて吹くのだった。

7話

月代のおじさんに関しては、意外に簡単に信用してくれたし、それに取り乱すこともなく平素のままだった。それには素直に安堵したけど、それより少しだけの残念を覚えた。他でもない環が相談していたから、彼は俺の言葉を受け入れ、その後の尽力を約束しただけのことだ。娘は任せてくれと、真摯な態度で言ってくれた。意思の光も出、それを認識されることなく回収したのは、恐らくセレネがまたしても彼の認識を改変したからなんだろうけど、それを不快に思うこともなくなった。

認識の改変というのはそのままマインドコントロールを示し、倫理的な問題に直接関わってくるものだ。本来許されざるべき力。しかし、仕方がないで片付けた。この認識も或いは彼女が変えたものかも知れないけど、俺が助かるに都合がいいから、そう納得するしかなかったのだ。

どうしても許せないことがあるとしたら、それはこの現状だろう。皆が俺のことを信用しながら、「消えるもの」だと認識していると、ある種の異常事態だ。最初からそう思ってたけど、割り切ったつもりだったけど、それがどうしても辛かった。

俺には支えてくれる人がいるから、立っていられる。でも、それだけだ。立っているだけで生きていえると言えるか？ 生きずに、人を信じることができるか？

時間は残り一週間。俺を見る皆の目が、少しだけ痛くなってきた。「ねえ、陽？ 来週全国模試だけど、お勉強は順調？」

「あー、いつも通り。良くもなく、悪くもなく」

そっか、と笑う月代のその表情は安堵しているから、恐らく俺の基礎学力というのを信頼しているのだろう。事実としてはそう高いものでもないけど、標準的な大学なら勉強せずとも入れる程度の学力だ。

目標も目的もなかった。ただ平々凡々とした人生を送られればそれでよかった。その程度の勉強なら当然のようにしてきたつもりだったけど、今回は勉強などしていない。それより大事なことが原因で勉強に手が付かない上に、セレネも勉強熱心な方じゃなく、彼女と一緒にいると勉強という発想自体がまず浮かんでこない。月代がいつも通りに家に来ればまた違っただろうけど、彼女は「いつも通り」には来なかったし、勉強を催促することも、今の今までしてこなかった。

「志望校、決まってるのわたし達くらいだもんね。適当に書いた地元の大学なら、Aランクだったんだけど」

宙に投げ出した月代の左手が、ちょうど少しだけの風を作る。後ろを歩くセレネにそれが届いたかは知らないけど、少しだけいい香りがして、不快なアスファルトに一筋の清涼感を運んでくれた。

「……ちゃんと聞いている？」

「聞いているよ。考えてはいないけど」

悪びれたつもりもなく言うと、月代は口を尖らせて不平を零し、俺の袖を取った。

「ちゃんと考えないと、ダメだよ」

「……そうだな。将来のことだもんね」

「そうだよ。遠い将来じゃないし、すぐにやってくるよ」

ああ、まだこの子は俺の存在を信じようとしている。それが確信でなく、ただ自身に言い聞かせているだけだとわかるから、俺にはそれが耐えられない。自信というのは曖昧なもので、確信に至らしめる何かに出会わない限り、それは逆の立場である不安すらもたらしてしまう。これはその典型だ。

セレネを振り返り、問うてみる。

「セレネは将来のこと、考えてるのか？ モデルとかいけそうだけど」

「あたしは陽介さんといつちよに生きます。そういう風にしか生きられないように、なっていますから」

その言葉に嘘偽りはないはずだというのに、月代は過剰な反応を見せてセレネを睨む。こう言ってるんだ、「その言葉はわたしの為にあるんだ」と。

それも一種の進路だ。小学生くらいの頃、女の子がよく抱く「お嫁さん」という夢を、一種昇華させたものがそれにあたる。盲目的妄信的に意中の男を見て、その後を追隨していくその様は、ある意味ではとても人間的——女性的であるともいえる。

月代はともかく、セレネにそれが当てはまるかは、わからないけど。

「陽は、一緒にいたい人、いる？」

セレネから目を離し前に向き直った俺の顔を覗き込んで、月代は笑う。試しているのだろうかと思ったけど、俺が少し考えている間にその質問を撤回してしまった。

「うっん、なんでもない。うん……忘れてね」

少し考えた結果がこれだ。

月代、セレネ、それから小湊や環、両親におじさん達、子供達、俺に近い人皆と、俺はずつと一緒にいたいと思う。それが本音だ。けど、そんなに上手くいくはずもないし、一生を共にできる人なんて、片手で数えても余る程度しかない。

そもそも、俺の一生はどの程度残されているのだろう。いや、それ以前に天寿を全うできるか？

「セレネ、か……パートナーとしては、確かに最適かもな」

思わず呟いた言葉に、二人は対極的な反応を示して見せた。対極的というには、セレネのそれは余りに無表情だったけど、月代のそれを見るとそれすらも対に見えてしまうから不思議なものだ。

一歩進んで俺の左を歩き、セレネは笑う。

「でしょう？　そうですね、心移りがありえないんですから」

「わたしだって、心移りなんてしないっ！」

俺の胸を挟んで睨み合う二人を窘め、露骨なため息を零してみた。仲の悪い二人にでなく、不用意な自分にだ。

「月代さ、そろそろ自分のこと考えるよ」

それでも、不用意な発言は今更だ。

淡い希望というのは、とても厄介なものだ。縊るには薄明に目が追いつかず、見放すには余りに惜しい。だから俺は月代を手放すことができず、中途半端な態度で彼女を傷つけて、自分の不甲斐なさを嫌悪した。

その言葉は、月代の顔は見ずに、駅ビルの先に揺らめく空気を眺めながら口にした。今日も、朝からの猛暑だ。

「わたしは、わたしのこと考えてるよ？　わたしがこうしたいから、こうしてるんだもん」

この自信は、既に確信の域に至った月代の真実。

「だって、ねえ陽？　今まで隣を歩いてた人を置いていたり、その人が先に行っちゃったら、怖いよね？　不安だよな？　一人でなんて、歩きたくないよ」

無言のセレネを一瞥したら、一人の男として言うてはいけないことが脳裏を掠めた。

俺以外の誰かを探せ。そんな言葉がどれだけ月代を傷つけるか。けど……消え逝く人間として、それは必要な言葉なんじゃないかって、そうも思うんだ。

だから厄介なんだ。差し出されたのが藁のみだとしても、溺れてたら掴みたくなるのが人間だろ？　だから厄介なんだ、薄氷の上を歩くのは。

もうすぐ目的のブティックへ到着する。月代のお下がりばかりを着ていたセレネに、少しだけ服を買ってやろうという意向の下、炎天を頭上に歩いている。汗を拭うふりだけして、月代の言葉には返事はしないでおいた。

「セレネはワンピースが好きみたいだけど、他に着てみたい服とかあるか？」

「そうですねえ……あたしの身体に合えば、それでいいと思ういます」

一番最初にドアを押し開けたのはセレネで、その後に入り口で籠を取った俺が続いた。月代は、無言のままそれに随伴する。

「セレネに合うの、か……全身白だし、黒とかどうだ？」

「白と黒って、意外と冒険なんですよ？ 白には淡い色が合うんです」

「月代はどう思う？」

放した心を手繰り寄せ、月代は目を瞬かせた。周りに並んだ色とりどりの服を見て、少しだけ驚いている様子だ。

「え、え？ えと……ああうん、どうかな。肌綺麗だし傷まないなら、出した方がいいよね」

「あ、あと、Aラインが好きなんですよ、あたし」

月代の言葉にセレネの服を見ると、今は違うものを着ているけど、確かに頻度の高いワンピースも胸元から広がっていくタイプの物をよく着てた気がする。

「お人形さんみたいだから、パフスリーブとか、フリル系が似合うかも。フレンチパフなんかも可愛いよね」

月代も女の端くれ——端くれどころか女の子の見本みたいな子だから、ファッションの話には食いつきがいい。さっきまで手放していた精神はしっかりと胸の中心に捉え、笑顔でセレネの身体を巡視している。

「二人共、好きに見て来いよ。俺、隅で縮こまってるから」

「陽も一緒。一緒に選んであげなきゃ、セレネさんが可哀想だよ」

俺のTシャツの袖を掴んで離さない月代にため息一つつき、セレネの表情を窺った。いつもの笑顔のまま首肯だけ見せた彼女にそれを返し、袖を拘束された状態で店内へ歩を進める。

セレネは月代のことをどう思っているだろう。店の中心、ワンピース

イスのコーナーに辿り着いた二人は、時折俺を窺いながらそれらを
手にとって笑っている。仲の良いように見える二人が笑っている様
子は、その容姿からも目に優しい。

「胸元レースにしたらどうか？　かわいいよ」

「そうですねえ……月代さんとあたし、結構趣味が似てるんですよ
ね」

「そうなの？　わたしのお下がり、気に入ってくれてた？」

「ええ。あたし自身がこんな色だから、きつい色は目に痛いんです
よね」

そういえば、セレネが着ていた月代のお下がりはいつも、淡い色
だったようにも思える。さっきから話に加われない俺を余所に次か
ら次へ服を身体に当てたりする二人を眺めて、何とはなしに目を閉
じてみた。広がる暗闇の色は黒——確かに、セレネには似合わない
かも知れない。

月代にはどうだろうと考えたら、ふと思い出すことがあった。思い
出すと、後は自己嫌悪の嵐だ。どうして俺はそんなことを言っ
てしまったのだろう。今まで綺麗だと言い続けてきたのは虚構に過ぎず、
彼女は昔言ってしまったそれを信じ続け、傷付いてきたのかも知れ
ない。

そんな自責が痛くて慌てて目を開くと、そこには俺の顔を覗き込
むセレネがいた。希望通りのAラインワンピースを身体に当て、「
どうですか？」と視線で問い掛けるように笑っている彼女を見ると、
少しだけ放心に近い感覚を味わう。自己嫌悪も、心と共に空の上だ。
周囲は女だらけだというのに視線を集め、その意味のほとんどが
羨望だというのだから、彼女の美しさというのは正しく罪だ。

「陽介さん？　どうです、このワンピース？」

「ああ……うん、可愛いと思う」

「ですよー。オフスリーブっていうのも、なかなか素敵ですもん
ね」

光輝燦然とした銀髪が舞うように回ると、セレネは「これ一つ」

と籠にワンピースを放り入れた。予算は両親から受け取ったものが結構な額になるし、そうでなくても俺の財布には数万の現金がある――値札を見たら、愕然としたけど。

「一着二万って……どうなんだ、月代」

「え？　ん、ちょっと高めかな。でも、これくらいは普通にあるよ」
「月代の買い物に付き合ったことはあるけど、服は見たことなかったからなあ……驚天動地だ」

男なら――特に俺なら、二万もあればトップスからボトムス、下着までの一式が買えてしまう。

「でも男の子の方がかかるっていう子もいるよ？　結局、人それぞれじゃないかな？」

首を傾げる月代の右手には、どこから取ってきたのか一着のカーディガンが握られている。品の良い桃色をしたそれは、白いレースが僅かにあしらわれた夏物で、よく見るとその下にはそれと組になったシャツがかかっていた。

満悦の表情で俺から籠を取り上げたセレネは、そのカーディガンに一目惚れしたらしく、身体に合わせる間もなくその中へ入れた。
「素敵、素敵ですね！　あたしが着てたあのサマードレスに比べて、ここの服はなんて綺麗なんですよ！」

出会った時に着ていたあの白いサマードレスは、彼女の部屋に今も仕舞われている。理知的な彼女をここまで狂わせるんだから、ファッションというのは女の子にとって重要なものなんだろう。アマツカにあってその意味は余り重要視されていなかったのか、彼女の持つサマードレスには装飾品としての価値は余りないように思えた。新しい服が嬉しいのか、踊るようにはしゃぐセレネの細められた目の奥に輝く青空のような瞳が、小さく俺を捉えた。どうしてかはわからないけど、ずっと感じていたあの空虚な畏怖を、今は感じなかった。

色々なコーナーを回って、合計四着のトップスとそれに合わせたボトムスを二着買った。

店外に出た俺達を迎えた、少しだけ天頂に近づいた白い太陽は、肌を焼くと同時に空気の水を燃やし、揺らめく景色を作り出している。少しだけ幻惑したのは俺だけじゃないらしく、珍しく日傘と帽子を持たない月代も同様だ。色の薄く茶色に透けたその髪と、陽射しに弱い身体を持つ彼女がそれを持たなかったのは、たまには日の光を浴びていたいというものだったが、それも恐らく建前だろう。それによる副作用がどれだけ辛いかは自覚してるはずだし、幼い頃の経験で懲りていることも俺は知っている。

でも、何故だろう。そうまでして太陽を浴びる必要なんてないはずなのに、月代は手をかざしてそれを眺めている。「眩しい」と呟いて笑っているのは、彼女の本音なのだろうか。

「セレネは暑くないか？　今からどっか行くのか？」

「だいじょぶです。そうですねえ……そろそろお昼ですけど、どこで食べるんです？」

「月代？　どうする？」

手を下ろした月代が一步だけブティックから離れ、駅の方を指差した。

「あっちのコンビニでお弁当買って、いつもの公園で食べよ」

今頃なら子供達が遊んでる頃だと零し、月代は俺達の返事を聞く間もなく歩き出す。コンビニ弁当などの嗜好品を余り好まない月代がその選択肢を選んだのは少し意外だったけど、たまには羽目を外すのも大事だし、何よりレストランで三人の昼食を摂るよりずっと子供達と戯れた方が楽しいはずだ。逆らう理由もなく、俺とセレネは月代の後に続いてコンビニの自動ドアを潜った。

公園へ向かう道中、雨塚のほとりを歩くことになる。紫陽花は一度目の生を終え、その代わりに目に楽しいほどに鮮やかなハイビスカスが咲き誇っていた。池の中は変わらず水深すらも推し量ることのできない深緑色を醸し、その花のバックグラウンドとしては、俺の目には僅かばかりおぞましく映った。これが、セレネの“故郷”への出入り口だと思うと、少し恐々とした気分になる。

視線を戻した先に歩く月代の歩調は淀みないように見えるが、少しばかり疲れが出始めていることは想像できた。池から流れる涼やかな空気が彼女を癒すことばかり願い、その後を続いた。

「月代、皆いるか？」

「うん。少しだけど、声が聞こえるよ」

花々の向こう側から溢れた声が少しだけここまで届いているようだ。隣を歩くセレネもそれに耳を傾け、その歩調を速めると、月代と並んだ。ブティックのロゴが入った紙袋が、かざりと音を立てる。

「ここの子供達は、いい子たちばかりですね」

「うん。いい子ばかりで、わたしまで誇らしくなっちゃう」

ここからじゃ二人の表情は窺えないけど、察しはつく。今日は一日中機嫌がよかったから、今もきつと変わらない笑顔をしているはずだ。

公園に到着すると、遊具で遊んでいた十人ばかりの子供達が、一度に俺達の下へ殺到した。皆一様に快活さを全面に押し出し、笑い、俺達の周りを取り囲むと、色々な言葉を浴びせ掛けてくる。俺達の持つビニール袋やセレネの持つ紙袋の中身を尋ねたり、今日はこの子がどうしたとか、そういった些細なことが、彼らにとっては大きな事件にまで発展してしまう。それは素直に羨ましいとも思いつけど、どんな大きな事件に出会った時、彼らはその笑顔を崩してしまうのだろうか？と不安になることも、最近になってあった。

今まで付き合ってきたてわかるのは、事件性の大きな事柄に対し、彼らの脳はその処理能力を追隨させることができないということだ。

月代がしゃがみ込んで皆の相手を始めたのを余所に、俺とセレネは、月代の弁当だけを受け取ってから早々にベンチに撤退した。ここに来た時点で覚悟していたことではあるだろうけど、三人が同時に昼食を摂るなんてことを、子供達が許してくれるはずもない。聞き分けのいい子が揃っているとはいえ、やはり隣にいてくれる“安心”というものは子供心に離せないものなのだ。

「月代さん、困り果ててます。ふふ、可愛いのは子供達も月代さん

も同じですね」

「脳みその処理速度が遅いんだよな、月代って。しかも子供ってのは一旦はしゃぐと他人の言葉を待たないから、サラウンドで喋るんだよ」

セレネは笑うと、弁当を包むビニールを丁寧に破り、袋に入れた。

「眺めてると、それだけでおかずになりそう。お腹一杯」

「まあ、あいつが慌てるのは面白いな。見てて飽きない」

「意地悪な人ですね。あたしが言うのは、そういうことじゃないってわかってうのに」

そりゃそうだと肩を竦め、俺もセレネに倣うと、二人で同時に割り箸を割った。「いただきます」の声まで重なったから、今度は笑いを堪えることができなかった。

「こういうコンビニのお弁当というのも、意外に捨てたものじゃありませんね」

「最近は結構多様化してるしな。見ろ、この艶やかな里芋の煮っ転がしを」

「まあ……貴方も、結構可愛いところがあるんですね」

口元に手を添えてくすくすと笑うセレネになんだか気恥ずかしくなつて、俺はその煮物を一口に頬張り勢いよく咀嚼した。味わう間もなく飲み込んでしまったのを勿体なく思ったのは、セレネの笑い声がようやく止んでからだ。

「段々わからなくなりますね……大事なものって」

俺に向いていた視線を前方へ戻したセレネの先には、子供達と一緒にになって笑う月代がいる。太陽の下であの髪を見るのは随分と久しぶりだったけど、その美しさはやはり人工の照明に照らされるよりずっと上で、透き通ったそれは、色というよりずっと光だ。セレネの髪も同様に、ライトアップされた雪化粧のような魅力が俺の目を惹きつけた。

綺麗な人ばかり。友人の少ない俺でも、そういうところだけは恵まれたみたいだ。今の状況があるのは、或いは月代のおかげとも言

えそうだったから、心の内で謝辞を告げた。

これからも一緒。そんな願いを付加するのは、俺にとっては罪なんだろうか。

「陽介さん」

「どうした？」

「あたしは、貴方に生きて欲しいと思います。前よりずっと、純粹に」

その意図を量ることは叶わなかったけど、その笑顔がいつも通りだったから、俺は何気ない表情をそのままに「そうか」とだけ返しておいた。視線はずっと月代に向いたまま、セレネは弁当に添えられたきゅうりを噛む。小気味のいい音が響くと、「美味しい」と呟いた彼女の声が一層弾んで聞こえたから、俺も視線を落として鯖の塩焼きを頬張った。

咀嚼を終え飲み下すと、一息ついて上半身を前傾させ、膝に肘を置く。セレネの手がそんな俺の背中に優しく置かれ、ゆっくりと動き出した。

「使命を遂行するに当たって、感情は必要なものかと悩むこともありました。結局答えは出ませんでしたけど、あたしの持ってきた認識の中には確かに入ってるんです。少なくとも人間にとって、それは何よりも必要で、重視すべきものだって」

「そう、だな。色んなものが機械化した現代だから、余計にそう思うよ」

「じゃあ、あたしが世界に対して抱くこの感情は、ただのルサンチマンなんでしょうか……？」

逆らえない意思に対し、「これは使命だ」と無理矢理に納得し道徳化するのには、ニーチェによれば確かにそうと言えるだろう。

一瞬だけ悩んで、結局口にした。

「お前の使命感は、誰かに強制されたものか？」

「……何も、わかるません」

この姿勢では見えない彼女の表情は頭の中だけで描き、代わりに、

背中に触れる温かい手に身を委ねた。

「素敵な時間を過ごしました。使命が終われば、あたしがあの家にいる理由もなくなりますし、月代さんだってそれを望んでいるでしょう」

その手が余りに優しくかったから、或いはその言葉に何も違和感を覚えなかったからだろうか、何も言うことができなかった。物語の主人公だったら格好よく「行くな」とか「俺の傍にいろ」とか、そうやって簡単に引きとめられたんだろうけど……彼女のことを考えると、それが軽拳としか思えなかった。

「残り一週間。貴方の運命は、そこで一旦途切れます」

「——ああ」

「続きを紡ぐも消え去るも、全て貴方次第。あたしはその手伝いに、

「そこでようやく視線が合った。三週間——短いようで長い時間をセレネと共に暮らしてきたけど、やはりその表情以外を、俺は知らない。」

「貴方に、全てを尽くします」

月代に聞かれなくてよかった、なんてことを建前のように心に浮かべ、心の奥底に生じたこの気持ちを自覚しながら、それは封殺しておいた。どうしてだろう、その感情を肯定したらいけないような気がした。

月代が合流し、代わりにセレネが子供達の相手を引き受けてくれた。セレネが座っていた場所に月代が腰掛けると、その所作の近似に驚く。今更ながら気付いたのは、彼女達は非常によく似通っているということだ。例えばその色の薄さ、美麗な長身瘦躯、豊富な知識、どこか舌足らずな印象、そしてその所作。俺とセレネが繋がっているように、月代もそうであるような気が、少しだけした。

大根の漬物を頬張った月代は、「おいしい、かな」と、どこか違和感を残しながらも呟く。

「うーん、やっぱりあんまりおいしくないかも」

「月代はさ、もつと庶民の舌に慣れないとな。小中と、給食も残してばっかだったもんな」

「給食はね、ちゃんとしたお料理ならおいしいけど、既製品が多いから」

左手の人差し指で下唇を突きながら右手の箸でご飯を摘まむと、それをゆつくりと弄くる月代の表情に、翳りは見えない。

「子供の頃って、なんであんなに嫌いなものが多いんだろうね」

「舌が成熟してないからとはよく言うよな。苦味に弱いとかさ」

「そう、かなあ？ でも、好きなものもたくさんあったな」

そう、無条件にものを嫌いになれもするし、同じように好きにもなれた。無邪気に善悪を分けられるその時代というのは、何より尊く、そして何より愚かな時代だったろうと思う。

「でも、変わらずに嫌いなものと、変わらずに好きなものって、絶対にあるもんね」

「俺はそうだな……慣れた味が好きだな」

例えば月代の作る料理が挙げられるけど、それは口にしないでおいた。

「わたしも。ずっと一緒に生きてきたものが、わたしは好き」

「……そりゃ、光栄だ」

「わ、わわ、そういう意味じゃなくて……う、うん、やっぱり、そういう意味」

覗いた月代の顔には、言葉と裏腹に慌てた様子などなく、それは何気ない「好き」だったのかも知れない。そうとしか思えなかったのか、そう思うことを自身に強いたのかはわからないけど、その言葉素直に受け入れられるような生き方は、してこれなかった。

好きだって、そう言ってあげられたら楽になれるだろうか。俺も月代も、こんなに辛い思いをしなくて済むのだろうか。好意を抱いていることに間違いはないし、それが恋心であっても何の違和感も抱きはしない。それだけの付き合いをしてきた。

ただ、どうしても言えなかった。理由を挙げればキリがないけど、

最近になつて心に浮かぶ人が少しずつ変化してきたというのが最大のそれだろう。

「陽は、わたしのこと、どう思ってる？」

答えを求められたのは、だからこれが初めてだ。

「どうつて？」

有耶無耶にしようとするのは、だけどいつも通り。

「……すき？」

慌てて顔を背けたけど、ああ——もう元には戻れない。

答えを出す時だ。多分焦つてるといふだけの理由なんだろう。セレネの存在、俺の運命、色々な要素が束になって月代を追いつ回すから、彼女はゴールを急いだ。まだ、全てのチェックポイントは巡っちゃいないのに。

どうする？——どうしたらいい？

悩んだ挙句、出した答えはこれだ。

「好きだ」

「……あ」

「小湊も環もセレネも、皆好きだぞ」

「——そ、つか。それが、陽の答えなんだ」

そして視線を向けた彼女の両耳で揺れるイヤリングがそう、俺の答えだ。今までと変わりなく生きていく、彼女にいつも通りを課し、「平穩」を望む。

「あ、れ？ あ、はは、おかしいな……」

できるはずもない。彼女がその「答え」を聞いていつも通りでいられるはずもないし、過去に戻れないのもちゃんと理解し、その上で答えを出したはずだった。嗚咽もない涙を静かに流す彼女の頬を眺めながら、やけに淡然とした理性が不快で仕方ない。

やがて嗚咽が漏れ出すと、再度月代から視線を逸らして前を見た。セレネと子供達が変わらず笑い、手を繋ぎ、遊んでいるのを見て日常を自覚すると、今までの月代という平素が壊れていくのを感じた。今まで逆だった立場が崩れていく。非日常だったセレネが日常へ、

日常だった月代は非日常へ——どうしたらいいのか、わからなくなる。

「ひっ……うう……ごめん、ごめんね、わた、し、陽が、優しいから……ちょっと、勘違いしてた——」

散々迷って、俺は月代の頭を抱き寄せて無理矢理に膝の上へ導いた。少しだけ驚き竦んだ身体を慰めるように撫でてやると、彼女は俺の膝に縋って、零す嗚咽を少しだけ強くする。ベンチから溢れた彼女の髪が地面に付きそうになるのを掻き揚げて防ぎ、しばらくはこうして背中や頭を撫でてやることにした。

“ふった”その場で、本人が慰めるのは少しルール違反になる気はしたけど、他に代役を務めるべき人が見つからなかった。傷つけるのも慰めるのも、共に生きるのは常に俺でなくてはならない、なんて、義務感にも似たものを覚えながら、やはり自分の意思でそうしていた。

その時だ。セレネに貰ったあの白い指環が光り、そのまま月代の指へ消えていった。誰も気付かなかった変化ではあるけどそれは確かに起きた現象だったし、その後の異変にも目を見張るものがあった。

誰も気付いていない。月代の背中から純白の翼が生まれ一度だけ羽ばたくと、そのまま消えていったことに、俺以外に誰一人として——月代本人ですら、それを知覚することはなかった。

誰も、何も気付かなかった。それでいい。

「陽……ひう、やさ、優しい……」

「無理すんな。俺ほど酷い男はいないだろうに」

膝から零れるような震える声で、月代は俺の言葉を否定した。ふるふると首を振った彼女の鼻が擦れるのを感じて、少しだけ苦笑が漏れる。

「ごめん、ね？　すぐ、止める……止める、からっ」

「それこそ無理すんな。お前は、何でも溜め込みすぎだ」

「ごめ、ごめんね……じゃ、あ、……う、もすこし、こっさせ、て

ね」

顔は見せたくないらしく、月代は顔を伏せたままの籠った声で何度も謝った。

ごめんね。ごめんね。

どうして謝る必要がある？ 月代は純粹に俺のことを好きでいてくれて、俺はその好意を大した理由もなく突っぱねた。謝るのは、むしろずっと俺の方だ。

「ずっと、一緒に生きてきて――」

返事はなかったけど、構わず続けた。

「お前に何を感じていいのか、わからなくなった。好きなのに間違いはないし、それに疑問を覚えたこともなかった」

返事がなくなった代わりに嗚咽が止まったことによりやく気付き、月代が俺の声を聞いてくれていることに心底安堵した。或いは、下らない言い訳に付き合ってくれていることに、だろうか。

「兄妹、なのかな。それとも親友？ もしかしたら恋人かも知れない」

曖昧な答えを、解答用紙に書いていいのかわからない。もしかしたら点数が貰えるかも知れないけど、もしかしたら採点者を呆れさせてしまうかも知れない。

要するに、

「間違えるのが怖いんだ。後で後悔するのが、どうしようもなく怖い」

月代はそれを振り切って告白をしてくれたんだと思う。強さとかそういうことを言ってるんじゃない、それはただ自覚の違いだ。俺はまだ自分の想いを自覚せず、彼女はそれを真剣に見詰めて生きてきた。それだけの違いで、こうして二人が苦しむ結果になった。

悪いのは、俺じゃないか。

「だから、ごめんな。月代が謝る必要ねえよ。悪いの、俺だ」

言葉はそれ以上続かなかった。何を言っても言い訳にしかならないことはわかってたし、それ以上の言葉が必要だとも思えなかった。

こんな自分を許して欲しいなんて、そんな都合のいいことばかりが頭に浮かぶから、心底から自己嫌悪だ。

月代はしばらく頭を伏せていたけど、やがてのろのろと起き出すと俺の目の前に潤んだ瞳を晒し、その両手で俺の頭を挟んだ。

「そんな風に、思ってたんだね」

「ごめん」

「謝らないでよ。わたし、どうしていいかわかんない」

「……ごめん」

じりじりと肌を焼く烈日が俺達の間を通り過ぎると、二人の顔を伝う汗の粒まで容易に見て取れる。そこに見える感情がどんなものであれ、ここで向き合うことこそが最も大事なことなくじゃないかと、そう思う。潤んだ瞳で苦く笑った月代の唇が、そつと言葉を紡ぎ出した。

「謝らないで。何も、変わらないんだから」

そのまま額をぶつけ合つて、二人が同時に目を閉じた。染み込んできた彼女の想いがそのまま頭に入ると、知らなかった彼女を少しずつでも理解できたような気になる。どうしてそう思うのだろう、望んだ結末じゃないはずなのに、喜んでいるだなんて。

何も変わらない。その言葉に喜んでるのは、俺の方だ。

「月代には、ずっと無理させてきたな」

「無理なんかしてない。一緒にいると、楽しいもん」

これで、月代の辛かった時間にも終わりが来るのだろうか。耐える時間の代わりに訪れるのは、彼女にとってどんなものになるだろうか。

「家に帰ったら、環ちゃんに慰めてもらうんだ」

「やめてくれよ。あいつ、絶対文句言うぞ」

環は、月代に対抗している割には彼女を慕っているから、きっと俺が月代をふつたと知ったら剣幕で怒るだろう。そうに決まってる。それ以上言葉は必要なく、目を開くとそこに互いの瞳があった。茶色に透けたビー玉のような瞳を覗き込んでも、月代は嫌がること

なく見詰め返してくる。何かを吹っ切ったかのようなその輝きに魅入られて、そのまま彼女の背中に腕を回した。

こんなに細い身体に、色々なものを背負わせてきた。俺が背負ってきたものが、こんなにも大きかったなんて、思ってもいなかった。密着させた身体が、僅かに弛緩した。

「ごめんね、陽。温かいの」

「……どうした？」

「もう——」

そういえば——さっきき合わせた顔に流れる汗の量は、普通じゃなかった。

月代の身体から、完全に力が抜けた。慌てて覗き込んだ顔の瞼は閉じられ、その呼吸は速く浅く、いつもの甘い香りがしなかった。

8話

月代は数十秒の後に目を覚ました。一応彼女の家に運んでベッドに寝かせ、その額に濡れたタオルをかけてやると、力のない笑みを返してくれるようにはなった。公園に残してきたセレネは気がかりだったけど、環みたいに育った子ばかりじゃないから、子供の監督はいつだって必要だ。

目を閉じて呼吸を繰り返す月代は、目を覚ましてから一言も発しようとしなかった。身体に力が入らないから、喋るのだって辛く億劫のはずだ。

「大丈夫か？ どっか苦しくないか？」

返事の代わりに微かな首肯で答え、月代は一度だけ小さく呻いた。「だから無理すんなって……自分の身体がどれだけ日光に弱いかって、わかってるだろ？」

口元が微かに緩んだから、多分笑ったんだろう。こういうことは、俺と彼女の双方にとっても初めてじゃないから、呆れているか諦めているかのどちらかだ。

軽い熱中症だ。少し失神しただけだから、命には何の障りもない。

「心配させんなよ。俺、柄にもなく慌てちまった」

「あ、はは」

ようやく声を出してくれた。それは可憐な声で、可愛い笑顔と共に、小さく空気を震わせた。

「陽には、心配かけて、ばかり」

「俺が心配なのは、お前がいつも笑ってるからだろ？ もっと弱くなれよ」

「ダメ、だよ。だって、弱かったら——」

その言葉に続きはなく、代わりにため息が続いた。僅かに湿ったその息が空気中に散っていくのを感じてから、月代の額に乗ったタオルをどけ、そこにゆっくりと手を置く。少し、熱が上がってるみたいだ。

タオルを交換すると、彼女は「冷たい」とまた笑う。

「ごめんね。いっぱい、心配かけて」

「謝るなって。俺だって月代に心配かけ通しだから、お互い様だろう。そうじゃないと首を振る月代の額から、タオルが少し外れた。倒れるほど無理をして、どうして太陽なんかはその身体を許したんだろう、なんて疑問が少しだけ浮かんた。どうせ俺なんかには理解できないだろうけど、恐らく「ないものねだり」というやつだ。人間は自分にならないものへ強い憧れを見せるもので、月代には燦々と輝く太陽がなかった。

それが原因だ。昔も同じようなことがあって、その時俺は彼女に「健康な黒がいい」や「太陽とよく合う人が好きだ」など、そういうことを彼女に告げてしまった。ショッピングの日に思い出した自己嫌悪、月代のコンプレックスの根底には、俺の発言があったのだ。子供心にどれほど傷ついたかは計り知れないが、謝り弁解する機会を逸してしまったから、今の今までそれも続いてきた。

でも、月代は一人でそれを解決してしまった。俺はもうそれを嫌っていないと気付き、そして自分自身もそれに納得をした。覗き込んで、その茶色を逸らすことはなかった。

「やっと、この気持ちが伝えられたの」

「ああ、そうだな」

「知ってたんだよね？」

「ああ。全部、知ってた」

月代に責めるつもりはないらしく、俺の言葉に気を悪くする様子もない。ただ、その顔が少しだけ歪んだ。苦痛にでもなくもちろん快樂にでもなく、それは――

「はつきり言いたかったの」

開いた月代の瞳は、少しだけ濡れた茶色のビロード。

「好きだよ」

「……ああ」

「ずっとずっと、長い間たくさん——うん、今でも、陽のことが好き」

返事はせず、額のタオルを持ち上げて月代の顔を拭いた。汗は半分落ち着き、呼吸も粗方穏やかになっている。

「これだけ伝えたかった。こんなに簡単なこと、どうして迷ってたんだろうね」

俺が優柔不断だったから、月代はそれを察したから、言えなかった。そうだろ？

「ねえ、陽」

漏らすような声を返してやると、月代はようやく俺を見た。ああそうか——似てるんだ。この顔、この声、この全てが、あの人に。

「これからも、一緒にいてね」

答えは一つしか用意されていなかった。

それを伝えると、月代は安堵したように笑い、最後に目を閉じた。疲れただろうから、これから浅い眠りに就くんだろう。零れた声には安寧を感じられたから、俺はその髪を優しく梳いてやることにした。

「よかった……安心した」

環がそうだったから少しだけ期待していたけど、呟く月代の身体から光が出ることなどなかった。

でも、その声その寝顔に、ただただ安心した。昔犯した過ちを謝ることはまだできなかったけど、まだチャンスはたくさんあるだろう。そう思うことにした。

関係は変わらない。月代はいつも通りに俺の家から出かけ、そして休み時間には俺に話しかけてくる。大らかで優しく、いつも笑顔

で俺のことを見守ってくれた。

セレネは言う。皆みんな、似たもの同士なんだと。

月代の告白が何かしらの変化をもたらしたのは間違いないけど、それがどんなものがわからない。月代は笑ってるし、環だっていつも通り。セレネは知ってるんだろうけど何も言わない。変わったのは、俺だけか？——いや、そんなはずがない。また溜め込んでることくらい、俺にだってわかる。いや、俺だからこそ、だと思う。明後日には、俺の運命が決まる。消えてなくなるか、或いはこれから月代達と一緒にいられるか、それが今の俺にとっての全てだ。ここでようやく疑問に思った。

「なあセレネ。俺が消えるのって——」

首を傾げるセレネに構わず続ける。

「本当に、この世からだけか？」

ずっと疑問に思ってた。それが、月代の誕生日に感じた違和感で確かなものになった。何かが違うのに、それに全く気付かない。あの日からずっと付き纏う異常に、目を瞑っていられるはずもなかった。

セレネは笑い、口を開いた。

「当たり前じゃないですか。やですねえ、他にどこから消えるって言うんですか？」

「アマツカ。認識の世界ってことはつまり、この世の全てがそこに詰まってるってことだろ？ 要するに、俺は、皆の記憶からも消え去るって……そういうことだろ？」

疑問の正体はこれ。あの日感じた違和感というのは、多分こういうことなんだろう。

恐らくあの日、あの場所で、誰かがこの世とアマツカから消え去り、誰の記憶にも留まることなく忘れられていった。

「馬鹿なことを言わないでください。確証もなくあそこを語らないで」

「——疑問は抱くなと？」

はつきりと頷いたセレネの顔に迷いはなく、やはり表情が変わることもなかった。

おかしいことなんだ、それは確かに。真実在の世界に疑問を抱くことなど、あつてはいけないことだと、ちゃんと理解している。あの世界に「疑問」という真実こそあれど、疑問に疑問を抱くことなどあり得ない。

「何も考えず、貴方はただここに留まることだけに専念してください。それだけでいいんです。それだけで、皆さんが救われます」

俺の部屋に遊びに来ていたセレネは、自身の淹れた紅茶を一口啜った。

「その後を考えなくては生きてるとは言わない、でしたか？ 何を甘えたことをと思います。人の記憶なんてものは、それを証明するものがなければ、たった数時間で半分以上を忘れてしまうものなんですよ？」

「だから、それを証明するんだろ。それに、それはアマツカから消えてるわけじゃない」

「……聡い人。それが仇になるって、どうしてわからないんですか？ 忘れるというのは、記憶の片隅にそれを置いてしまうこと。アマツカから消え去るというのは、記憶からすらも失われてしまうことを指している。それがどれだけ違うかなど、記憶を認識している者なら誰だってわかる。」

今まで「ずっと覚えていて欲しい」なんて甘えた発想を持っていたこと自体、おかしいことなのだ。セレネは一度だつて「この世から」なんて言うてはいないし、俺を消すのが世界の総意ならば、その“世界”が真に住む場所にいられるはずもないのだ。

「そうですね。事実だけを述べるなら、貴方が消えるのはこの世界からのみでなく、アマツカからも——親御さんや月代さん環さん、光さんの記憶からも、全て消え去ります」

でも、と続ける。

「それがどうしました？ 全てあたし達には関係のないことです。」

だって、消えなければ済むここなんですもん」

「ああ、それはわかってる。訊きたかっただけなんだ」

意外そうに目を瞬かせたセレネに不器用な愛想笑いを向けて、ベッドから立ち上がった。隣に座っていたセレネに背を向けて立つと、そこに視線を感じ、どうしようもないほどに汗が吹き出てきた。

だってそうだろ。皆に忘れて欲しくなんかない。そんなの、人智を超えた恐怖だ。強がってみせてもセレネはそれを見通してるだろうし、俺もそれを理解している。嘘を見破られるというのは、誰しもが抱く焦燥だ。

「あたしのこと、信用できませんか？」

セレネの言うことはいちいち俺の気持ちを射るから、月代と同じくらい俺のことを理解してくれているのかも知れないなんて、そんな“期待”すらも抱いてしまう。

「あたしが貴方を消させません。この言葉が、信用できませんか？」
深く染み入るその言葉。

「信じられないはずない。今、誰より頼りにしてるのがセレネだ」

「——よかった。貴方があたしを疑ったら、あたしは……」

それ以上は続かず、ベッドの軋む音がそれに代弁した。

背中を感じる体温は、いつもこの手に感じていたものだ。腹に回った細腕が、微かに軋んで音を立てている。きつく絞められているはずなのに苦しくはなく、ただその感覚に「現実」を覚え、心からそれに安堵した。

吐息が首筋をくすぐる。髪が撫でる。肌が張り付く。言葉が震える。月代をふったばかりだというのに、彼女を「テンシ」以上に「女性」として捉え、意識してしまっていた。不謹慎だとわかっているはずなのに、止まらない。

名前を呟き、向き直ろうとした。それを阻んだのは俺の身体や意識、月代でもなく、セレネだった。

「駄目です。貴方がそうしたら、それこそあたしのいる意味がなくなっています」

「俺の為、なんじゃなかったか？」

「ええ、貴方の為です。そうでしょう？」

表情は窺えなかったけど、声は聞こえる。ただ、笑んでいた。

「——ああ、そうだな」

こうなることも頭の隅で理解してたから、この対応もある意味では予定通りだ。ただ、少しだけ残念に思った自分を、心の内で叱咤した。

結局、セレネは数分だけ俺の背に縋り、気が済んだら部屋から出て行ってしまった。

救われた、のだろうか。どの気持ちも曖昧で釈然としないからその感情を持て余し、その日は夜中まで寝付くことができなかった。

運命の日。夏らしい、晴れ渡る蒼穹がそこにあった。

朝早くに起きて色々なものを片付けるとか、そういう特別な日にするつもりだったのに、いざこの日が来てみると驚くほどにいつも通りの自分がいた。やはりこんな日にも、俺は変わりたくなかった。

朝は六時に目を覚ました。目覚ましの力を借りずに起きると、不思議と清々しさを感じる。月代と俺、環の蟠りも解け、この世界に対する不満が片付いてしまったからだろうか、気分は悪くない。ただ、そうして拗れのなくなった世界からいなくなってしまう、それすらも忘れられてしまうと思うと、それがとても怖かった。

どうして俺が。そんな疑念も、時折再燃してきた。考えても無駄ということはわかってるけど、それがどうしても知りたいと思ってしまう。唯一それを知ってるであろうセレネに訊いたところで、彼女を苦しめるだけに終わることも、ちゃんと理解しているはずなのだ。

学校は休み。小湊は最後まで笑っていたし、月代は環と仲良く遊んでいるだろう。

意思は全て集めることができなかった。恐怖に彩られたはずの心

は、不思議と穏やかだった。

時間は夜になるらしい。日付が変わる少し手前になると、俺の存在が少しずつ薄らぎ、やがてものに触れることすら叶わなくなり、視界から消えると後はあつという間だ。その瞬間に、小湊、環、おじさんにおばさん、両親と――月代の記憶から、俺はいなくなる。セレネは笑っていた。大丈夫ですと、何よりの安堵を運んでくれた。

昼食はいつもより豪勢なものだ。まるで月代の誕生日と同じメニューだったからセレネと一緒に笑い、それより更に豪華になるだろう夕食を楽しみにした。月代より貧しい舌が、この時ばかりは有難い。

子供達の意味は、セレネが集めてくれていたらしい。月代が倒れたあの日、家に運ぶ俺を見届けるように、皆の身体から光が溢れたとか。俺というちっぽけな人間の饑には、余りに贅を尽くした演出だ。だから、集められなかったのは、両親と月代だけだった。やっぱりという気持ちが大きいから、この人達を責めようなんて気は一切起こらない。

空いた時間には、ただひたすらに片付かない部屋のベッドから窓の外を眺めて、空を見ていた。ため息一つ零れることなく、ただそこにいるだけで深い郷愁に襲われ心が満ちる。

誰もいない。この世界に俺はたった一人だ。そんな錯覚を一瞬だけ覚えて、次に浮かんだのは皆の顔だった。小湊の闊達な笑顔。環の快活な笑み。月代の、慈母のような微笑み。セレネの静淑な笑い。顔が頭に浮かぶと――苦手な笑顔も、自然に溢れてきた。

プレゼントを貰った。それがどんな意味のものかはわかってるけど、それをどういう意味で捉えていいのかわからず、曖昧な気持ちのまま受け取った。小湊からは、月代と揃いのストラップ。環からは手作りのビーズアクセサリー。月代からは白い勾玉をトップにあしらえたペンダント。全部、身に付ける。

夕飯は和やかに進んだけど、両親もセレネも、揃って言葉は少な

かった。ここで両親から、皆より少しだけ遅いプレゼントを、その言葉と共に受け取った。「ハッピーバースデー」なんて、何よりの笑顔と一緒にだ。

俺の誕生日は、月代の一週間後に訪れることになっている。病院のベッドも一緒だったから、誕生日だって近いものだ。

誕生日に消える。生を受けたのがこの日なんだから、それが消えるのもこの日であるべきなんて、よく考えればそれも理に適っているじゃないか。セレネは、「安心してください」と笑っていた。

世界が闇に覆われると、代わりに人が作り出した煌びやかな光が町を覆い尽くす。普通の一軒家の高さじゃあ繁華街の方までは見えないけど、住宅街の街灯でもそれは十分に輝いて目に映った。これをここまで綺麗なものとして認識したのは初めてだけど――もしかしたら、これが真実在というものなんだろうか。

立ち上がる時には、余りの腰の重さに驚いた。穏やかな気分の割には随分と未練が残っていたらしい。

セレネの部屋へ向かい彼女と合流するまでに、様々なことが頭を過ぎり消えていった。

月代は小さい頃から俺や両親、身近な人の背中に隠れてばかりで、今のような社交性が備わっていたのはむしろ俺のほうだった。幼稚園など、教育を受けるようになり保育士のお姉さんに友達的重要性を説かれてからか、或いはそれを聴いた俺に注意されてからか、月代は次第に他人に話しかけることを覚えていった。反面、俺は寂しさを感じたものだ。

八歳になると、彼女に妹が生まれた。素直に誕生を喜んで、俺と二人で彼女を構い倒し、周囲を呆れさせた。驚くべき早さで育っていく妹――環と名付けられた彼女に、子供心に生命の神秘を感じた。中学に上がる頃には俺はすっかり捻くれ、友達の一人だって失くしていた。何のことはない、両親の仕事が忙しくなると笑い方を忘れ話し方を忘れ、そんな俺に周囲がついてくるはずもなかっただけ。ただ一人俺の周りをうろろろしていた月代の初めての友達が、その

まま俺の親友になった。小湊光と名乗った彼女は、いつも俺達の間で笑っていた。

受験が始まって、二人は一緒だった。俺が月代のどちらかの部屋で勉強をしていたけど、俺がしていたのは月代を眺めることくらいで、彼女はそんな俺を笑いながら窘めた。環が俺達の周りを付き纏い出したのは、このくらいだったろうか。

一緒に上がった高校に、小湊も一緒になってついてきた。月代は笑った。

いつも三人で過ごしたっけ——何をするにも一緒だった。スルクレームにケーキを食べに行っても代金は割り勘、勉強も一緒、スポーツだって共にやっていたから、三人共が単純な性差など意識してはいなかったのだろう。けど本当は、あんまり大胆なそれには、少し照れるものがあつた。

一月前、一人の女の子が俺達の目の前に現れた。色々なものをぐちゃぐちゃに掻き回してもただただ微笑み、結局俺にとつて最も頼りになるヒトになってしまった。

俺が世界から嫌われた今日も、彼女は一緒に歩いている。

「素敵な夜……満天の星と、清輝する月」

宙を見上げるセレネの横顔を眺め、やがてそれに倣うと、視界には天高く輝いた星々の大海が入ってきた。魅入られるほどの、圧倒されるほどの光の奔流に流されそうになる。

「貴方の両親も、本当に素敵な方々でしたね」

「ああ。あの人達から生まれたの、今なら誇らしく思えるよ」

戻した視線の先で笑うセレネに翳はなく、彼女は再び星に魅入られた。

家を出る時、いつの間にか起き出した両親が玄関に立っていた。

「いつてらっしゃい」と微笑む彼らの身体から溢れる光は暖かな橙色をしていて、その上に掲げられた白い天傘もいつもより温もりに満ちているように思えた。

無言の時間は如何しばらく——疑問は全て解決しようと思った。

「訊いていいか？」

「どうぞ」

セレネがこちらを向くことはなかったけど、俺はそのまま彼女の頬を見続けた。

「あの日に消えたのって、誰なんだ？」

「あたしの息子。愚かで単純で……自慢の子でした」

「……よく、わからないな」

暗闇に光る蒼が俺を捉えると、その現実味に心底から驚嘆した。

あの空恐ろしかったこれが、ここまで穏やかに見えるなんて。

「あたし達の翼は、正しく天に昇る為のものでふ。天には何もありません。この世に跋扈する雑念やアマツ力の混沌、その全てから逃れる為の、自由の翼」

「そいつは、そうやって？」

「ええ。迷いはありませんでした」

だったら、月代の背中に生まれた翼は何だったのだろう。それはどんな意味を持ち、どんな役目を為したのだろう。

「あたし達というのは、意思の塊でしょう？ つまり、翼というのは意思の昇華を示します。月代さんの中から、とある意思が天に召しました」

あの指環の力はそうだったもので、それはセレネだけの力ではないらしい。意思を扱うテンシなら誰しもが持つ力で、それは一生に一つしか作れない貴重な代物だ。

「貴方です。貴方の存在意識を、月代さんから消しました」

存在意識というのは「俺が存在する」という「認識」ではなく、それを強く認める為の無意識下の「意識」だ。それを消すことで、月代が思う「俺」を、「特別な存在」から「ただの存在」へと変えていく。「それで『想い』が消えるわけじゃない」という言葉には、心の底から安心したものだ。認識力に差異が現れるだけ、というわけらしい。

要するに、彼女から意思を集める必要がなくなった、ということ。
「貴方は消えませんか。これで全員分が集まった。そうでしょう？」

目を細めてから、セレネは俺の手を取った。現実感の乏しかった彼女から受け取るものがここまで大きくなり、こうまで繋がれるとは思ってなかった。それはただ、純粹に嬉しかった。

俺の為に尽力してくれた。高嶺の花なんて言葉じゃ表せないくらいの女性が、俺に全てを捧げてくれた。

「本当に、よかった。あたしも、嬉しいです」

「それは、さ」

首を傾げる彼女に訊いていいものかと迷ったけど、「消えない」という事実が歯止めを狂わせていた。多分、余りに嬉しくて、その疑問を封じることができなかったんだと思う。

「使命を果たすことがか？ それとも……」

「どうでしょう？ あたしにもよくわかりません」

間髪を入れない返答に思わず立ち止まると、セレネの手を引っ張る形になった。白い肌が、闇に浮いている。

「どうしました？」

「どういう意味かはわからないけどさ、なあセレネ」

傾げた首をそのままに、握った手を強くしたセレネは、ただ疑問のみを表情に映す。いや、疑問以上に、戸惑いが見て取れるように思えた。

「俺、お前のこと好きだ。月代とは違った意味で、でもそれが友愛なのか親愛なのか恋愛なのか、やっぱりわからないんだ」

セレネの返答はこれだけだ。「そうですか」と、ただ笑った。

十数秒の空隙を埋めるように、最後に一つだけ残った疑問をセレネに問う。

「どうして俺なんだ？ どうして、セレネが生まれた？」

「——全て、月代さんの意思から由来します」

どうしても訊きたかったことを、セレネは丁寧に答えてくれた。

そこ——雨塚に着く頃に全てを話し終え、二人の言葉はようやく

途切れた。暗闇に溶けた池は水深どころか水面すらも不可視で、いつもの深遠をより深いものとしている。その恐ろしさはいつもより遠く深くまで浸透する、あの日のセレネが持った瞳のようだ。

無言の時間が幾許か過ぎると、二人の間に空間が生まれる。それは温かくも冷たくもなく、ただそこにあるだけのものだ。そしてそれこそが、真実というもののだろう。

小湊からのプレゼントを付けた携帯を取り出して時間を確認すると、十一時ちょうどを示していた。大丈夫、セレネは最善を尽くしてくれたはずだ。

でも、少し寂しい。多分こういうのを本当の“寂寥感”と言うのだろう。どこまでも空虚な心が、決して不快ではなかった。

手を繋いで池を眼前に立ち尽くす二人を、夏の湿った風が撫で去っていく。

「準備、始めますね」

「ああ、よろしく頼むよ」

手を離し向き直り、傘を開く動作をすると、そこに既に存在したかのように天傘が出現し、光を放った。色々な光が混ざり絡まり合っただけの周囲を取り巻いている。極彩色の光の饗宴——それは正しく絢爛だった。

「この全ての意思を、貴方の身体に注入します。雑念は捨て、この意思達のみを意識してください」

目を閉じ、先程見たばかりの輝石の束を頭に描く。それは明確な形を持つて脳に刻まれ、忠実に目の奥で再現されていき、やがて一つに収束した。高鳴る鼓動と、やけに落ち着いた呼吸を混ぜ合わせ、一つの呼気に収斂して吐き出す。

「落ち着いてください。ちゃんと上手くいきますから……」

目の奥に闇など広がっていない。この二色の白い光は、君にとてもよく似ている——

「っ！ 陽介さん、らめ！ 混ざり物があります！」

切羽詰った声を上げたセレネを耳が認めると、瞳をもってそれを

確認した。焦燥とした表情は初めて見るけど、やっぱり綺麗だ。

頭に描いたあの二つの白い光の内、どちらかが偽物なんだろう。雪のような冷艶な白と、言葉では表せないような精白色だった。君に似ているのは、果たしてどちらだろう？ 彼女の焦った貌を見て、不思議と平静を保っていられた。どこかで「俺は助かる」と確信していたのは、俺の胸を叩くこの白い“ヒト”のおかげに間違いないのだ。だから、わかる。

「出て、出てけっ！ あたしは、あたしはっ！」

「落ち着け、セレネ」

「でも、でもでも……っ！」

どうしてこんなにも真剣になれるのだろう。生まれたのは俺の——或いは月代の為だろう？ ああ、だから……

「綺麗な白が広がってる。この意思是多分、あの日あいつに貰ったものだ。まさか、混ざり物呼ばわりされるとは思ってたんだろうに」

「どこのどなたか知りませんが、余計なこと——」

「お前にやるよ」

「——え？」

そうだろ？ そうすれば、彼女に俺と月代以外の「生きる意味」が生まれる。そうすれば、セレネは自由になれるかも知れない。多分俺はそうなることを心の底からは望んじやいないだろうけど、少なくとも俺のことばかり考える必要はないと思ってる。

「今、出すから」

あの日胸に押し付けられた腕を想起して、自身の手で心臓を引き出すように、セレネの腕を引いた。その手に握られた光の精白色は、今も変わらず華麗に輝いていた。

「——とても、綺麗な光。混ざり物だなんて、信じられない」

「元々純粹な意思だったんだろ？ 俺の中に入れば、そりゃ混ざり物でしかない」

「……そうですね」

ようやく落ち着いたのか、セレネはいつも通りの笑顔を取り戻していた。引いた腕を自身の胸へ遣り、その光を差し入れた。

「温かい意思。これが誰のものかはわかりませんが、その気持ちを肌で感じます」

陶醉するセレネを見ていたかったけど、時間がない。

「準備、続けてくれ」

「ああ、すいません。では……」

セレネは天傘を持ち直し、俺の上に掲げた。まるで天から星が降ってきたような美しい錯覚——白い空が雨を降らすと、地上の人はそれに濡れる。俺の身体には、そうして皆の意思が沁み込んでいった。

色々な意思、だけど統一された意思。俺が消えるという悲しいはずの認識は、どうしてか胸に入ると温もりとして知覚された。

「もう少しです。もう少しで、貴方が確立される」

恐怖を感じていた割に、気遣うのは彼女の表情だというのだから自分というものはわからない。必死になりその蒼を湿らせる彼女の貌が歪むのを見ていると、こっちまで汗ばんできてしまう。それは自身の焦燥でなく、ただ彼女のことが心配でならないからだ。例えば今、彼女の顔は今までに見たことのない汗に塗れているだろうか、なんてことがやけに気になった。

「大丈夫。助かるから。消えないで、お願い……」

いつも冷静なものだと思っていた。どんなことがあっても笑顔で、慌てたり焦ったり、そういうことなどあり得ないと。

だったら彼女は何だろう。天傘を掲げ、もう一方の手を俺の胸に乗せた彼女は、それこそ今にも消え去りそうなほどに儚い印象を受けた。それなのにどうしてか、そこに“在る”ということだけははっきりと知覚することができるのだ。

やがて全ての光が俺の中に入ると、セレネは放心したように開いたままの天傘を手元に落とし、嘆息した。

「終わり、ました」

「お疲れさん。よく頑張ってくれたな、俺なんかの為に」

「貴方が、あたしの全てですから」

そう微笑んだ彼女が言う“全て”がどんなものかはわからないけど、ただ俺の為に生きてくれた彼女には感謝の念を禁じえない。いつ生まれたかも知れない彼女の、この世界での今までの時間は、全て俺の為に充てられてきた。

今着ている服は、以前買ったばかりの桃色のカーディガンだ。彼女の一番のお気に入り、彼女への返礼になっただろうか。華美な衣装と可憐な微笑みは正しくテンシそのもので、ただ人間に慈愛という恩恵のみをもたらしてくれる、人間を超越したものとも思えた。彼女の瞳が俺を捉え、微かに笑んだ。

「後三十分……変化が現れるならもうそろそろですね」

「今のところ、何も無い、よな」

「当たり前です、だって——え？」

しかし次の瞬間、暗闇の中で彼女の表情が歪んだ。焦燥と不信と戸惑いに満ちた、らしくない表情をしている。異変は見当たらないはずなのに、彼女の視線は俺の顔を捉えてはおらず、ただ下にはかり向いていた。

どこに、何がある？ 答えは、彼女の視線の先にあった。

俺の手が、闇に溶けていた。そこに在るべき色がなく、ただそこには深い黒が存在するのみだ。どうして、どうして——今度ばかりは、俺だって平静じゃいらなかった。

「なんで、どうして、あたしはちゃんとやりました！」

「わかってる！ セレネは……！」

セレネは万全を整えてから臨んだ。それは間違いないし、疑ってなどいない。ただ「俺が消えそうだ」という純然たる事実がここにあるだけで——そしてそれこそが、彼女の全てだったのだ。

緩やかに、しかし確実に薄らいでいく俺という存在。指の第一関節の向こう側が見えると、その次には第二関節が闇に消えていく。それを見るセレネの貌は、いつものような美しさを見ることができ

なかった。

「何が、何が足りないの？ 教えて、何が！」

「落ち着け、考えろ！ 今まで俺を見てきてくれた中で、俺のことを強く考えてくれた人……」

落ち着いて考えることなんてできるはずはない。俺だって同じだ。八代家の皆からは淡い青をした光を、小湊からは乳白色、子供達からはそれぞれたぐさんの、両親からは暖かな橙色の意思をそれぞれ貰った。クラスメイトからしてみれば俺なんて「その他大勢」の一人でしかなく、強く想ってくれる人なんてそれ以外には見つからない。なら、誰が？

考えろ、考えろ。

「誰？ あたしの邪魔をするの、誰？ 邪魔しないで、お願いですから」

誰？ 俺の頭を占めるのは、一体誰だ？

わからない自分というのは、想像以上に厄介者だった。頭の片隅に現れているはずの小さな影を捉えることができずそれを理性で追い縋ろうとしても、そもそも理性などというものでそれを把握することなどではしないのだ。だってそう、それは決して真実などではないのだから。

時間ばかりが過ぎていく。既に掌を見ることはできず、それを確認する為にセレネの手を掴もうとしたけど、やっぱり無理だった。非現実的な現実には目の前が真っ暗になり、それで自分がいなくなったと錯覚してしまう。焦るなと言いつつも聞かせても、「最悪」のシナリオが頭から離れず、絶望ばかりが脳裏を過ぎる。

セレネの声も次第に切羽詰っていった。既にいつもの余裕などなく、辺りの闇には彼女の声が遠く響き渡っており、その存在を具に確認することができた。セレネはここにいるのに、俺はここにいないことができないのだろうか——皆、月代ともここで「さよなら」なのかと思うと、とても彼女を氣遣う余裕などなくなっていた。

必死になって彼女の腕を掴もうとした。掴んで、問いただしてや

ろうとした。すり抜けるばかりで彼女を捉えることなどできないと知りながら、それを何十回、何百回と続けてしまう。

互いの汗が混ざり合い始めた、残り十分ほどを残した時のことだ。セレネの貌から焦燥が消え、代わりに爽快で穏和な笑顔が浮かんだ。いつものセレネのようで、それでいて月代をも思わせる笑みだった。

「——ああ、そう、なんだ」

「どうした？ 何かわかったか？」

返答はなく、セレネはその代わりに胸に手を当て、背中を丸めた。そこから生まれ広がった、白く大きな翼。

「……どうするつもりだよ」

「全部、あたしのせいでした。貴方の運命も、今貴方が消えそうなのも、全部全部、あたしのせいでした」

何もかもを理解し納得し、その上で彼女がやろうとしていることは、いくら俺にだって想像くらいはつく。その翼が、その考えを肯定していた。

「駄目ですね、貴方を救うつもりで今まで生きてきたのに。これも何かの皮肉でしょうか」

一度だけはためいた翼は大きく広がり、その輝きが夜の闇を優しく照らす。今までに見てきた意思の光すら霞んで見えるほどの美しい光が瞳孔を突き抜けると、脳髓が焼かれそうなほどの刺激を覚えた。その刺激は、とても甘美なものだ。

「どうしてでしょうね？ 切っ掛けは今やわかりませんけど——」

その微笑みは、少しだけの悲しみを映しているように見えた。もちろんそれはただの錯覚なんだろうけど、少なくともこの笑顔を見ていたいとは思えなかった。

「貴方のこと、好きになっちゃってました」

ああ——ようやく理解した。二人が繋がっていて、俺とセレネが同じ感情を共有することに、何の疑問も抱くはずはないんだ。

「友愛なのか、親愛なのか、それとも恋愛なのかは皆目検討もつきません。ただ」

「ただ？」

聞きたかった。ただ純粹に彼女のことを知りたかった。

「ただ、あたしは貴方を強く想ってしまっています。思ってしまったんです」

消えないで、と。

そう呟いたセレネの貌に悲しみは既になく、ただそこには全てを割り切った強い女性がいた。俺のことを強く想い、俺に消えないで欲しいと願い、それ故に悲しみの源泉となってしまうことに呵責など感じる必要はないのに、ただセレネは笑っていた。俺が彼女を責めるつもりもないことを、彼女はちゃんと理解しているんだろう。残り五分。俺の四肢は既に夜に消え、そこにあるのは薄らと溶けた黒い影のみだ。それでもセレネのことは見えた。まだ、知覚神経をなくしたわけじゃあない。

「一度だけ、触れていいですか？」

「断りなんか、いらないだろ？　好きな人と触れ合うのに、どうして許可なんかいるんだよ」

「じゃあ、お願いします。あたしが消える前に、思い切り、思い切り抱きしめて」

セレネは理解し、その上で懇願した。なら、それに応えられなくてどうする？

俺は裏切られるのが怖いから、期待を裏切るのが怖いんだ。今の瞬間、俺はその期待に応えられないことを十分に理解している。納得だつて同じだ。もうほとんど見えないこの腕では、彼女に触れることすら叶わないんだろう。

抱きしめていいのか？　こんな俺に、その資格があるのか？　一度だけ頷いたセレネに伝えるように、俺はその腕を彼女の腰に回した。「貴方に触れるたび、痺れるような、それでいて穏やかな快感があたしを襲いました。手を繋いでいると、貴方と深くまで繋がったような感覚さえ味わえました」

後悔はない。俺もセレネも、そう言っていた。

「どうしてでしょう……」

目を閉じたから見えはしないけど、何故だかセレネの声は震えていた。

「貴方がわからない」

二分。残った時間はそれだけで、それを過ぎれば俺という存在は全ての人間から——俺が今この腕に抱く白銀の少女からも、消え去ってしまう。

考えずともはつきりしていた。俺は平静すぎた。消え去る運命にありながら、何も変わることがなかった。その理由だ。今まで、全てを投げ打つ覚悟もなく、希望に縋ることもなく、日常を平素に過ごすことができたのは、彼女のおかげに他ならない。彼女から消えることはつまり、彼女が生まれてからこの時間までの意味すらも消えてしまうことを示しているのではないか——たった数秒で、それだけが頭に浮かんだ。

消えてしまう前に、意味を失くしてしまう前にと、セレネは俺の胸を突き飛ばし、後ろに跳んだ。宙を泳いだ腕の付け根にあるはずの俺の肉体は、既に見ることができなかった。

「あたしはいなくなります。この世の全てから」

「どうして——」

「あたしが消えれば、全てが元に戻ります。あたしは皆さんの記憶から消え去り、皆さんはあたしのいなかった頃と変わりなく暮らせる。多分、それが本来あるべき形なんですよ」

それにと続け、セレネは再び翼をはためかせた。

「あたしは使命を終えればどの道消える運命にありました。貴方が消えようが消えまいが、その後の世界にあたしはいません」

「それを知ってて、全部わかってて、どうして！」

その事実は余りに残酷だ。だってそうだろ、今まで俺に全てを尽くしてくれたのに、その報いなんて一切なかったんだから。一緒に摂った食事も、共に学んだ学校も買ってやった服だって、今この手に抱いた感触さえ、全てこの記憶から消えてしまふんだ。そして、

余分に汚れた食器やセレネが揃えた教科書、主を失った服、そしてこの温もりだけがこの世に残って違和感となり、俺達を苛むことになる。

声を荒げる俺に応えるように、翼が閉じ、また開く。閉じ、開き、その繰り返しを次第に速めていく。

「もう行きます。どうか生きてください」

「――行」

「ちやよなら」

言葉は最後まで続かなかった。俺の言葉を遮るように別れを告げた彼女は、迴光反照の如く夜の闇を消したその一瞬後に、既にその姿を消していたのだ。

自身の胸が見えた。腕と脚が姿を現し、掌の肌色もその健康を取り戻した。爪の先までが視界に入ると、そこに一粒の水滴が残っていることに気付く。池の水が俺の汗か、或いはそれは涙かも知れない。

ただ、そこにセレネは既になかった。そんな空虚に俺は、最期までセリフを囁んで締まらないヤツだったなあなんて、場違いにも思っただのだ。

エピソード

天は環り、月に光る

今日の朝食は豪勢にも生ハムのサラダがついている。奮発したと意気込んだ月代の笑顔は、既に見慣れて久しかった。この頃環まで一緒になって俺の家に来るようになり、時折どちらが朝食を作るかで喧嘩になる二人を見ていると、果たしてそれを歓迎していいのかわからなくなる。二人は今日も笑っていた。

夏休みに入り季節も熱を上げ、それに中てられた民衆は冷を求めて繁華街の隅を歩き交う。デパートの中にある一つのテナント、「スル・クレーム」もその例外でなく、とある女子高生はお小遣いの続く限り——バイトまで始め、その賃金が尽きるまでケーキを食べ続けていた。容姿も性格も女子高生とは思えないほどに幼い彼女は変わらず月代の親友を勤め、俺達の間で笑っている。ムードメイカーというのは時に恐ろしく、要らないムードまで作ってしまうから厄介だ。

俺はと言えば、いつものように月代の隣で偉そうにふんぞり返っていた。環という幼子まで侍らせいい身分だと、両親に揶揄されることも多々ある。それでも、いつも通りの無愛想を精一杯に歪め、彼女らの幸せに貢献しようと尽力していた。もう彼女らの幸せがど

ここにあるのかなんてわかつてはいるし、その望みがどうすれば為されるかもわかつている。ただ、それに踏み切ることができなかった。多分それは他に愛しい人がいて、その意味が月代に向ける感情と似ていたから、どちらにそれをぶつけることもできなかったからだろう。

愛しい人は静淑に笑う。白銀の髪を舞わせ、空色のビロードを輝かせ、白磁の肌を艶めかせ、ただただそこで微笑んでいた。

その意味がどうであれ、彼女はここにいてくれる。それがどうしようもなく嬉しく切なく、そしてその生きる意味が教えてくれた。彼女達の幸せは、とても似ているものだったのだ。月代には足りないものがない。それは才媛であり努力であり、屈しない心であり、そして他者を思う気持ちでもあった。

何かしらの存在を想うのに、欠落は本来欠かせないものだ。矛盾しているようでそれは正しい。人は常に「この人がいなくならないか」という恐怖を抱えているもので、それを意識せずに生きているものの、時にそれを再燃させるものだ。月代にはそれがなかった。俺が消えるなどあるはずがないと、欠落を否定してしまっていた。そこに穴が生まれる。

世界は、十八年の歳月に肥大したその穴を埋めようと、その意思に反する性質を俺に授けた。しかしそれにより俺の欠落は極大し、そこに気付いた世界の意思は、その双方の問題を解決するよう一つの存在を作り上げたのだ。

彼女はただ笑っていた。欠落を埋めようとそこに生き、地面に足をつけていた。

その使命は既に変革を遂げ、彼女の生きる意味はその効力を失くした。

彼女は今、月代の幸せの為に生きている。俺の身体に入っていた混ざり物——あの精白色の光を取り込んだ彼女は、俺と接触することで月代本人にも宿ったその意思を使命として、この世界に再び降りてきたのだ。アマツ力から消え去る一歩手前で、世界にそれを課さ

れたという。

月代の親友はその願いを彼女に託した形となる。小湊という名の光は、新しい命をそこに生んだ。

もう俺のことを好きだなんて言うてはくれないかも知れない。もう俺が彼女を好きだと言うことなんて、許されてはいないのかも知れない。でも、それでよかった。彼女がそこにいてくれれば、俺は好きただけ彼女を想える。それにそう、月代の幸せは俺だって願ってる。

彼女が俺と月代をことある毎に二人きりにさせようとすることで、彼女が何を想っているかは簡単に察することができた。

そんな彼女に、俺を想ってくれなんて贅沢で淡い期待を抱えることもあった。使命に生きるテンシがこの先どう変わっていくかはわからないけど、少なくとも変わる「可能性」を内包していることは、俺が一番よく知っている。

その時答えを出せばいい。女性として友人として、家族として、或いはヒトとして――

俺は誰を愛しているのだろうか？ その答えを。

「セレネ、月代が呼んでるぞー！」

エピソード（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489d/>

月は環て天に光

2010年10月8日14時46分発行